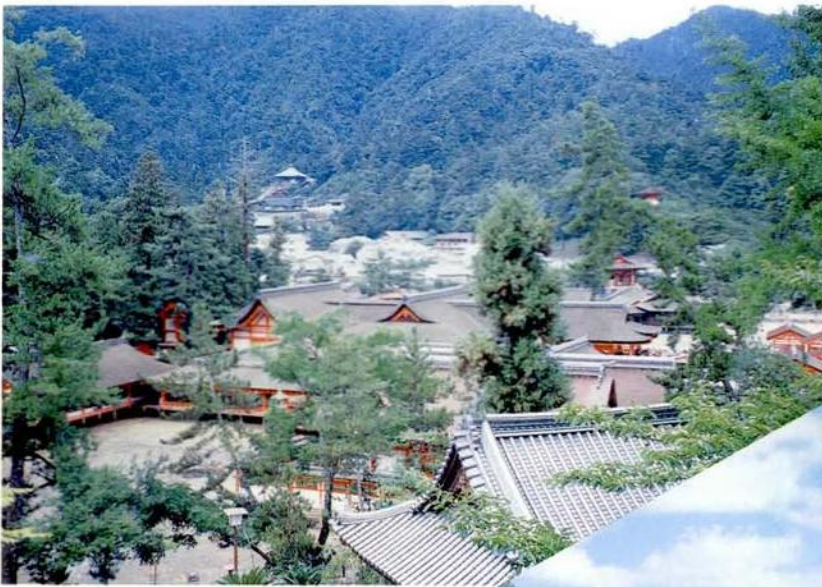


瀬戸内観光地域の形成と変容

—— 宮島としまなみ海道を事例として ——



浅野 敏久
フंक・カロリン

広島大学図書

1530415059



広島大学 総合地誌研究資料センター
ter for Regional Geography, Hiroshima University

2001年1月
January 2001

写真説明

表紙左上：千畳閣からみた厳島神社。背後に弥山原始林がせまる。

(撮影：浅野敏久)

表紙右下：1999年に開通した愛媛県大三島と広島県生口島を結ぶ多々羅大橋。

(撮影：Andrea Mammitzsch)

瀬戸内観光地域の形成と変容

—— 宮島としまなみ海道を事例として ——

浅野 敏久
フंक・カロリン



広島大学 総合地誌研究資料センター
Research Center for Regional Geography, Hiroshima University

2001年1月
January 2001

目 次

第1章 研究の目的	1
第2章 宮島としまなみ海道—観光地としての位置づけ	4
第1節 「瀬戸内海」の観光対象としての認識と2地域の位置づけ	4
第2節 観光入込動向からみた2地域の位置づけ	5
第3節 その他の指標からみた2地域の位置づけ	10
第3章 観光地・宮島の現状と住民意識	12
第1節 宮島の概況	12
第2節 観光の現状と問題	18
第3節 住民意識にみる「宮島」	25
第4章 観光地域しまなみ海道の現状と住民意識	49
第1節 しまなみ海道の概況	49
第2節 観光の現状と問題点	55
第3節 住民の意識	62
第5章 考察・結論	86
第1章 宮島と瀬戸田町の比較	86
第2章 両地域からみた観光地・瀬戸内地域の特徴	88
注・文献	94
アンケート用紙	97

なお、本研究のうち宮島分については広島大学総合科学部の学部内共同研究プロジェクト（平成11年度総合研究プロジェクト：巖島のアイデンティティ、研究代表者 佐竹昭）の一環として行ったものであり、地質、水文、植生などの自然環境面や文学、歴史、文化人類学など諸分野からも巖島のアイデンティティとは何かという問題にアプローチをしている。

また、しまなみ海道の瀬戸田町については、瀬戸田町史編纂に関わる調査により得られたデータをもとに考察している。

第1章 研究の目的

瀬戸内海・瀬戸内地域は、古くから景勝の地として知られる。ただし、瀬戸内海がひとつの観光地域としてみられるようになったのは、日本を訪れた西洋人の近代的なまなざしによるといわれる。西田（1999）によれば、厳島神社や大三島への参詣や、歌枕としての名所を訪れるなどといった、点として地域資源が認識されていたのが伝統的な日本人の見方であり、瀬戸内海というひとつのまとまった景観としてその価値を認識するようになったのは、当地を訪れ、その景観を絶賛した西洋人の評価からだという。実際、瀬戸内海という名称が用いられるのは明治後期からとされる（環境庁自然保護事務所HP）。しかしながらその後、世界に比類ないとされた多島美と白砂青松の景観は日本を代表する景観として国民に広く認知され、1934年（昭和9年）には日本で最初の国立公園の一つに指定されることになった。

ところで、瀬戸内海・瀬戸内地域は、今も昔も景勝地として愛でられるだけの存在ではない。多くの人々が暮らし、生産・物流上の要地として栄え、それを反映した景観が各時代時代に現れていた。瀬戸内の代表的な景観とされる白砂青松も、この地域に暮らす人々の日々の営みの結果、生み出されたものである。雨が少なく、やせたまさ土という自然条件に加えて、たたら製鉄や製塩、日常的な生活燃料としての薪炭材の利用が、山をやせさせ、松しか生えにくい環境を作り出した。加えて、植生に守られない山からまさ土が流出し海岸の砂浜をつくるもとになった。

瀬戸内海の多島美の景観は、今や第二次大戦後の臨海工業地帯の造成などの沿岸開発により、大きく変貌してしまった。日本の高度成長を牽引した太平洋ベルト地帯の西半分にあたる瀬戸内海沿岸には、コンビナートが建設され重厚長大産業が集積した。産業と人口の集積は、排水先となる瀬戸内海の水質を悪化させ、この海は毎年のように赤潮が発生するようになった。沿岸の埋立が進み干潟や藻場は失われ、増大する土木・建設需要に応えるための海砂の大量採取により海底地形が変わり、砂に変わってヘドロが堆積した（日本水環境学会編、2000ほか）。

一世を風靡した沿岸の工業地帯も、平家物語の盛者必衰のたとえではないが、日本の経済構造の変化とともに、構造不況業種の集積地に変ったり、リストラの嵐に見舞われたりしている。さらに、恵まれた自然環境を生かした農漁業も環境悪化や国際競争の荒波に飲み込まれて、より一層経済的に厳しい地域になっている。そして、地域の活性化が、都市や農漁村を問わず唱えられるようになり、観光をキーワードとした地域づくり¹⁾が進められている。

本稿では、このようにさまざまな出来事が時空間的に織りなされている瀬戸内地域について、観光面からみた特徴を事例を通じて考えてみたい。瀬戸内地域の理解のために観光だけでは明らかに十分

ではないが、瀬戸内地域にとって観光が重要なキーワードであることは間違いない。本稿では、瀬戸内の観光を考える上で特徴的な2つの地域、宮島としまなみ海道を取り上げ、観光と住民生活という観点から行ったケーススタディの成果をとりまとめる。

宮島としまなみ海道、この2つは、瀬戸内、特に西瀬戸地域を代表する新旧の観光地である。宮島には、日本の近世民衆の典型的な旅行形態ともいえる神社参りに絡んで、日本の大衆的観光の成立期からの歴史があり、文化遺産や歴史遺産に富む。また、宮島は、神域であったことと関連して、「耕して天に登る」といわれた農地の開発や多くの禿げ山を生み出した薪炭材の採取から免れ、比較的豊かな植生が残されている島でもある。一方、しまなみ海道にも大三島の大山祇神社のように由緒のある場所もあるが、多くの島は観光地というよりは、長らく1次産業や水運・造船を中心とした地域であった。これらの産業が停滞する中、1次産品（産業）と残された自然を活かした観光による地域づくりに力を入れている。しまなみの景観や山の斜面に広がるミカン畑、海の民の生活文化など、この地域は「瀬戸内らしい」と思われる観光資源に恵まれている。また、本四架橋などの大規模な開発プロジェクトが導入され、外発的な刺激を与えられた地域でもある。宮島としまなみ海道を取り上げることで、歴史・文化遺産のみならず、瀬戸内の風土に応じた産物や景観、新しい国家的開発プロジェクトの導入など、瀬戸内地域を考える上で、典型的な諸事象を対象とすることができる。

本稿では、この両地域を事例として、この地域の観光地としての位置づけや性格について再検討するとともに、それぞれの地域がどのように「観光」に対応しているのか（対応したのか）を住民の意識と対応に焦点を当てて考察する。ここで、住民の意識と対応に焦点を当てるのは次の理由による。

まず第一に、現在の観光地理学で課題になっているソフト・ツーリズムの視点からのアプローチを意識したためである。ソフト・ツーリズムは「やさしい観光」ともいわれるが、その「やさしさ」は環境に対する「やさしさ」と、住民に対する「やさしさ」の二つの側面からとらえられる。住民に「やさしい」か否かという見方からの研究は、発展途上国における観光に限ってなされる傾向が強いが、観光（行動ないし開発）と住民の生活との関係に注目することは、日本の国内問題としても重要である。観光客と住民との行動様式や生活観のずれや、観光客が期待する観光地像と住民が期待する観光客像のずれなどが、観光地域研究に際して重要な着眼点になる。将来性のある、持続可能な開発を目指すためには、住民の立場を十分に配慮しなければならない。

第二に、地域開発や都市計画への市民・住民参加が強く求められるようになってきている現在、地域それ自体や地域政策に対する、住民の意識と行動を知ることは大切である。本稿では、アンケート調査を主に論考しているが、むしろ、これだけで以上の要請に応じきれものではなく、あくまでも入り

口にすぎない。ただし、研究の出発点としては妥当なものと考えられる。

第三には、そもそも、ある地域が「観光地になる」ためには、当該地域の観光資源を外部がどう評価し行動するかが不可欠の条件になるが、それだけでは十分ではなく、むしろ、そこに住む人々が外部の評価やニーズをどのように認識し（時にはそれらを誘導し）、観光地たるにふさわしい地域を創っていくかが重要である。住民や当該地域で観光業に携わる人々の、その地域に対する評価・認識と、その結果としてなされる行動が、観光地域形成の出発点であり原動力であるといえる。そのため本稿では、西瀬戸地域の特徴的な新旧の観光地を例にとり、観光地に暮らす人々の意識と対応に焦点を当て、両地域の観光地域としての成り立ちと特徴について考察しようとするものである。

わずか2事例からより広い地域を考察することには無理があるが、既存の研究成果を参照することとあわせて、観光地域としての瀬戸内海・瀬戸内地域の特徴についても視野に入れた考察を行いたい。

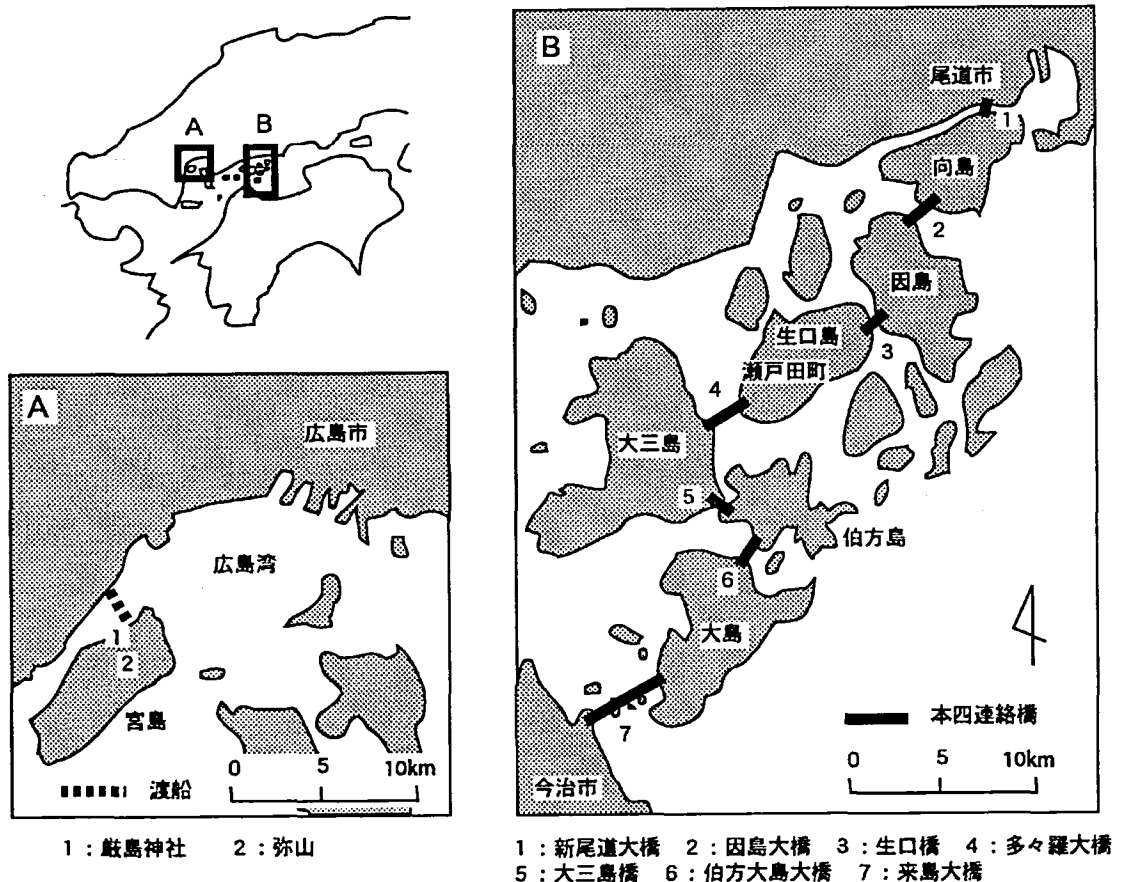


図2-1 研究対象地域

第2章 宮島としまなみ海道－観光地としての位置づけ

第1節 「瀬戸内海」の観光対象としての認識と2地域の位置づけ

瀬戸内海は本州、四国、九州に囲まれた日本最大の内海で、東西約450km、南北約15～55kmの広がりを持つ。この海に面する地域は1府10県に及ぶ（法令上関係のある流域府県は13府県）。流域人口は3,000万人を超え、流域13府県の経済生産額は、第1次産業約1.6兆円、第2次産業約45兆円、第3次産業約87兆円に及んでいる（日本水環境学会編, 1999）。

瀬戸内海の総面積は約22,000km²、流域の森林面積は約46,400km²に及ぶ。そのうち陸地の628km²と海域の約6,200km²（大阪湾、播磨灘、周防灘、伊予灘の大部分と燧灘の四国沿岸を除く海域）が、瀬戸内海国立公園に指定されている。国立公園には「わが国の風景を代表するに足りる傑出した自然の風景地」（自然公園法）が指定されるものであり、瀬戸内海国立公園は1934年（昭和9年）に雲仙、霧島とともに日本で最初の国立公園となった。

瀬戸内海をまとまったひとつの地域として認識するようになったのは、日本が近世の鎖国体制から開国の時代を迎え、日本を訪れた西洋人が、その多島海景観をエーゲ海やアドリア海に重ね合わされて賞賛したことをきっかけとしている²⁾。その後、志賀重昂が『日本風景論』において故事来歴を持たない自然の風景の美しさを論じたことや、田山花袋や徳富蘆花などの文人の旅行記などにより、日本が世界に誇る景観として瀬戸内海が多島美は国民に広く認識されるようになる。そして、日本が国立公園制度を定めるに際して、瀬戸内海は最初の国立公園となったのである³⁾。

瀬戸内海は、「静かな海面の多島海景観と、漁村や段々畑など自然と人文景観が一体になった風景が特徴」であり、「また、古くからつねに歴史の舞台として登場し、産業を支える自然の豊かさを持つ地域、重要な海上交通路として人々の生活に関わりをもちつづけた」ことが特筆される（国立公園協会・自然保護協会編, 1989）。本研究で対象とする宮島（厳島）には、故事来歴が多く、日本三景の一つとされるなど、近代以前から名所として、また行楽地として認識されていた。宮島は、日本の伝統的な観光・行楽と結びついた場所であり、日本人の伝統的な風景観の枠組みを支える名所のひとつであった。一方のしまなみ海道の島々は、信仰の地や海賊の根拠地などとして歴史の舞台に現れるが、宮島と比べれば伝統的な風景としてよりも、明治以後、評価が高まった近代的風景としての瀬戸内海が多島美を構成するものであろう。

田山花袋の文章に次のような一節がある。

「芳野嵐山の桜花に酔い、須磨舞子の春色に憧れたる旅客に、われは切に山陽の名区厳島を訪はんことを勧む。されど重なる目的は厳島そのものにあらずして、却って其間に横れる瀬戸内海の諸景に

ある事を記憶せよ。海之美, 山之美, 雲之美, 波之美の凡そ遺憾なく発展せられたるは, 日本国中広しといへども, 此瀬戸内海の右に出づるものあらじ」(田山花袋『続南船北馬』のうち「瀬戸内海」)

西田(1999)は, これを伝統的風景<須磨舞子><厳島>よりも近代的風景<瀬戸内海>の自然美を見よとの主張であり, 近代における風景観の推移をよく表していると指摘する。

宮島としまなみ海道は, この対照的に示された2つの風景をそれぞれ代表する地域である(図2-1)。この2つの地域が, 近代以後どのように変容し現在に至ったのか, 特に現在いかなる観光地になっているのかを本稿では扱う。広い瀬戸内海のわずか2事例ではあるが, 瀬戸内海という観光地域の成立と特性を考える上で, 歴史的な背景や観光地としての評価・認識の違いを対比しながら, 現在の観光地域の成り立ちを考察できる典型的な事例といえるだろう。

第2節 観光入込動向からみた2地域の位置づけ

観光の統計は正確さに問題が多いが, 大まかな傾向をみる上で参考になる。ここでは国立公園利用者数と, 各都道府県が行っている観光動向調査⁴⁾の観光入り込み客数を用いて, 宮島としまなみ海道の観光地としての位置を概観する。

図2-2は, 国立公園および瀬戸内国立公園の利用者数の推移をあらわしたものである。国立公園の利用者数は1960年代に急増し, 1970年代に低迷, 1980年代に再び増加し, 1990年代には景気の後退とともに減少傾向にある。これに対して瀬戸内国立公園は1960年代から今に至るまで, 多少の変動はみられるものの, ほぼ毎年4,000~5,000万人の入り込み客がある。なお, この変動を強調して描くと, 観光入り込み客数が10数年周期で変動していることがわかり興味深い(図2-3)。過去の2度のピークが1973年の第一次オイルショックの年と1989年のバブル崩壊の翌年にあり, 日本経済の波に依りて観光客数が増減している。瀬戸内海国立公園利用者のうち, 広島県と愛媛県分は837万人(1998年)であり, 全体の17.6%を占める。

瀬戸内海国立公園利用者が全国立公園利用者に占める割合は, 基調として下がり続けている。ただし, 三橋時代を迎え, ここ数年は割合が高まっている。なお, 比重を高めているのは, 北海道や九州・沖縄の国立公園である。自然を満喫するなら, 国内であれば北海道や九州・沖縄へ, さらに海外のリゾート地を指向するようになっているのだろう。

次に, 自然公園に限定しない観光動向についてみる(図2-4)。データの制約上, 複数の府県にまたがる地域間を単純に比較すべきではないが, それを承知の上で敢えて行くと, 宮島を含む広島湾地域, ならびに, しまなみ海道にあたる広島県瀬戸内海東部地域と愛媛県東予今治瀬戸内海地区への観

光入り込み客数は、瀬戸内海沿岸諸地域の中でも観光客の多いところで、いずれも年間1千万人を越える入り込みがあることがわかる。両地域とも、瀬戸内地域を代表する観光地の一つといえる。

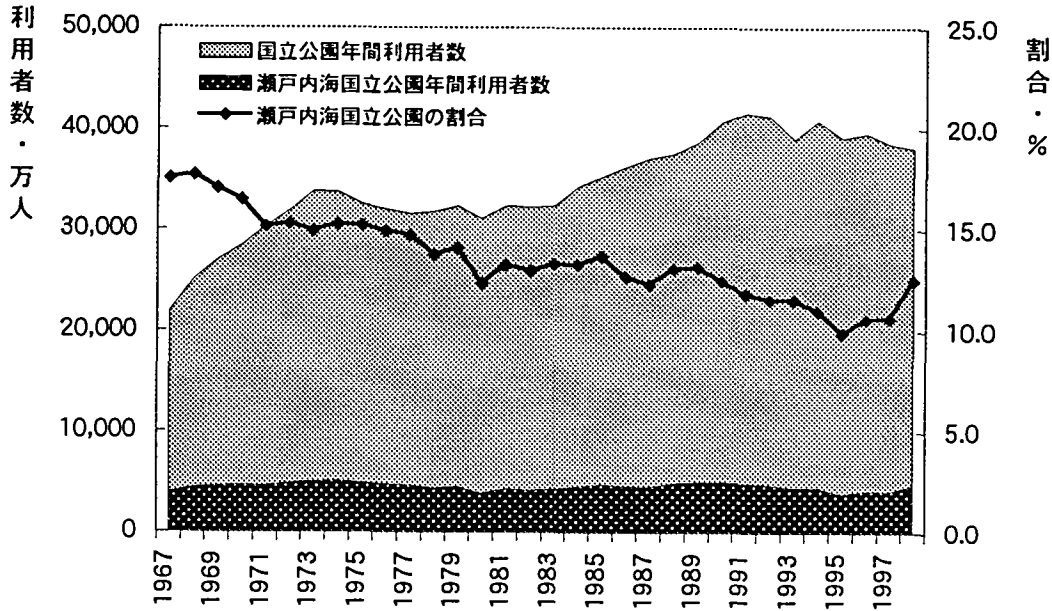


図2-2 国立公園利用者数の推移

資料 環境庁「自然公園等利用者数調」（平成10年）による

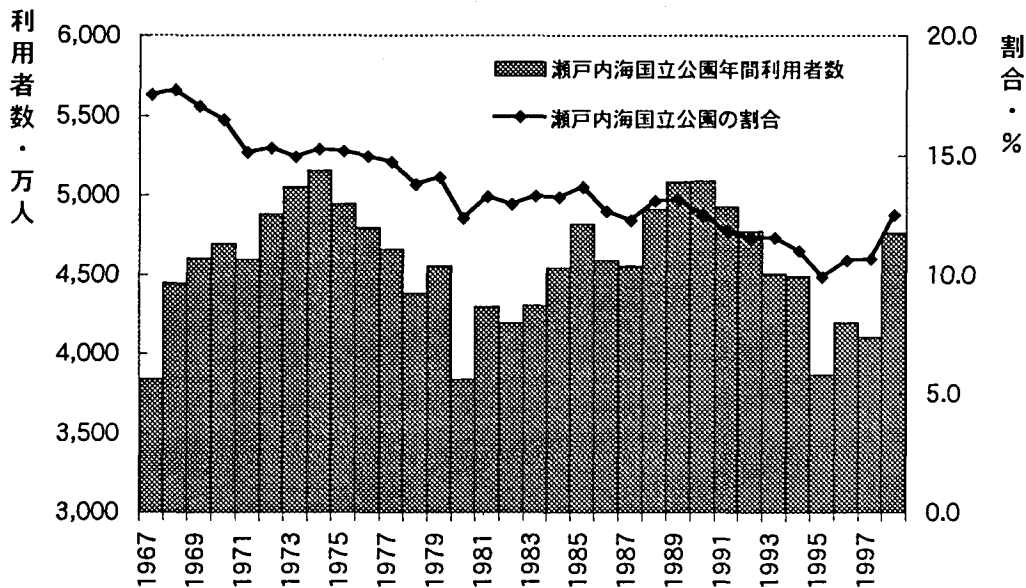


図2-3 瀬戸内海国立公園利用者数の推移

資料 環境庁「自然公園等利用者数調」（平成10年）による

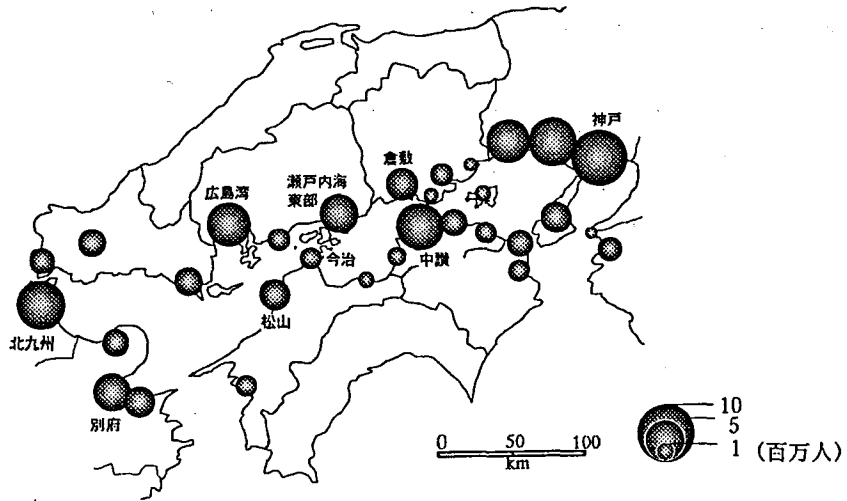


図2-4 瀬戸内海沿岸地域の観光入込客数（平成10年）

『全国観光地観光客データブック2000』より作成。

さらに広島県に限定して2地域の特徴をとらえる（「平成11年広島県入込観光客の動向」による）。対象を広島県に限定すると、しまなみ海道は分断されてしまうが、ここでは同一の統計で扱える範囲をとりあげた。愛媛県側まで含めたしまなみ海道については、第4章で詳しく扱う。

観光入り込み客数の推移をみる（図2-5）と、いずれの地域も1997年までは微増傾向にあった。1998年には宮島で前年の反動で観光客が減り、1999年にはしまなみ海道の開通により、この地域の観光客数が激増したが、宮島はそのあおりでさらに観光客数を減らした。なお、この図からは、宮島としまなみ海道が、観光客のパイを食べ合う関係にあることがうかがえる。1999年は顕著な例として

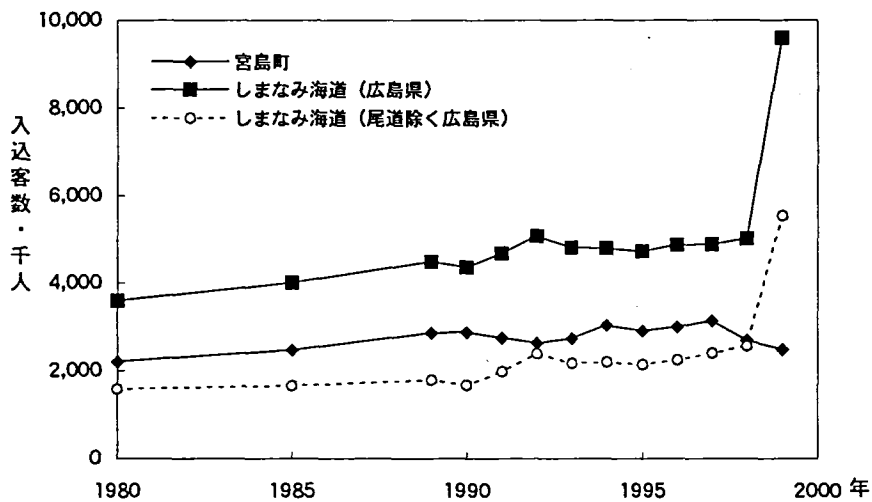


図2-5 宮島としまなみ海道の観光入込客数の推移

資料 広島県入込観光客の動向

も、1992年前後にも観光客数の増減が相反する傾向がみられた。1991年に井口島と因島を結ぶ井口橋が開通し、瀬戸田町まで尾道から陸路で行けるようになった。この時にも、しまなみ海道への観光客数が増えて宮島への観光客が減り、その後、宮島に観光客が戻り、しまなみ海道の観光客が減っていく傾向がみられた。

旅行形態別の観光動向について、まず、団体か一般かの別では、表2-1からわかるように、広島県内の瀬戸内海沿岸地域では団体観光客がほぼ25%を占める。団体観光客の中には修学旅行も多く、広島市内や宮島などを訪れている。表2-2の日帰りか宿泊かの別では、全体の8割近くが日帰り観光客である。なお、表2-1及び表2-2には、1997年と1999年のデータを示しているが、前者では宮島がNHK大河ドラマの毛利元就ブームと世界遺産登録ブームで観光入り込みがピークになった年で、後者はしまなみ海道の開通によりかつてない観光客がしまなみ海道地域を訪れた年である。構成割合には、多少の違いはあるが、それほど大きな差はみられない。1998年のデータもさほどの差はなく、これは近年の基本的な傾向を示していると考えられる。

宮島としまなみ海道を比べると、いずれも内地側を含む瀬戸内海沿岸地域よりも団体観光客の割合が高く、日帰り観光客の割合が高いことがわかる。日帰り客が多くなるのは、広島市内など内地側の都市に宿泊し、宮島やしまなみ海道地域には泊まらないケースが含まれるためと考えられる。両地域の違いとしては、宮島に修学旅行者が多いことがあげられるが（しまなみ海道には修学旅行ほとんどない）、修学旅行を含めても宮島よりしまなみ海道の方が団体観光客が多い。また、しまなみ海道の方が宮島より日帰り観光の割合が高い。瀬戸内海沿岸地域の合計と比べると、しまなみ海道の日帰り客の割合の高さはいっそう顕著になる。

表2-1 観光入込客の団体・一般別割合

A : 1999年		(%)		
	一般客	団体客	修学旅行	
瀬戸内海沿岸地域	74.7	23.1	2.2	
宮島町	71.9	19.3	8.7	
しまなみ海道	69.9	29.7	0.4	

B : 1997年		(%)		
	一般客	団体客	修学旅行	
瀬戸内海沿岸地域	74.2	23.2	2.6	
宮島町	72.9	20.1	7.0	
しまなみ海道	66.6	33.2	0.2	

資料 広島県観光入込客の動向

注) 表2-2, 2-3も同じ

瀬戸内海沿岸地域は同統計における広島湾地域、瀬戸内海中部地域、瀬戸内海東部地域の市町村の合計

しまなみ海道は、尾道市、因島市、向島町、瀬戸田町の合計

1997年は世界遺産登録・毛利元就ブーム、1999年は

しまなみ海道ブーム

表2-2 観光入込客の日帰り・宿泊別割合

A : 1999年		(%)	
	日帰り	宿泊	
瀬戸内海沿岸地域	79.3	20.8	
宮島町	85.2	14.8	
しまなみ海道	94.3	5.7	

B : 1997年		(%)	
	日帰り	宿泊	
瀬戸内海沿岸地域	76.9	23.1	
宮島町	85.0	15.0	
しまなみ海道	91.2	8.8	

資料 広島県観光入込客の動向

来訪者の居住地域別のデータで、宮島としまなみ海道を比較すると、両者の違いがよりはっきりする(表2-3)。宮島は、県内客の割合がかなり低く、全体の2割に満たない。その代わりに全国各地からの観光客が訪れている。全国でも中四国や近畿の割合はあまり高くなく、関東や中部、九州などからの観光客の割合が高いことが特徴である。外国からの観光客も割合はそれほど高くないが、実数では際だっている。これに対して、しまなみ海道では、中四国や近畿など、宮島と比べると近いところからの観光客の割合が高くなる。しまなみ海道の場合も、宮島ほどではないが、県内客の割合が低い。図表には示していないが、宮島は広島市とセットになって、全国レベルの観光地となっている。島嶼部の中では宮島の宿泊客の収容能力は極めて高いものの、それでも広島市内に宿泊して日帰りで宮島を訪れる形態もかなりある。

表2-3 観光入込客の居住地域別割合

A : 1999年		(%)						
	県内客*	中四国**	関東	近畿	中部	九州	東北・北海道	外国
瀬戸内海沿岸地域	45.4	15.2	11.7	13.6	5.1	5.4	2.8	0.8
宮島町	18.5	15.1	21.0	17.6	10.3	12.6	3.7	1.1
しまなみ海道	34.1	20.8	12.5	21.1	3.7	4.7	2.7	0.3

B : 1997年		(%)						
	県内客*	中四国**	関東	近畿	中部	九州	東北・北海道	外国
瀬戸内海沿岸地域	47.5	12.4	11.5	13.3	5.4	6.1	3.0	0.8
宮島町	18.4	15.1	21.0	17.6	10.3	12.6	3.7	1.1
しまなみ海道	42.6	12.6	12.2	17.6	4.4	7.5	2.7	0.4

資料 広島県観光入込客の動向 * 地元を含む ** 広島県を除く

以上をまとめると、まず、宮島としまなみ海道は、瀬戸内地域の中でも多くの観光客が訪れる代表的な観光地の一つであることがあげられる。ただし、西瀬戸地域を訪れる観光客のパイはだいたい決まっていて、宮島の観光客が増えればしまなみ海道のそれが減り、しまなみ海道が増えれば宮島が減るような関係がみられる。しかしながら、両者の集客構造は同じではない。宮島は宿泊観光客の数が島嶼部の中でも特に多く、逆にしまなみ海道では日帰り客や団体観光客の割合が高い。さらに、宮島が全国から観光客を広く集めるのに対して、しまなみ海道では中四国や近畿地方からの観光客の割合が高いことに特徴がある。

ところで、両者は異なったタイプの観光地でありながらも、共通の社会経済的環境におかれている。マクロにみれば、瀬戸内地域は、日本の観光地の中では、国立公園利用者のデータにもみられるように、観光客数が伸び悩んでおり、両者ともその例外とはいえない。日本人の観光は旅行期間の短いこ

とを特徴とし、そのため、大都市（市場）からの距離が観光地の盛衰に大きな影響を与える。短いながらもまとまった休暇がとれれば海外旅行に出かけししまうし、国内では飛行機の普及・低価格化や残された自然の質などを背景に、北海道や九州・沖縄に観光客が流れている。修学旅行であっても、飛行機利用が普及した結果、広島より沖縄や長崎を訪れるケースが増えてきている。一方、日帰り観光は、相変わらず日本の観光の中心的なもので、数字の上では観光行動の主流である。自家用車の普及により、日帰り行楽圏は拡大したが、それでも都心から3、4時間程度のところまでがその圏内である。そのように考えると、本稿で取り上げる西瀬戸地域は、大都市（市場）からの距離をみれば、遠からず近からずの中途半端な位置にある観光地ともいえるのである。

第3節 その他の指標からみた2地域の位置づけ

瀬戸内海の島々は、ともすると同じような性格をもつものと考えられがちである。実際に人口の減少や少子・高齢化など、同じような状況にあるものも多い。しかし、地域形成の歴史や現在の産業構造など、島によって大きな差があるものもある。ここでは、広島県内の島嶼に限り、産業別の人口構成を取り上げ、宮島としまなみ海道の特徴を確認する。

国勢調査の産業別就業人口を用いて、各町と広島県の産業別就業人口構成割合との比を算出した（特化係数）。これをレーダーチャートに描いたものが、図2-6である。これをみると、広島県内の島嶼部の市町は、それぞれ特徴的な産業人口構成になっていることがわかる。宮島は県内島嶼部の市町で唯一、サービス業や卸小売業の割合が全県平均を上回っている。宮島町は、県内島嶼部の中では観光に特化した例外的な町である。一方、しまなみ海道では、造船とミカン栽培で知られる因島市と向島町で一次産業と製造業の割合が高く、瀬戸田町では一次産業への特化が目立つ。その他には、自衛隊のある江田島町、豊町・豊浜町等のミカンと漁業、音戸町や倉橋島の運輸通信・製造業などが特徴的である。図からもわかるように島により産業構造が異なるが、全くのランダムではなく、観光、ミカン、漁業、造船、運輸、保安関係の何に重きがあって、どう組み合わせられているかによって島の特徴が現れている。

簡単にいえば、本稿では、古くからの観光地である宮島と、ミカン栽培などの1次産業と造船業などを基礎とするしまなみ海道のそれぞれについて、観光からみた地域の特徴を比較することになる。マクロにみれば、同じような社会経済環境におかれている両地域であるが、もともとの地域の成立基盤には異質な部分が少なからず存在している。

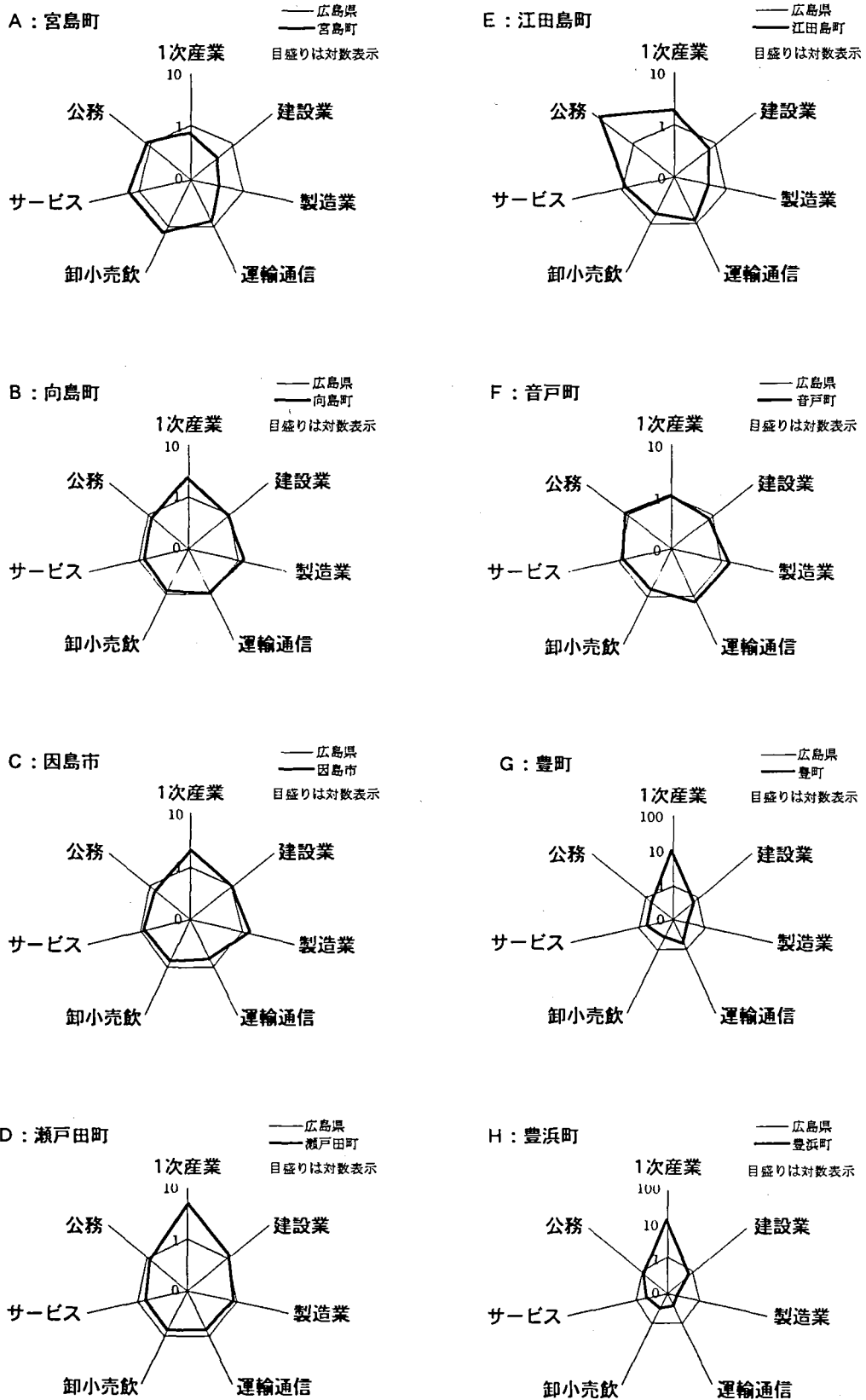


図2-6 主な島嶼市町の産業別就業人口構造

資料：国勢調査による

第3章 観光地・宮島の現状と住民意識

第1節 宮島の概況

(1) 宮島のなりたち

宮島は、広島市の西南部に位置する周囲約30km、面積30.2km²の長方形の島である。北西側は細くて細長い大野瀬戸をはさんで本土の海岸に平行し、北東側は広島湾に面している（宮島町教育委員会、1994）。広島都心部と直線距離で10数km、時間にして約1時間の距離にある。この広島から比較的近いということが、近世以降の町の形成や、住民の生活や観光形態など宮島の現在の有り様に、大きな意味を持つてゐる。地形的にも、今村（1975）が紹介するように、宮島は北東－南西方向に平行に走る断層を特徴とする広島県西部山地の性格を帯びた地塁であるとされる。本土側との一体的なつながりを意識することは、宮島を考える上で大切な視点になる。

ところで、宮島は巖島とも呼ばれる。古代は伊都岐（いつき）島とよばれ、「神をいつき祀る島」に由来すると伝えられている（広島県教育委員会、1965ほか）。巖島神社は推古天皇の時代に鎮座したとされるが、巖島神の起源はさらに古く、原始時代において周辺の島嶼や沿岸部の住民が、弥山を主峯とするこの島の山容に心霊を感じ、これを畏敬したことに求められている（松岡、1986）。その後、延喜式新名帳などに名をとどめるが、平氏全盛期にその信仰に支えられ、隆昌の時代を迎えることになった。歴代の武将の信仰も厚く、門前町として経営されるとともに、港町としても、軍事上の拠点としても認められていた（広島県教育委員会、1965）。明治時代、町制が施行されると巖島町となり、第2次大戦後、巖島町から宮島町に町名は変更された（1950年）。本稿では主として宮島の呼称を用いる。

宮島は、神聖な島、神の島であるとされる。神社はあっても人が住んでいない時期があることや、数々のタブー⁵⁾が伝えられてきたこと、弥山原始林など山の自然が守られてきたことなどが、宮島は神の島であるが故にと説明される。ただし、歴史上、常に、人の住むことが禁じられたり、山の木を伐ることが禁じられたりしていたわけではなく、宮島に住む人、関わる人が、なんらかの目的を持って「神の島である」ことを強調し、利用してきたと考えられる。神の島であることは、現在、観光地としてのイメージ形成につながる由緒の語りにおいて、重要な意味を持っているし、実際のキャッチコピーにもなっている。例えば、観光ガイドブック、中国新聞社編（1996）でもタイトルに神の島を用いており、さらに巻頭に「“聖”と“俗”が見事に調和する人間的な魅力を秘めた島」というレポートを載せている。「神の島」以上に「聖と俗の調和した島（聖と俗を調和させてきた島）」は宮島の特長をよく表している。現在の観光は、形や意味を変えながらも、古くから引き継がれてきた宮島の

「俗」の延長線上にある。

宮島の町の成立について、松岡（1986）は次のようにまとめている。まず、中世、平清盛の時代、神への奉仕の必要から聖職者用の島内宿泊施設が建てられ、利用されるようになった。鎌倉時代になると、僧侶が神前での仏事勤行とは別に、長期にわたる修行のための滞在や、修験者の廻国途中に宿泊するための施設が設けられた。その後、修験者や僧侶の島内定住がはじまった。次の段階として、宮島の法会に集まった参詣者の中で交易が行われるようになり、法会時のみならず恒常的な物資の交易が盛んになった。参詣人の便をはかる経済活動も必要になるなど、商業活動の拠点化が宮島において進んだ。宮島での経済活動が盛んになる一方、神主家による宮島支配のあり方も転機を迎え、中央の政治的混乱に応じて、神主家は、対岸（外宮）を拠点とした神社との関わりから、島内居住に比重を移し領主化していく。このような段階を経て、宮島の町は形成されていったと考えられるが、その頃の瀬戸内海は、近在の商人ばかりではなく、大陸貿易を手がける博多や境の商人往来が盛んになり、一つの交易拠点として、町は発展した。

江戸時代にも瀬戸内海の航路は重要であり、航路に沿った港町は大いに栄えた。宮島では交易ばかりでなく、日本三景の一つにも数えられる巖島神社への参詣者が全国から集まり、内海商業の交通の一拠点と神社鎮座地という2面から繁栄した⁶⁾。また、広島之城下町から排除された遊郭も宮島におかれ、信仰の島であると同時に、宮島は行楽・遊興の島として多くの人々が訪れた。遊郭や富くじ、あるいは祭事など、庶民を呼び込む仕掛け、仕組みが生み出され、実際に取り入れられた。現在なら旅行会社やツアーコンダクターにあたるかもしれない御師や船宿の活動も盛んで、来島者を待つのではなく、各地から積極的に人を集めたといわれる。

宮島は、中世、地元の佐伯氏が神社と平氏と結びつけることに成功し、巖島神社の格を大いに高め、寄進などにより経済的にも栄えることになったが、その後も、交易の拠点・中継地として成功し、さらに、行楽・遊興の島としても人々に親しまれた。このようなことから、宮島町では現在、「宮島はもともと人を呼び込むことに長けた土地」であるという声が聞かれる。ただし、この後に「それなのに今は」が続いてしまうのは残念なことである。

人を呼び込むことに長けたという意味では、宮島はキャッチフレーズの島でもある。時代によって重んじられ方は異なるにせよ、一貫して「神の島」であることはいうまでもない。その他、名所をパッケージ化した「巖島八景」を売り出したことを始め、林春徳のわずかな記述⁷⁾が「日本三景」として一人歩きするようになると、その一つとして、人々の想像をふくらませ、いつかは訪れてみたいと思わせる景勝地となった。そして現在は、「世界遺産登録地」として国際的なお墨付きを手に入れ、

それを観光に活かそうとしている。

(2) 宮島町の現況

宮島町の人口は2,518人(1995年国勢調査)で、戦後一貫して減少している(図3-1)。今では終戦直後と比べて人口が半以下になった。ただし、人口は減っているものの世帯数は1,000戸程度で推移し、宮千軒と呼ばれる状況が維持されている。また、観光客の入り込みが多いことと、島外から島内への通勤者が少なからずいるために意識されにくい、宮島町の人口減少は広島県内の他の島嶼町村と比べても著しく、人口減少率は島嶼部平均より高い。

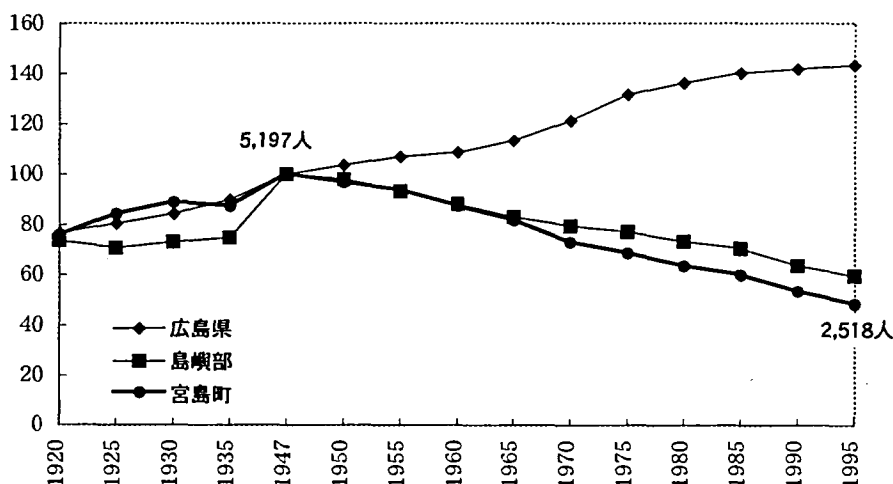


図3-1 宮島町の人口推移

国勢調査による。1947年を100とした値。図中の数字は宮島町の人口

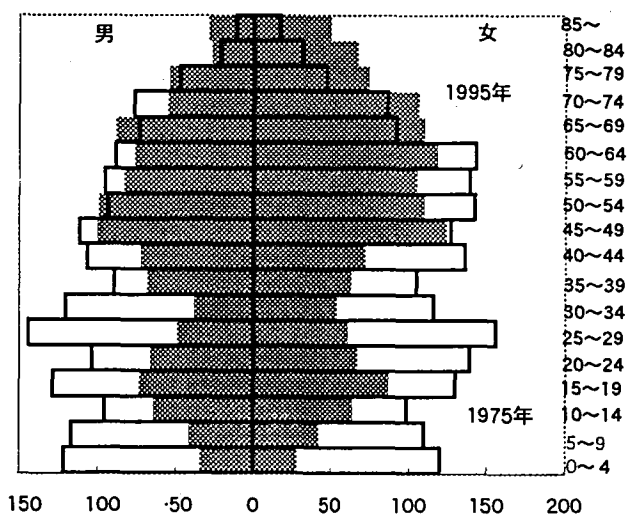


図3-2 宮島町の人口ピラミッド

国勢調査より作成

年齢構成をみると少子・高齢化が進んでいる。1975年には、20歳代の人口割合が最も高かったが、今では20～30歳代の年齢層が、その子どもの年齢層とともに最も少なくなり、高齢者の割合が増えている（図3-2）。他の島嶼部の町も同じような年齢構成になるが、宮島はその中でも年齢構成の偏りが顕著な方である。

宮島町が夜間人口ベースではかなりの過疎の島であるにも関わらず、来島者にそれをさほど感じさせないのは、島と本土側との日常的な人々の移動が盛んであることに一因がある。宮島における就業者の4割は島外から通ってきている（図3-3）。これは広島県内の島で最も高い数字である。宮島で生まれ、就業したとしても、後述する建築規制などの制約により、結婚などによる実家からの独立の際に、住居を大野町や廿日市市などの対岸に求めることが多いとのことである。ちなみに町役場の職員の6割が島外からの通勤者となっている。上記のように宮島町では高齢者割合が高く、壮年層とその子供の世代の割合が低いことが特徴になっているが、この欠けている年齢層が全く島にいないというわけではなく、対岸からの通勤者として存在し地域の産業を支えている。職場はあるが家はないということが宮島町の一つの特徴であり、観光産業による所得が就業者のレベルでも島外に流出する構造になっている。

また逆に、島外への通勤者も多く、島内在住就業者のほぼ2割が島外に通勤し、自町内での就業者は約8割である（図3-4。自町内就業率は他の島と比べて高い方である）。就業者の1割以上が広島市内に通勤しており、離島ではあるが広島の通勤圏内に位置している。

通勤のみならず購買に関しても、宮島町は広島市や廿日市市の商圈に含まれている（図3-5,3-6）。購買力の流出の度合いは、他の島と比べて高くも低くもない平均的な数字であるが、中心都市への依存度は以前と比べて高くなっている。特に最寄品すら広島市内で購入する割合が高い。実際に島内には土産物店など観光関連の小売店は多いものの、一般的な食料品店などはあまり見かけられない。

宮島町は観光に特化した町で、それは産業別の人口構成割合にも現れている（前掲図2-6）。前述のように広島県内の島は、それぞれ特徴的な産業人口構成になっているが、その中で宮島は観光関連のサービス業や卸・小売・飲食業の割合が特に高く、他に類をみない。事業所統計によれば、宮島町で旅館等の従業員数は全従業者の26.1%（1996年）を占め、全国平均の1.5%と比べても極めて高い数字になっている。また、宮島の場合、観光業を核にして2次産業も1次産業も成り立っている面がある。例えば、しゃもじや工芸品の製造、観光農園、カキ養殖、観光客向けの水産加工など、宮島の観光を抜きにしてその成立を考えられない。

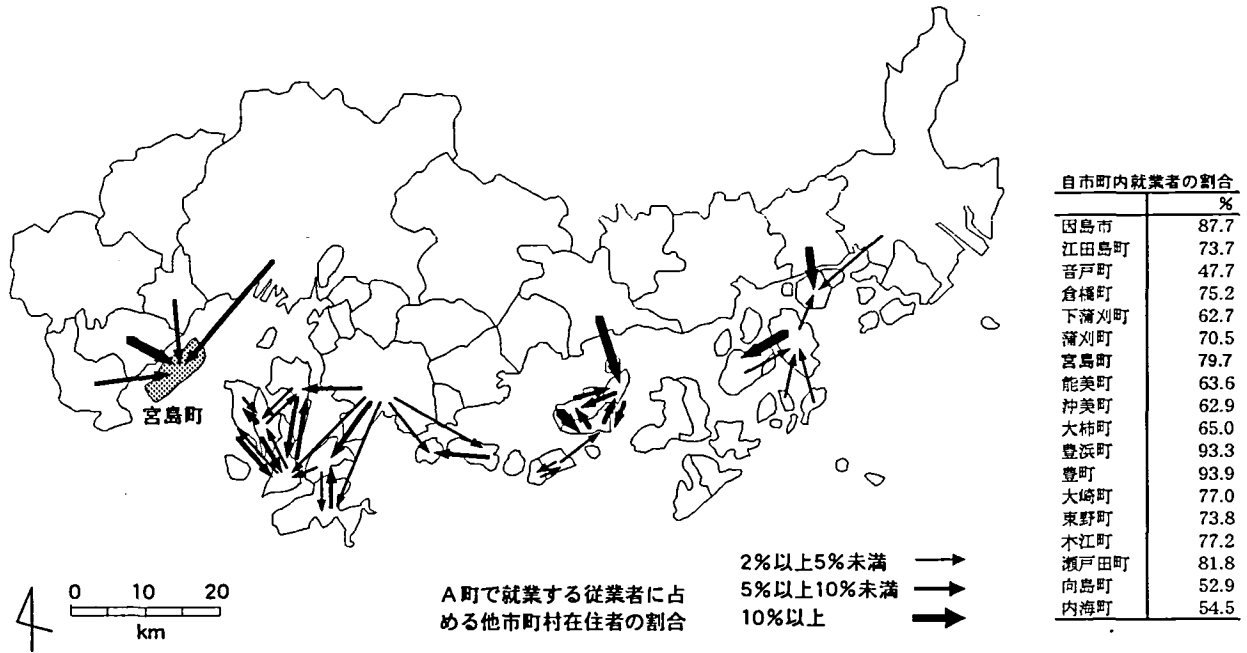


図3-3 瀬戸内島嶼部への通勤 (1995年)

国勢調査より作成

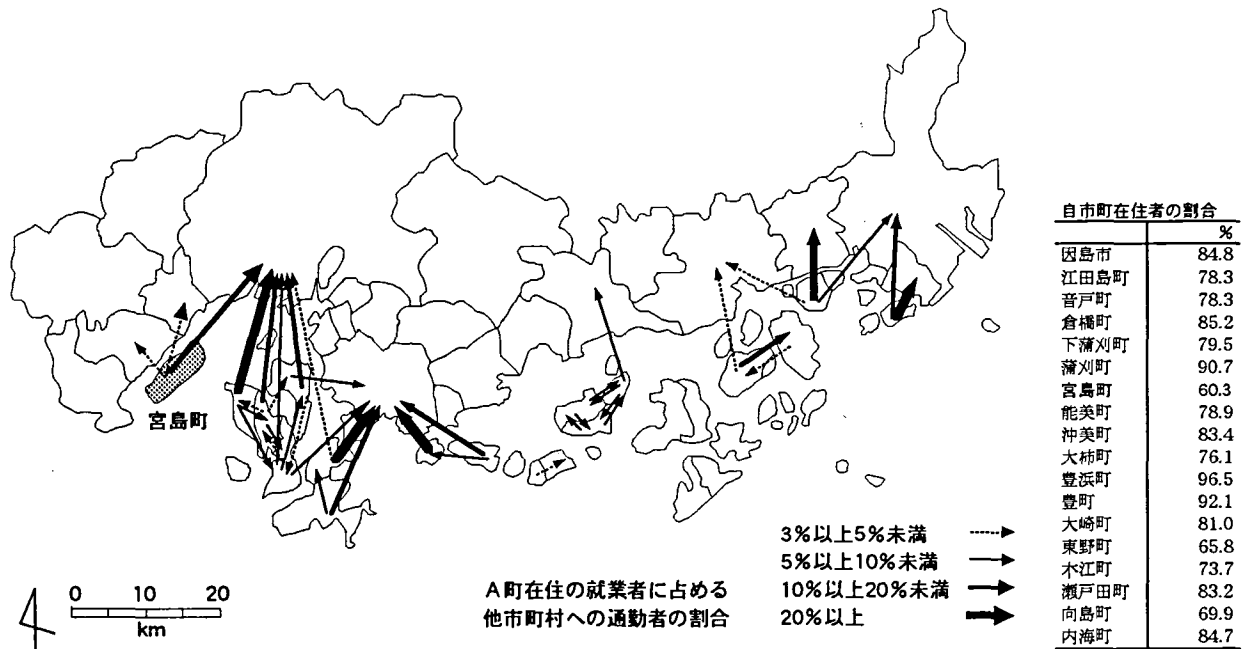


図3-4 瀬戸内島嶼部からの通勤先 (1995年)

国勢調査より作成

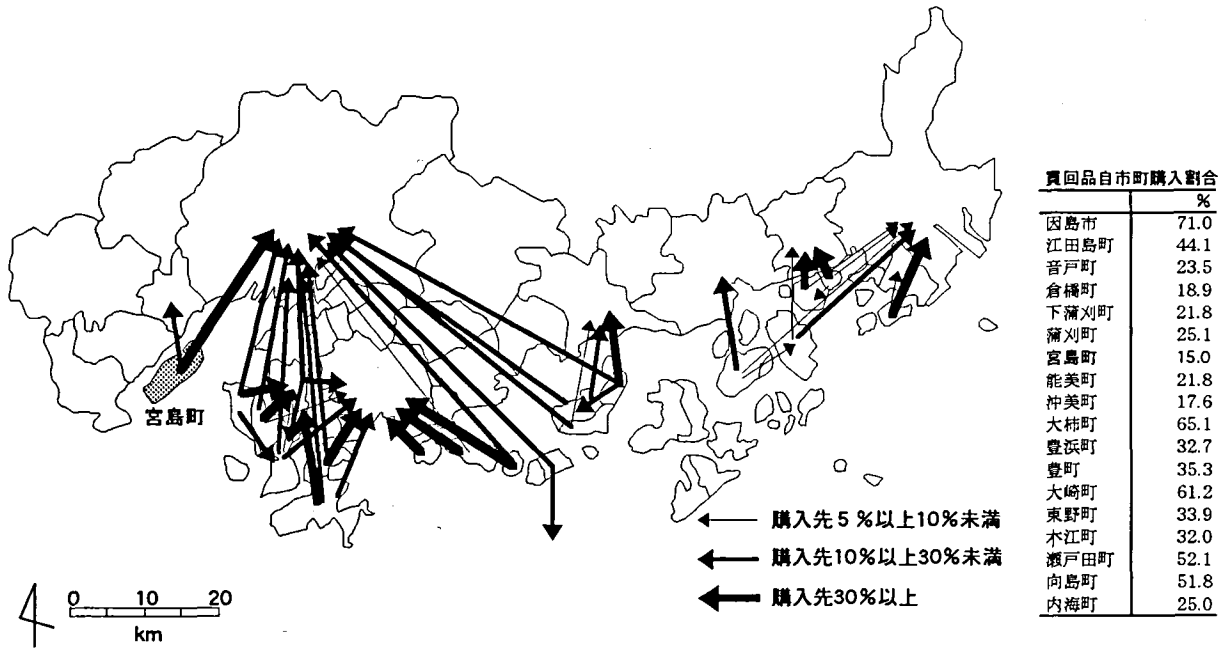


図3-5 買回品の購入先 (1996年度)

平成9年度広島県商圏調査報告書より作成

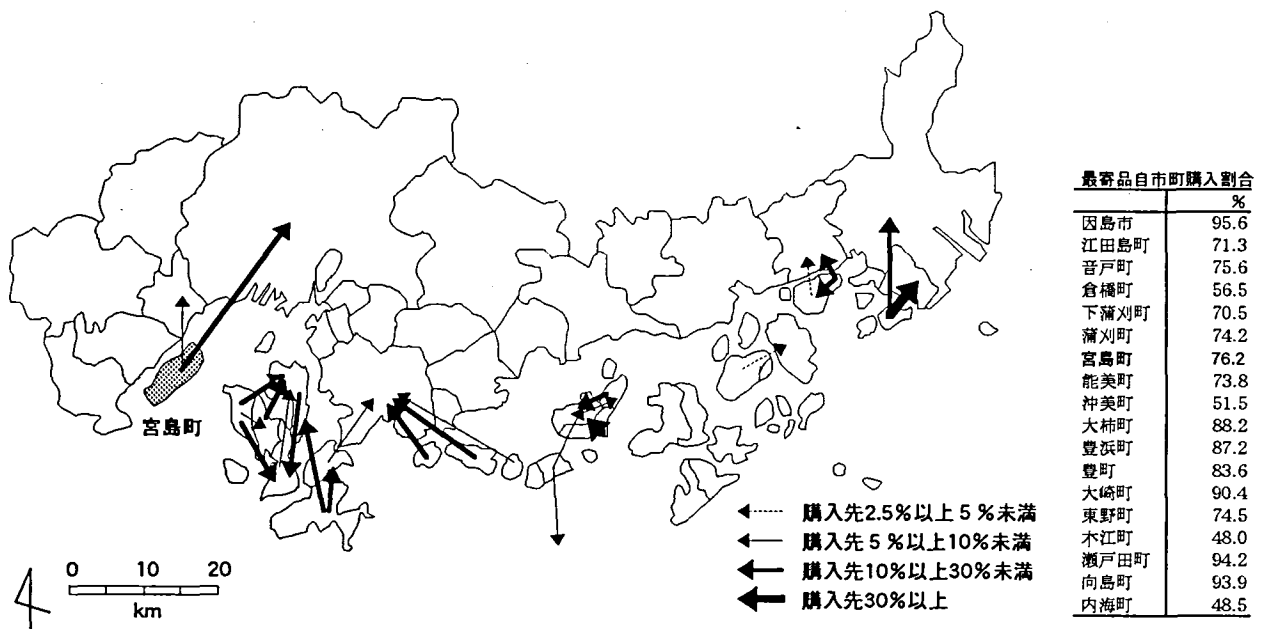


図3-6 最寄品の購入先 (1996年度)

平成9年度広島県商圏調査報告書より作成

第2節 観光の現状と問題

(1) 主な観光資源

宮島の観光資源といえば、まずは世界遺産にも登録された厳島神社である。海上に浮かぶ丹塗りの大鳥居、寝殿造りの社殿、能舞台、これらが背後の弥山の緑に映える景観は、他に類をみない。島内にはこの他にも大願寺や大聖院など数多くの神社仏閣がある。五重塔や豊臣秀吉が建てさせた千畳閣にも多くの観光客が訪れている。さらに、神社と平清盛との関わりや、毛利元就が陶晴賢を破った厳島合戦などの史実も宮島の観光にとって大きな役割を果たしている。厳島神社などの神事・祭事は、四季折々の代表的な年中行事として、多くの参拝・参詣者を引きつけている。夏の宮島花火大会も含め、さまざまなイベントは、宮島の集客力を維持する上で重要である。

宮島には、これら歴史的・文化的な遺産のみならず、修験道の道場にもなった弥山及びその周辺の山や、瀬戸内海の海の自然といった、自然資源にも恵まれている。瀬戸内海地方の特徴的な植生を残すといわれる弥山原始林や、宮島を代表し土産物のモチーフにもなっているモミジなどは、他の島々とは異なる宮島ならではの資源である。海辺には海水浴場が整備されており、夏には車で島に渡ってくる人が増えるために島内で交通渋滞が問題になる。また、鹿や猿などの動物も宮島の自然を構成する特徴的な要素である。地域住民や観光客と動物との関わりは、人間と動物の双方にとって数々のトラブルを招いているが、鹿や猿とふれあえることは、宮島観光の魅力の一つになっている。

また、土産物店などが並ぶ町なみや路地裏の風情も宮島の観光を特徴づける。しゃもじやその他の木工品をはじめ、陶器やもみじ饅頭など、「宮島といえば」といった、工芸品・土産物品にも恵まれている。土産物で全国的に名が知られるのは、色楊枝から始まる江戸時代以来の長い歴史がある。楊枝は今では作られていないが、飲食業界で「みやじま」と呼ばれるしゃもじは、甲子園の全国高校野球大会で広島県代表の応援に欠かせない小道具としても使われている。もみじ饅頭は広島県を代表する銘菓として、空港や駅の売店などでも販売されている。

(2) 観光客の動向

前述したように、宮島の観光客数は年間200～300万人で推移している。NHK大河ドラマ「毛利元就」放映と世界遺産登録の重なった1997年には300万人を越す入り込みがあったが、しまなみ海道が開通した1999年には観光客数を大きく減らし250万人を切ってしまった。なお、この年は台風により厳島神社が被害を受けるというマイナス要因も重なった。

1999年の入り込み観光客の特徴をみると、団体客が約28%でその3分の1は修学旅行であった。日

帰りが85%に対して宿泊が15%となった。これらは1997年の宮島ブーム時でもほぼ同じで、年による差はあまりないようである。宿泊客が15%となっているが、これは調査に対して宮島での行動についてのみ答えられている可能性を否定できない。宮島を訪れる観光客の中には、広島市内や対岸の宮浜温泉に宿泊する宿泊客も少なくない。修学旅行でも広島市内に宿泊して、宮島には日帰りで立ち寄るだけというケースもある。修学旅行に関しては、関東などから平和学習をかねて広島を訪れることがかなりあったが、飛行機を利用するようになり、平和学習をテーマにした場合でも長崎や沖縄を訪れる例が増えている。小学校の近距離の修学旅行では、倉敷にチボリ公園ができて以来、そちらに客を奪われているそうである（土産物店などでの聞き取りによる）。

来訪者を出発地別にみると、前述したように宮島の場合は、全国各地から観光客を集めていることに特徴がある。地元を含む県内客の割合は18.5%にすぎない（瀬戸内海沿岸地域全体では、約45%が県内客である）。最も多いのが関東からで21%になる。相対的にみれば、九州や中部地方からの観光客の割合も、他の県内観光地と比べて高くなる。

行楽シーズンは、図3-7に示すように、11月の紅葉の時期が最も多く、次いで初詣の1月、ゴールデンウィークの5月、夏休みの8月などに観光客が多く集まる。比較的、年間を通じて観光客が訪れていることがわかる。それでも土産物店などでは観光客が特定の時期に集中すると言っている。

観光の目的別（表3-1）では、「神社・仏閣」への参詣が38.3%で最も多く、次いで「自然探勝」の20.1%、「祭り・行事」の18.4%、「海水浴・釣り・潮干狩り」の10.8%、「ハイキング・登山・キャンプ」の9.9%となった。

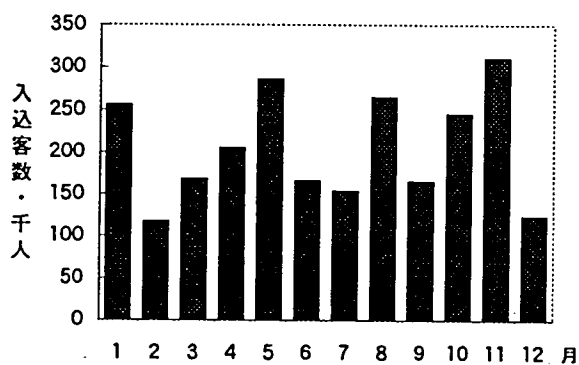


図3-7 宮島町における月別観光入込動向

資料：広島県入込観光客数の動向（平成11年）

表3-1 宮島町の目的別観光入込動向

	入込客数 千人	構成比 %
神社・仏閣	944	38.3
自然探勝	516	21.0
祭・行事	454	18.4
海水浴・釣等	265	10.8
ハイキング等	245	9.9
産業観光	30	1.2
スポーツ	8	0.3
ミカン狩り等	1	0.0
合計	2,463	100.0

資料：広島県入込観光客数の動向（平成11年）

以上に加えて、1999年7月に行った観光客への街頭アンケートの結果を紹介する。このアンケートはアンケートの取り方を体験する学生の実習の一環として行ったもので、データから一般的な傾向を読みとることはできないが、夏のある1時点に限った観光客の様子を知ることができた。1999年7月31日の14時頃からの約1時間半、島内のフェリー乗り場前の広場で帰路についている観光客から街頭で、質問用紙に沿ったインタビューを行った。回答者は35名、質問項目は旅行の日程と宮島の魅力に関する12問で、表3-2にその一部の結果を示している。

表3-2 宮島での観光客アンケートの質問項目

質問項目	概要（数字は人）
1. 旅行の日程について等	
①どこから来たか	広島県内8, 中四国8, 関東・東北8, 中部・近畿3, 九州3, 外国3
②旅行の日数	日帰り13, 一泊二日7, 二泊以上9
③個人かツアーか	個人28, ツアー2
④宮島で回ったところ	厳島神社23, 弥山5, 水族館4, 海水浴場2, 五重塔・千畳閣2
⑤宮島の滞在時間	一～二時間9, 三時間以上10, 一泊二日1
⑥宮島以外で訪れるところ	宮島のみ12, 平和公園・原爆ドーム6, 広島市内4, 市民球場3, 尾道3, しまなみ海道・江田島各1, 県外6
⑦宮島以外の広島観光地	平和公園・原爆ドーム22, 尾道5, その他4
2. 宮島の魅力・問題点	
⑧宮島に来たのは何回目	初めて10, 2回目10, 3回目以上15
⑨世界遺産登録を知っていたか	知っていた22, 知らなかった9
⑩宮島のどこが登録されたか	知っている4（ただし未確認）, 神社のみ8, 知らない19
⑪観光地・宮島の魅力	厳島神社8, 神社と自然の調和3, 自然・景色8, 歴史4, 身近さ・安心感3, にぎやかさ1
⑫宮島に足りないもの	特に傾向はなかった

まず、宮島を訪れたほとんどの人が厳島神社を詣でており、神社に立ち寄らなかった人は弥山のハイキングを目的に来島した県内客であった。実際に通り過ぎる人の流れをみても、服装からハイキングに来ていると推察される中高年のグループが、真夏はかなり暑い時期であるにもかかわらず、少なくなかった。その他、この日の特徴的なタイプとして、夕方からの広島市民球場でのナイター（広島対巨人戦）を観戦するためのツアー客が、数人、アンケートへの回答を求めた人の中にいた。島根県からのツアー客で、早めに広島に着くので、日中の空き時間に厳島神社を訪れたとのことである。午前か午後のいずれかに広島市内で用事がある人が、空いた半日で宮島を訪れるということも可能な位置に宮島は位置し、そのような時に一度は行ってみようかと思わせる知名度を宮島は持っている。東北から九州への旅行の途中で立ち寄ったという大学生や、岡山から九州へ行く途中という中年

男性もいたし、2週間の日本観光の途中というオーストラリアからの旅行者もいた。宮島は長距離・長期間の旅行の途中で、せっかくなら立ち寄ってみようと思われる観光地でもあり、そのことが全国各地から観光客が訪れているというデータになって現れるのだろう。

宮島での滞在時間は、答えてくれた方のほとんどが1~3時間程度であった。遠距離からの観光客は当然泊まりがけで広島に来ているが、宿泊地は広島市内、島内滞在は数時間という人が多かった。一方で、リピーターの割合はかなり高い。回答者35人のうち、7割以上が2回目以上であり、その3分の1が多数回と答えた。月に何度も来ているという人もいた。

今回の回答者の中には、しまなみ海道と宮島の両方を訪れるという観光客は、橋開通の年にもかかわらず、尾道をのぞけば1人しかいなかった。1回の旅程の中に双方を組み入れるのは難しい関係にあるのかもしれない。宮島以外に広島県内の観光地をあげると何かとの問いには、圧倒的に原爆ドーム・平和公園があがり、わずか尾道に複数の回答が集まった。

宮島の観光地としての評価について、魅力あるものとして歴史・神社・自然があげられ、人によるばらつきがみられた。一方、問題点として他の観光地と変わらないとか、日本三景の中では最も美しくないなどという辛口の意見も聞かれた。世界遺産についても、登録されていることを知っていた人は、7割にすぎず、どこが指定されているのか正しく知っている人はほとんどいなかった。神社の社殿のみが対象になっていると思われる例が多かった。

(3) 宮島の観光が抱える問題点など

宮島が抱える問題点などについて、宮島町総務課、企画調整室、歴史民俗資料館、観光協会などでの聞き取りをもとに、今後の検討に際してポイントとなることをまとめておく。

ア. 逼迫した町財政

まず、第一に宮島町が抱えている問題として財政状況がきわめて厳しいことがあげられる。これは観光だけに関わることではないが、観光業が町の基幹産業であり、観光を意識したまちづくりは町の重要課題であることを考えれば、由々しき事態である。財政状況が悪化した最大の要因は、競艇の不振による収益金の減少による。競艇の収益金は費目としては「諸収入」に計上されることになっており、昭和50年代には財政収入の3分の1を諸収入が占めるほどであった。最近はその落ち込みが著しく、平成4年度に26億円あった収入が、平成10年度には8,000万円にまで落ち込んでしまい、一気に財政危機を迎えてしまった⁸⁾。競艇は、戦後の「職員の給料さえ払えない」ほどの厳しい財政状況に

対処するために町長の決断で始められたといわれ、長い間、宮島の町財政を支えてきた。収益が多かった頃には、他の自治体と比べて、各種使用料・手数料などを格安に設定するとか、町内の子供に毎日1本の牛乳を無料配布したり、ランドセルや制服の無料提供を行ったりした時期もあったという。このような収益を住民に均等に還元する、いわばバラマキ型の経費の支出は当然改められるべきであろうが、有名な観光地であるがゆえに各種施設の維持管理に多額のコストが必要になるのも事実である。なお、競艇場は対岸の大野町にあるので、宮島の観光客には競艇場への来場者は含まれない。

イ. 2,500人の人口と250万人の観光客のギャップ

宮島町の人口は、わずか2,500人ほどだが、年間の観光客数は、激減したといわれる平成11年でもその1,000倍の250万人にも達した。上下水道やゴミ処理など、観光客を視野に入れた施設整備が必要である。公共下水道の整備は昭和56年には終わっており、ゴミ処理も現時点では町単独で行っている。これら生活基盤整備は住民のためであると同時に、観光客の便益を図るものでもある。観光に直結する施設として、町立水族館や町立の歴史民俗資料館、海水浴場なども設けている。公衆便所や街灯などでも、観光地ならではのグレードの高い施設整備をしなければならない。景観整備の一環として、電線の地中化や道路のカラー舗装も行っている。

しかし、町の財政は数千人の住民人口を基礎として成立しており、住民の人口規模と来島者数のギャップが町財政を圧迫する構造的な問題になっている。近年では高齢化にともなう歳入減・歳出増も懸念される。また、島内に家を建てにくいことから青壮年層が島外に流出し（広島県内島嶼部平均を上回る人口減少率）、昼間人口就業者のかなりの割合が島外の住民であることも、観光関連の収入が町の財政と直結しにくい一因になっている。観光客数はかなり多いが、その数は伸び悩んでおり、新たな収入増になりにくい。多くの観光客が訪れることは、地域にお金を落とすが、ゴミや尿尿など処理すべきものを大量に発生させ、経常的な処理費を必要にさせる。しかも、観光地間の競争は、競争相手が海外にも広がり、観光地としての魅力を高めるための投資を怠ることができない。このような状況の中での町財政破綻は、宮島が観光地としての岐路に立っていることを如実に示している。

ウ. 文化財保護のための土地利用規制とまちづくり

宮島は人口流失率が高く、青壮年層が職場が島内にあっても島外に居住する例が多い。その大きな理由の一つに、島内の土地利用規制が厳しく、新しい家を建てにくいことがあげられる。この土地利用規制は、家を建てられないということだけではなく、道路の拡幅などがままならないとか、施設整

備が簡単には行えないなど、まちづくりの障害になっていると考える人が少なくない（後述の住民アンケートからもわかる）。しかし、宮島は厳島神社をはじめとする数々の文化財とその周辺環境が守られているからこそ多くの観光客が訪れているわけであり、これらを「守ること」と「利用すること」の兼ね合いが難しく、住民の間でも意見が分かれるところである。

この土地利用の規制があるのは、宮島が古くから文化財の島とされているからである。表3-3に示したように、いつくもの法律の網がかかっている（岡崎, 1986など）。

表3-3 宮島に適用されている主な法律等

根拠法等	区 分	名 称	指定年	面積・ha	備 考
自然公園法	国立公園	瀬戸内海国立公園	1934年	3,039	全町に適用
	特別地域	宮島	1950年	2,836	
	特別保護地区	宮島	1956年	203	
文化財保護法	天然記念物	弥山原始林	1929年	158	全町に適用
	特別史跡・特別名勝	厳島	1951年	3,039	
都市計画法	都市計画区域	宮島	1935年	3,039	全町に適用 風致地区内における建設等の規制に関する条例（県）
	風致地区	厳島	1970年	3,039	
都市公園法	都市公園(風致地区)	宮島公園	1873年	421	供用部分は200ha
森林法	風致保安林		1951年	2,350	
鳥獣保護法	鳥獣保護区		1961年	3,039	全町に適用
	特別保護地区	弥山特別保護地区	1984年	203	自然公園法特別保護地区
急傾斜地の崩壊による災害の防止に関する法律	急傾斜地崩壊危険区域		1960~ 1991年	5	市街地およびその周辺
ふるさと広島の景観の保全と創造に関する条例	景観モデル地域	宮島・大野景観指定地域	1991年	3,039	全町に適用
世界遺産条約	遺産区域	世界文化遺産	1996年	431	厳島神社・森林・海面 上を除く全島（海面含む）
	緩衝地帯	厳島神社	1996年	2,634	

岡崎（1986）及び国土庁のホームページ等により作成

例えば、自然公園法に基づき、宮島は全島が瀬戸内海国立公園の特別地域に指定されている。瀬戸内海国立公園がそもそも日本で最初の国立公園の一つでもあり、宮島は国立公園の制度ができて以来の保護対象である。宮島では、他の国立公園と違って、市街地にも特別地域の網がかかっている。建物の建て替えは従前の規模で認められているが、更地や空地にしてしまうと、極端に低い建ぺい率はその土地にかかってしまい、現実問題としてそこに建物が建てられなくなる⁹⁾。最近増えている空店舗が更地化されてしまうと、単に店舗が抜けるだけでなく、町並みが連続しなくなってしまうおそれがある。高さ制限もあり、最高13mまでという条件もついている¹⁰⁾。

その他、文化財保護法の特別史跡特別名勝や都市計画法の風致地区に全島が指定されている。

これら法的な規制に加えて、改変可能な土地である民有地・町有地が合わせて町面積の6%しか

く、大半が国有地である。そして県内町村部有数の高い地価の町でもある。動かせる土地が少ない上に高い、しかも厳しい規制がかかっている、というのが宮島の土地事情である。これが規制がまちづくりの障害になっているという声になっている。特に、新たに家を建てられないことが、若年層の流出につながり、高齢化・少子化に拍車がかかる一因になっている。島内で職を見つけても、親と同居するか、島外に住んで島に通うかの選択になってしまう。このような状況において、規制をうっとうしく思う雰囲気は島内に根強くあり、このことが巖島神社の世界遺産登録に際し、世界遺産登録が新たな規制の種になるのではないかと懸念する声につながった。

エ. 既存の有名観光地が世界遺産登録されるということ

巖島神社は、その背後の山林や前面の海面とともに1996年12月に世界遺産に登録決定された。巖島神社は1992年に日本が世界遺産条約を批准したときから今後登録申請すべきものとしてリスト化されていたが、正式な手続きとしては、1995年度に国の文化財保護審議会が、ユネスコに世界遺産に登録を申請する物件として巖島神社を提案、それを受けて、国が1996年10月1日にユネスコに報告、12月にユネスコにて登録決定された。地元には1995年に教育委員会を通じて話が伝わり、その時点から住民への情報提供や登録のための準備が行われた。同時に登録された原爆ドームでは、アメリカ合衆国や中国などが反対する政治状況もあって、登録に至るまで150万人署名を集めるなど、世界遺産登録を求める市民運動が活発に行われたが（中国新聞社、1997）、巖島神社の場合には、これとは対照的に、当初からリストに載っていたにもかかわらず、地元や住民からの登録を求める運動はなく、1995年の時点で国や県から話が降りてきたので対処したとのことである。「巖島神社の登録には国や県が熱心で、地元は話が来たから乗った。むしろ地元ではまた規制が強化されるのではないかと心配する声が強かった」という話を聞いた。

実際に登録されても新たな規制が設けられるわけではないが、世界的に注目されることで責任は重くなると考えられたようだ。世界遺産に登録されても、新たな規制が設けられることはなかったが、台風などで修復が必要になっても、そのための支出は既存の文化財保護法の定めに従うことになっている。宮島にとっては、巖島神社の価値が世界的に認知され、新たな肩書きがひとつ増えたということ以外には、特別にプラスもマイナスもなかったようである。宮島や巖島神社の知名度はもともと高かったのも、登録されたことで知名度が上がり、以後の観光客の増加につながるという効果もほとんどなかった。登録の翌年は300万人を越す観光客が訪れたが、これはNHKの大河ドラマで『毛利元就』が放映された元就ブームと相まっての結果であり、翌年には登録前の入り込み水準にすぐ戻って

しまった。すでに多くの観光客が訪れる世界的にも知名度がある宮島にとって、厳島神社が世界遺産登録されたということに、どのような意味があることなのか検討すべき課題である。

第3節 住民意識に見る「宮島」

次に宮島町の住民の方を対象として行った「宮島の観光と生活に関するアンケート調査」の結果を報告する。アンケートは2000年2月に、電話帳に登録のある全世帯を対象として郵送法により実施した。対象とした世帯は790世帯で、宮島町の総世帯数の76.6%にあたる。回答数は333通で回収率は42.2%であった。世帯主を対象としたものではなかったが、結果としては、男性63.7%、女性33.6%（無回答2.7%）と男性が多く、年齢的には60歳以上が全体の57.0%と高齢者が多い結果となった。宮島町は前述のとおり壮年層の多くが島外から通勤しており、島内在住者には高齢者の割合が高い（60歳以上の人口割合は34%）。島内での常住者しか対象とせず、通勤者を対象としなかったことで昼間人口ベースの住民を対象としたアンケートになっていない。働き盛りの壮年層に通勤者が多いことを考えると問題があり、今後の課題としたい。

その他、回答者の属性上の特徴としては、高齢者が多いことを反映して、現在就業していない人が多い（「今は仕事をしていない」が36.3%、「年金生活」が29.1%となっている）。「観光に関連した商業・飲食業・サービス業」に就業している人が27.3%と職業としては最も多いこと、居住歴では「20年以上」が87.4%と大部分を占めていることなどがあげられる。旅行経験の宮島の観光地としての評価に与える影響をみるために尋ねた年間の旅行回数は、「年1, 2回」が44.4%と最も多く、7割以上の人々が毎年1度は旅行に出かけていることがわかった。海外旅行にはハワイをはじめ欧米やアジアなど各国に半数近くの人が出かけたことがあった。

以下、設問ごとに回答結果からわかることを順次記載する。アンケートの設問と選択肢については巻末に参考資料として載せておく。

問1 宮島をどのようなレベルの観光地だと思いますか（図3-8）

世界レベルの観光地であると評価する割合が、44.1%で最も高く、次いで国内レベルの評価が39.3%となり、これ以外の評価は少ない。後述の世界遺産と日本三景のどちらが宮島をアピールするかの問いとも共通するが、世界の宮島と考えるか日本の宮島と考えるかは、ほぼ五分五分であるといえる。いずれにせよ住民の大部分が宮島を日本を代表する観光地であると認識している。

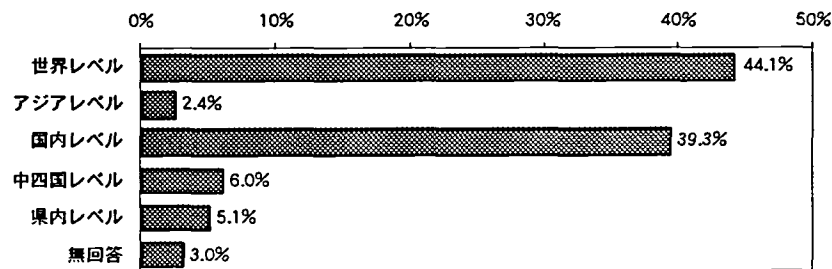


図3-8 宮島はどのレベルの観光地か

問2 宮島観光にとっての厳島神社の位置づけ (図3-9)

問3 厳島神社以外の宮島の観光資源は何か (図3-10)

厳島神社を宮島観光の中心と考えている人が回答者の9割を超えており、厳島神社あつての宮島観光との共通認識が持たれている。神社以外の観光資源としては、弥山などの山の自然をあげた人が、63.1%で最も多く、次いで厳島神社以外の史跡や建造物が55.9%；歴史上の出来事や故事などが31.5%となった。海辺（7.8%）や瀬戸内海の景色（20.4%）はあわせて3割に及ばず、同じ自然でも海より山の方が評価が高くなったことは興味深い。その他には花火大会などのイベント（22.8%）や島であること（22.8%），もみじ饅頭などの特色ある土産物（19.5%）などの割合が高くなった。

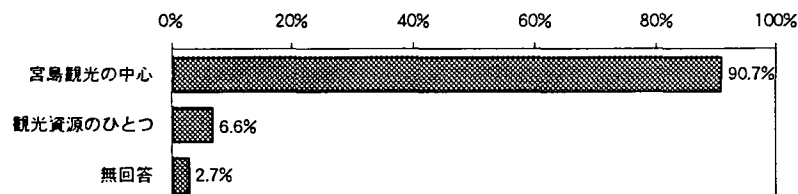


図3-9 宮島観光にとっての厳島神社

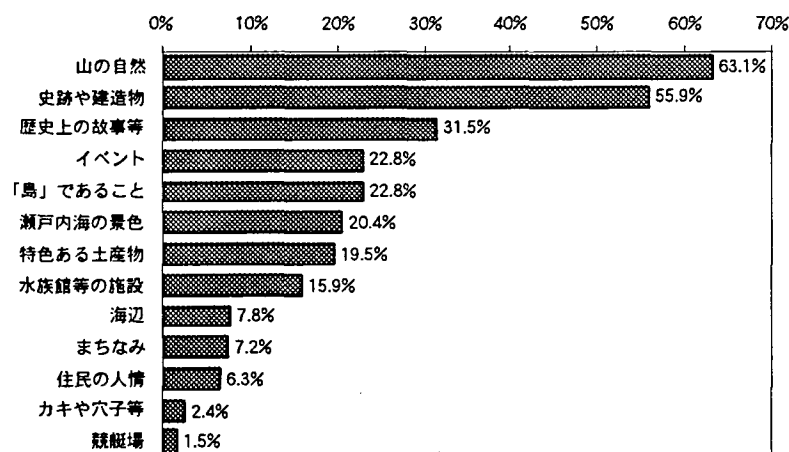


図3-10 厳島神社以外の観光資源（複数回答）

問4 宮島の観光のあり方について

①力を入れるべき分野 (図3-11)

宮島において今後、観光に関して力を入れるべき分野を問うたところ、最も高い割合を示したのは「宮島の自然を活かした事業」(36.3%)であった。次いで、「遊園地などの集客力のある観光施設をつくる」(20.1%)で、「歴史を活かせる事業」(17.4%)、「厳島神社を活かせる事業」(13.5%)が続く。後の問6でそれぞれの地域資源をどのように活用するのがよいかを質問しているが、この設問とのクロス集計¹¹⁾を行ってみると次のことがわかる。ただし問6の詳しい結果については後述する。

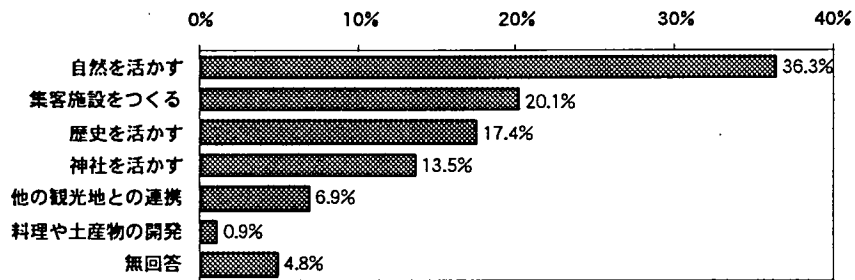


図3-11 宮島観光振興で力を入れるべき分野

表3-4 力を入れるべき分野と厳島神社などを活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答	
全体	333	100.0	48.3	6.6	28.8	13.5	2.8	
神社を活かす	45	100.0	57.8	11.1	22.2	4.4	4.5	問6① 厳島神社その他文化財
歴史を活かす	58	100.0	63.8	3.4	24.1	6.9	1.8	
自然を活かす	121	100.0	43.8	5.8	40.5	8.3	1.6	1: 守り伝えることが第一
集客施設をつくる	67	100.0	29.9	9.0	26.9	32.8	1.4	2: 現状程度の活用
料理や土産物の開発	3	100.0	33.3	0.0	33.3	33.3	0.1	3: 周辺環境の整備
他の観光地との連携	23	100.0	69.6	0.0	8.7	21.7	0.0	4: 関連集客施設をつくる
無回答	16	100.0	50.0	12.5	12.5	6.3	18.8	

注) 図3-11と項目の並び順が異なるが、図では割合順にソートしてあり、この表では選択肢順のままだからである。

表3-5 力を入れるべき分野と土地利用規制に関する意見とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	5	無回答	
全体	333	100.0	22.8	51.4	9.9	2.1	8.1	5.7	
神社を活かす	45	100.0	35.6	42.2	4.4	2.2	8.9	6.7	問16② 規制に関する意見 (自分にとって)
歴史を活かす	58	100.0	27.6	58.6	6.9	0.0	1.7	5.2	
自然を活かす	121	100.0	20.7	60.3	9.9	0.0	5.8	3.3	1: 規制は当然。むしろ誇りに思う
集客施設をつくる	67	100.0	13.4	38.8	22.4	7.5	14.9	3.0	2: 規制はやむを得ない
料理や土産物の開発	3	100.0	33.3	66.7	0.0	0.0	0.0	0.0	3: 規制を緩くしてほしい
他の観光地との連携	23	100.0	21.7	47.8	0.0	0.0	17.4	13.1	4: 規制は迷惑なだけ
無回答	16	100.0	25.0	37.5	0.0	6.3	6.3	25.0	5: 自分には関係ない

「巖島神社を活かせる事業」と答えている人は、他の選択肢を選んだ人よりも保守性が強く、基本的に現状の延長線上に将来の望ましい方向をとらえている。具体的には、巖島神社その他の文化財の活かし方として「文化財として守り伝えることが第一である」を選んだ人が57.8%で、全体平均の48.3%を上回る（表3-4）ほか、山の自然や景色の活かし方として「山の自然環境の保全を中心に考える」が57.8%（全体では42.3%）、海辺の自然や景観の活かし方としても「海辺の自然環境の保全を中心に考える」が60.0%（全体では45.9%）となっている。財政負担が問題になっている既存の水族館や民俗資料館などの施設については、「現状維持」が37.8%で最も多いものの、他の層と比べると「施設を拡充する」（33.3%）を選択した人が多いことを特徴とする。文化財や環境は原則として守る方向で考え、積極的な対応は既存の施設の拡充で対応することを望む姿がみえる。

問4①で、「歴史を活かした事業」と「自然を活かした事業」を選んだ層は似た傾向を示し、「巖島神社を活かせる事業」を選んだ層に準ずる保守性を示した。ただし、「歴史」の回答者は「巖島神社」の回答者よりも神社のあり方については「文化財として守り伝える」ことを指向し（63.8%）、「自然」の回答者は、遊歩道や町並み、駐車場の整備など周辺環境を整えることの割合が高くなった。

全般に保守的な傾向が強く感じられる中で特異な傾向を示したのが、問4①で「集客力のある観光施設をつくる」を選んだ層である。問6との関連では、巖島神社などの活かし方として「神社や史跡にちなんだテーマパークをつくる」（32.4%）、山の自然や景観の活かし方として「スポーツ・レジャー施設をつくる」（38.8%）、海の自然や景観の活かし方でも「スポーツ・レジャー施設をつくる」（46.3%）が最も多くなった。既存の施設についても現状維持（32.8%）に次いで「新しい施設をつくる」が26.9%となり、他とは異なる結果になった。

この層は、文化財保護のために各種規制が土地利用に課せられていることをどう思うかを問うた問16でも他の層とかなり異なる傾向を示した（表3-5）。全体的にみると、規制は必要であるとか、やむを得ないなど、積極的・消極的の違いはあっても認める傾向が強い中で、他の層と比べて、規制の緩和や廃止を求める割合が高く（全体平均の12.0%に対して29.9%）、日本や世界の遺産というより住民の生活を優先すべき（全体平均の10.5%に対して25.4%）と答えている。

②意識すべき観光客（図3-12）

宮島への観光客には、減りつつあるとはいえ修学旅行などの団体客が多い。しかし、宮島でも、一般にいわれているように個人や少人数グループをターゲットとした観光地への転換の必要性を感じている人が多い（73.9%）。ただし約2割の人は団体旅行客を今後も意識すべきと考えている。

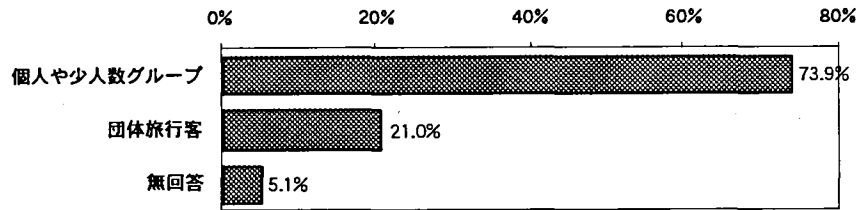


図3-12 意識すべき観光客

③観光業者のあり方 (図3-13)

宮島の観光業では地場のウェイトが高い。今後の宮島の観光業の担い手について質問したところ、「島内の観光関連業者の連携・協力の強化」と答えた人が61.9%、「島外からの大手観光業者の参入」が31.5%であった。観光業がじり貧傾向にある中で、外からのカンフル剤を求める意見も町民の間にはある。

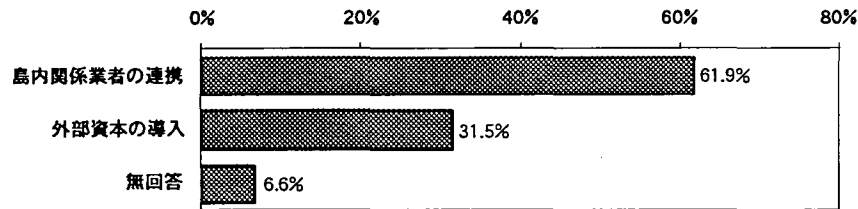


図3-13 観光活性化のために望まれる観光業の担い手

④町の観光行政について (図3-14)

⑤観光振興のための財政規模 (図3-15)

⑥財政の配分 (図3-16)

宮島町は競艇による収益が得られなくなり、困難な財政状況に直面している。年間200万人を超える観光客が訪れても、それが歳入に反映するよりも、観光地の質を維持するための下水道整備やゴミ処理などコストに反映する方が大きい。宮島町の財政が厳しいことは広く知られており、それを踏まえて観光行政をどのように評価しているのかを尋ねた。

町の観光行政については、「よくやっている」と評価したのが21.9%、「問題がある」としたものが71.2%であった。ただし、観光振興のための財政規模については、「今以上に投資すべき」が45.9%、「現状程度でよい」が28.2%であり、「観光振興にお金をかけすぎている」は19.8%にすぎなかった。しかも、今の観光行政に「問題がある」と回答した人の53.6%は「今以上に投資すべき」を選んでいる。消極的な観光対策を問題ありとしているわけである。財源の配分についても「宮島は観光の

島なので、より積極的に観光振興を図るべき」が56.2%と半数を超えた。宮島は観光の島であり、積極的に観光振興を図っていくことが大切であると住民の多くが認識している。観光・行楽地としての歴史の古いこの島の特徴であろう。

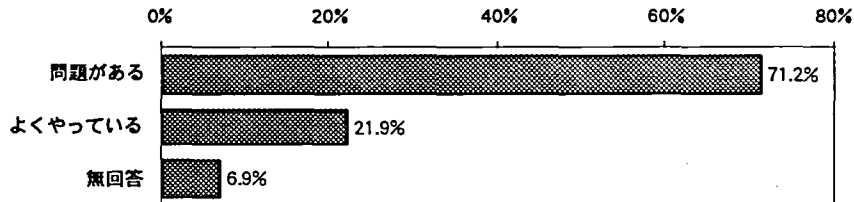


図3-14 町の観光行政の全体的な評価

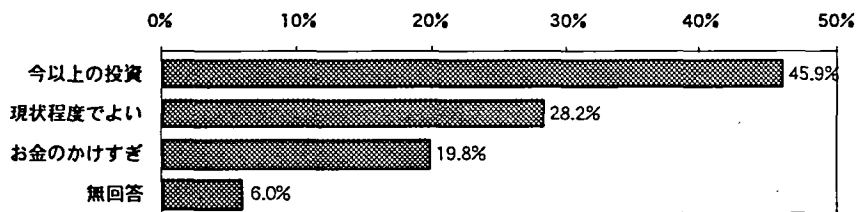


図3-15 観光振興のための財政規模

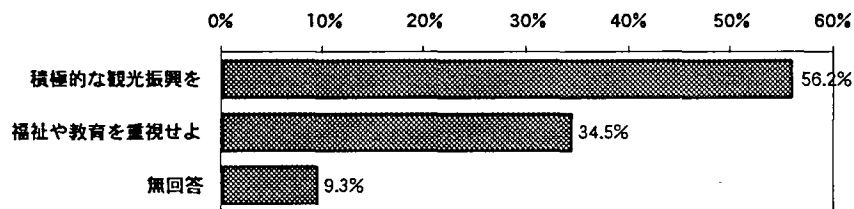


図3-16 観光振興に関する財政配分

他の設問とのクロス集計を行った結果、特徴的な傾向と考えられることとして以下があげられる。

今の観光行政に「問題がある」と答えた人は「よくやっている」と評価した人と比べて、次の問5の宮島の地域資源が観光に活かされているかの設問に対して、「海辺の自然や景色」（表3-6）、「旅館や土産物店が並ぶまちなみ」、「祭りやイベント」が活かされていないと判断する割合が高くなった。その割合は、「海辺の自然や景色」が活かされていないでは60.7%対38.3%（「問題がある」対「よくやっている」）、「旅館や土産物店が並ぶまちなみ」が36.3%対24.7%、「祭りやイベント」は31.6%対16.4%である。特に「海辺の自然や景色」が活かされていないと感じている人が6割を超えていることは特筆できる。

問6の地域資源の活用方向との関係では（表3-7）、厳島神社他の文化財の活かし方として、観光

行政に「問題がある」と答えた人は「よくやっている」と評価した人と比べて、遊歩道などの周辺環境整備や神社・史跡などにちなんだテーマパークをつくるといった、積極的に活用することを選ぶ傾向が強い。一方、水族館や民俗資料館などの活かし方では、「問題がある」とした人は「施設の拡充」より「町財政に見合った経営を行う」べきとの評価を下している。

さらに、この問6と今後の観光振興のための財政規模との関係では、「今以上に観光振興のために投資すべき」を選んだ人は、上と同様に、神社や文化財について、周辺環境整備やテーマパークをつくることを選ぶ傾向が強いほか、海辺の自然や景観について、「海辺の自然環境保全」の割合が低く、「スポーツ・レジャー施設を整備する」の割合が高くなった。水族館や民俗資料館などの活かし方でも「施設の拡充を図る」や「新たな観光施設をつくる」の割合が高い。まちなみについては「観光客の好みやイメージにあった町並みを創造する」を選ぶ人が多かった。

なお、観光行政に「問題がある」と答えた人は、「よくやっている」と評価した人と比べて、観光関連の商・飲食・サービス業の就業者の割合が高く、逆に「よくやっている」と評価した人では年金生活者の割合が高い。「今以上に観光振興のために投資すべき」とした人は年齢では中年層、性別では男性に多く、「お金のかけすぎ」は高齢者、「現状程度でちょうどよい」は女性に多くみられた。

表3-6 観光行政の評価と「海辺の自然や景色は活かされているか」とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	5	無回答	問5③ 海辺は活かされているか
全体	333	100.0	3.3	24.9	14.1	44.7	9.9	3.1	1: 十分に活かされている
よくやっている	73	100.0	11.0	32.9	16.4	31.5	6.8	1.4	2: まあ活かされている
問題がある	237	100.0	1.3	22.4	13.1	50.2	10.5	2.5	3: どちらともいえない
無回答	23	100.0	0.0	26.1	17.4	30.4	13.0	13.0	4: あまり活かされていない
									5: 全く活かされていない

表3-7 観光行政の評価と厳島神社等を活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答	問6④ 厳島神社その他文化財
全体	333	100.0	48.3	6.6	28.8	13.5	2.8	1: 守り伝えることが第一
よくやっている	73	100.0	65.8	6.8	19.2	6.8	1.4	2: 現状程度の活用
問題がある	237	100.0	43.5	6.3	32.9	16.0	1.3	3: 周辺環境の整備
無回答	23	100.0	43.5	8.7	17.4	8.7	21.7	4: 関連集客施設をつくる

問5 宮島の観光資源は活かされているか

以下の①～⑥の地域資源について観光面で活かされているかどうかを質問した。なお、①～⑥のそれぞれの結果は相互に似たような傾向を示し、ある資源をそれが活かされていると評価する人は、他の資源も同じように活かされていると考える割合が高くなり、逆にある資源が活かされていないと評価する人は、他の資源も活かされていないと評価する傾向がみられる。

① 厳島神社, その他の文化財 (図3-17)

これについては、「十分に活かされている」が18.6%、「まあ活かされている」が45.6%となり、他の資源と比べて最も「活かされている」の回答が多かった。特に「十分に活かされている」は、他の資源の場合と比べて2～3倍も割合が高い。ここで神社などが観光に活かされてると答えた人の多くは、問6のどのような方向で活用すべきかとの問いに対して、「文化財として守り伝えることが第一である」と積極的に次世代に守り伝えることを指向している(表3-8)。後述するように、神社や文化財は「守り伝えることが第一」と考える人が全体の半分近くを占めるが、神社が観光に「十分に活かされている」とした層ではさらに多く、約7割がそのように考えている。逆に活かされていないと考える人は、周辺環境整備や集客施設の整備を求める割合が高くなった。

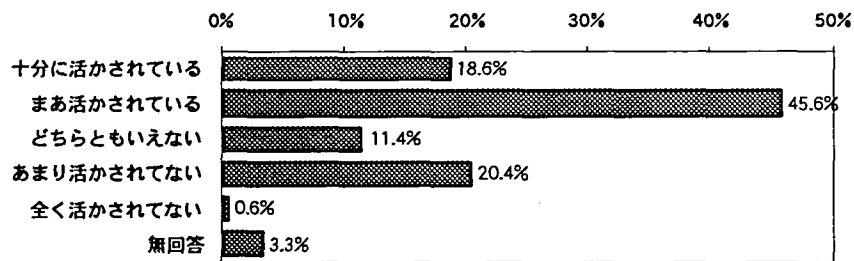


図3-17 厳島神社他の文化財は観光に活かされているか

表3-8 「厳島神社等は活かされているか」と厳島神社等を活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答	
全体	333	100.0	48.3	6.6	28.8	13.5	2.8	問6① 厳島神社その他文化財
十分に活かされている	62	100.0	69.4	6.5	9.7	12.9	1.5	
まあ活かされている	152	100.0	48.7	7.9	28.3	14.5	0.6	1: 守り伝えることが第一
どちらともいえない	38	100.0	36.8	7.9	34.2	15.8	5.3	2: 現状程度の活用
あまり活かされていない	68	100.0	33.8	4.4	47.1	11.8	2.9	3: 周辺環境の整備
全く活かされていない	2	100.0	50.0	0.0	50.0	0.0	0.0	4: 関連集客施設をつくる
無回答	11	100.0	54.5	0.0	9.1	9.1	27.3	

② 弥山その他, 山の自然や景色 (図3-18)

山の自然や景色については、「活かされている」とした割合が「十分」と「まあまあ」をあわせて34.2%、「活かされていない」が48.3%となった。③の海辺の自然や景色と同様、自然が観光に活かされていないとする割合が高い。ただし、山の自然の方が海の自然よりは活かされていない割合が低くなった。各種規制についての意見を聞いた問16との関係では、山の自然や景色が活かされているとした層は「規制は必要である」と答えており、特に「十分に活かされている」ではその割合が83.3% (全体平均は55.6%) と高率になった。活かされていないとする層では「規制が町づくりの障害になっ

ている」や「規制があってもなくても町とは関係がない」と答えた割合が高くなった。



図3-18 山の自然や景色は観光に活かされているか

③包ヶ浦その他, 海辺の自然や景色 (図3-19)

海辺の自然や景色については、「活かされている」とした割合が「十分」と「まあまあ」をあわせて28.2%、「活かされていない」が54.6%と半数を超えた。山の自然の方より海辺の自然の方が活かされていないと考えられている。山に対してと海に対してとで若干意識に違いがあるように思われる。なお、「全く活かされていない」が9.9%もあり、他の資源と比べてかなり高い。

また、先にふれたように、この項目については、町の観光行政の評価とも関係が深く(表3-9)、「十分に活かされている」とした場合のみ、町の観光行政を「よくやっている」と評価し(72.7%)、それ以外では「問題がある」の割合の方が「よくやっている」より2倍から5倍程度も多くなっている。「活かされていない」と感じている層では、約8割の人が観光行政に問題があると考えている。

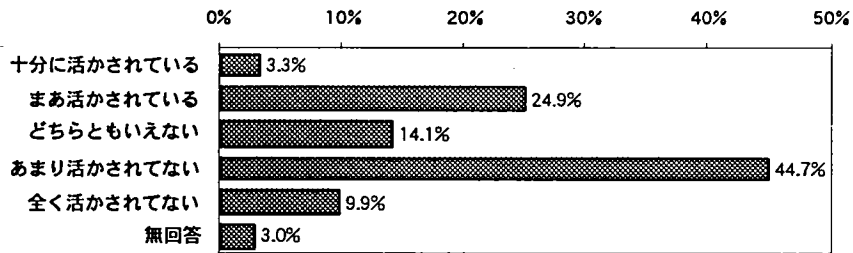


図3-19 海辺の自然や景色は観光に活かされているか

表3-9 「海辺の自然や景色は活かされているか」と観光行政の評価とのクロス表

	回答数	全体	1	2	無回答	
全体	333	100.0	21.9	71.2	6.9	問4④ 観光行政の評価
十分に活かされている	11	100.0	72.7	27.3	0.0	
まあ活かされている	83	100.0	28.9	63.9	7.2	1: よくやっている
どちらともいえない	47	100.0	25.5	66.0	8.5	2: 問題がある
あまり活かされていない	149	100.0	15.4	79.9	4.7	
全く活かされていない	33	100.0	15.2	75.8	9.0	
無回答	10	100.0	10.0	60.0	30.0	

④水族館や歴史民俗資料館、公園などの施設（図3-20）

「水族館や歴史民俗資料館、公園などの施設」については、「活かされている」とした割合が「十分」と「まあまあ」をあわせて38.4%、「活かされていない」が40.2%とほぼ同じくらいになった。良否とも「まあまあ」や「あまり」など、どちらかといえばというレベルがほとんどになった。町が直接関わる数少ない施設であり、一定の利用も集客もあり評価できる反面、さらなる集客力を持ちうるかとか、町の財政状況などを考慮に入れると判断が難しいのかもしれない。

問6のこれら施設の活かし方についての質問との関係では、「活かされている」と判断する層では「現状維持」を、「活かされていない」とする層では「施設の拡充」や「新たな施設をつくる」といった更なる投資を求める割合が高くなった。このほか、「十分に活かされている」と「どちらともいえない」とした層では、相対的に「町財政に見合った経営を行う」の割合が高くなった。

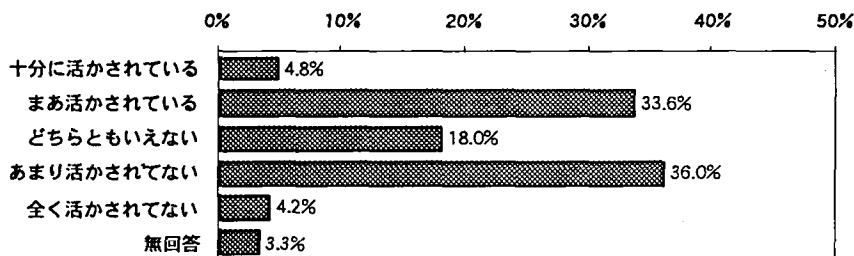


図3-20 水族館や資料館等は観光に活かされているか

⑤旅館や土産物店が並ぶ町なみ（図3-21）

「旅館や土産物店が並ぶ町なみ」については、「活かされている」とした割合が「十分」と「まあまあ」をあわせて37.5%、「活かされていない」が32.4%とほぼ同じくらいになった。水族館などの施設と比べると、良い評価の方が多くなる点に違いがある。

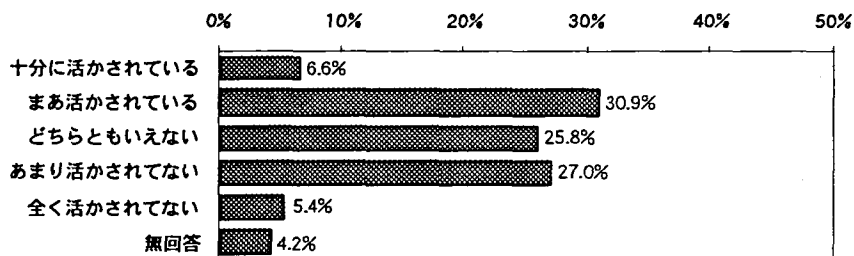


図3-21 まちなみは観光に活かされているか

⑥各種の祭りやイベント (図3-22)

「各種の祭りやイベント」については、「十分に活かされている」が7.5%、「まあ活かされている」が42.0%となり、「巖島神社その他の文化財」に次いで観光に活かされているとした割合が高くなった。祭りは神社が中心になるものであり、神社に関しては不満を感じる人は少ないようである。その他にも夏の花火大会をはじめ、祭りやイベントには多くの観光・行楽客が訪れており、観光に活かされているかを問うこの設問では、良い評価が下された。

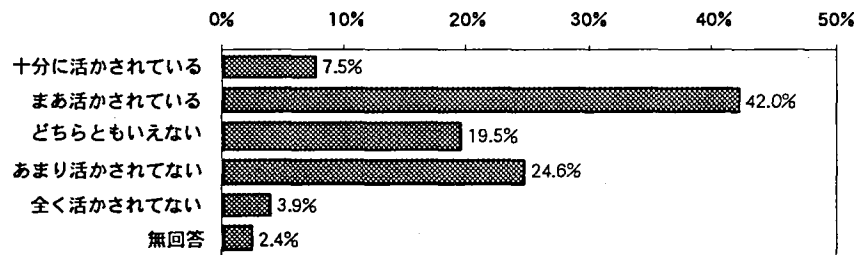


図3-22 祭りやイベントは観光に活かされているか

町の観光行政の評価との関係を見ると(表3-10)、「よくやっている」と評価する層の7割が、祭りやイベントが観光に活かされていると評価しており、他の資源と比べて特に多くなっている。中でも「十分に活かされている」を選んだ層では、町は「よくやっている」の割合(56.0%)が「問題あり」の割合(40.0%)を上回った(「よくやっている」の全体平均は21.9%)。

表3-10 「祭りやイベントは活かされているか」と観光行政の評価とのクロス表

	回答数	全体	1	2	無回答	
全体	333	100.0	21.9	71.2	6.9	問4④ 観光行政の評価
十分に活かされている	25	100.0	56.0	40.0	4.0	
まあ活かされている	140	100.0	26.4	67.9	5.7	1: よくやっている
どちらともいえない	65	100.0	13.8	81.5	4.7	2: 問題がある
あまり活かされていない	82	100.0	14.6	80.5	4.9	
全く活かされていない	13	100.0	0.0	69.2	30.8	
無回答	8	100.0	12.5	50.0	37.5	

問6 宮島のそれぞれの地域資源を活かす場合に望まれる方向

以下の①~⑤の地域資源についてどのような活用方向が望ましいかを尋ねた。選択肢には、その資源を守ることと、それにちなんだ(あるいはその場所に)新たな集客施設をつくることとが対峙するような傾向をもたせた。資源は異なっても、守ることを重視する人は資源を問わず守ることを重視し、新たな集客施設を必要と考える人は、場所やテーマを問わずそれが必要と考える傾向が強い。

① 厳島神社, その他の文化財 (図3-23)

これについては、「文化財として守り伝えることが第一である」とした人が48.3%とほぼ半数を占め、他の項目と比べても最も高い割合になった。ついで「町なみや遊歩道など周辺環境を整備する」が28.8%、「神社や史跡にちなんだテーマパークなどをつくる」が13.5%となった。

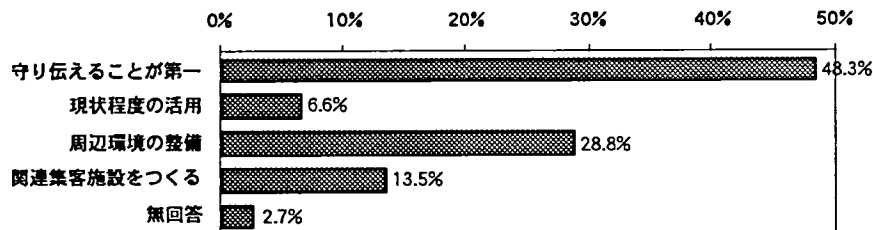


図3-23 厳島神社その他の文化財の活かし方

表3-11 厳島神社等を活かす方向と観光行政の評価とのクロス表

	回答数	全体	1	2	無回答	
全体	333	100.0	21.9	71.2	6.9	問4④ 観光行政の評価
守り伝えること第一	161	100.0	29.8	64.0	6.2	
現状程度の活用	22	100.0	22.7	68.2	9.1	1: よくやっている
周辺環境の整備	96	100.0	14.6	81.3	4.1	2: 問題がある
関連集客施設をつくる	45	100.0	11.1	84.4	4.5	
無回答	9	100.0	11.1	33.3	55.6	

表3-12 厳島神社等を活かす方向と観光振興のための財政規模とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	無回答	
全体	333	100.0	45.9	28.2	19.8	6.1	問4⑤ 観光振興のための財政規模
守り伝えること第一	161	100.0	39.8	33.5	19.9	6.8	
現状程度の活用	22	100.0	22.7	31.8	40.9	4.6	1: 今以上の投資
周辺環境の整備	96	100.0	56.3	21.9	20.8	1.0	2: 現状程度でよい
関連集客施設をつくる	45	100.0	64.4	22.2	8.9	4.5	3: お金のかけすぎ
無回答	9	100.0	11.1	22.2	11.1	55.6	

表3-13 厳島神社等を活かす方向と土地利用規制に関する意見とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	5	無回答	
全体	333	100.0	55.6	7.8	10.2	12.0	7.2	7.2	問16① 規制に関する意見 (町にとって)
守り伝えること第一	161	100.0	65.8	5.0	6.8	8.7	6.2	7.5	1: 規制は必要である
現状程度の活用	22	100.0	40.9	9.1	18.2	13.6	13.6	4.6	2: 必要だが現状では不十分
周辺環境の整備	96	100.0	57.3	10.4	10.4	12.5	6.3	3.1	3: まちづくりの障害である
関連集客施設をつくる	45	100.0	28.9	11.1	20.0	22.2	11.1	6.7	4: 人口流出の一因である
無回答	9	100.0	22.2	11.1	0.0	11.1	0.0	55.6	5: 町には関係ない

観光行政の評価（問4④）とのクロス集計の結果からは（表3-11）、「守り伝えることが第一」と「現状程度の活用」では観光行政を比較的好くやっていると評価する傾向が強く、「周辺環境の整備」と「関連集客施設をつくる」では観光行政に問題があると評価する割合が高くなった。これを裏付けるように、観光振興のための財政規模（問4⑤）とのクロス（表3-12）では、前二者では現状程度の財政規模でよいの割合が高く、後二者では今以上に投資すべきとした人が半数以上を占めている。

文化財保護のために各種規制が土地利用に課せられていることをどう思うかと尋ねた問16とのクロス表（表3-13）では、「守り伝えることが第一」とした層では、規制が存在することを町にとって「必要である」と考える割合が高く（65.8%）、「文化財を守ることは宮島住民の責務である」と考える割合が高くなった（67.1%）。文化財の島に住んでいることを誇りに思うとした人も、他の選択肢と比べて高い割合になった。「周辺環境を整備」した方がよいとした層もこれと似た傾向を示す。

これに対して「関連集客施設をつくる」を選んだ層では、町にとって規制が必要と考える割合は全体平均の半分程度と少なく、「規制がまちづくりの障害になっている」や「規制があるために人が町から出ていってしまう」と考える割合が高くなる。

「現状程度の活用で十分」を選んだ層は、「関連集客施設をつくる」を選んだ層と似た傾向を示している。この層は、観光行政をよくやっていると評価するものの、現状程度の金のかけ方で十分であり、各種の規制をあまり好ましく思っていない。

②弥山その他、山の自然や景色（図3-24）

山の自然や景色については、「自然環境保全を中心に考える」が42.3%で最も多く、次いで「歩道や休憩所などをする整備」（24.3%）、「施設整備よりソフト」（17.4%）と続き、「スポーツ・レジャー施設を整備する」は13.2%であった。

規制の存在については、上の文化財とほぼ同じような傾向を示す。

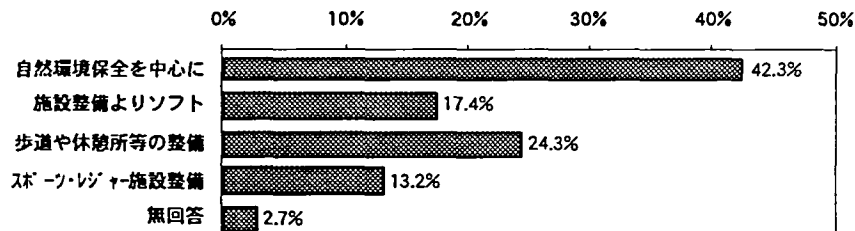


図3-24 山の自然や景色の活かし方

③包ヶ浦その他, 海辺の自然や景色 (図3-25)

海辺の自然や景色については, 「自然環境保全を中心に考える」が45.9%で最も多く, 次いで「スポーツ・レジャー施設を整備する」(24.6%), 「施設整備より観察会などを充実する」(14.7%), 「道路や駐車場を整備する」(11.1%)となった。山と比べた場合, 「保全を中心に考える」べきとした割合がやや高くなるが, それよりも「スポーツ・レジャー施設を整備する」が2倍近く高くなったことが特筆される。資源が活かされているかを尋ねた問5でも, 海辺の自然や景色が「活かされていない」の割合が, 山のそれよりも高くなったように, 海と山とでは住民の間に若干の意識の違いがある。

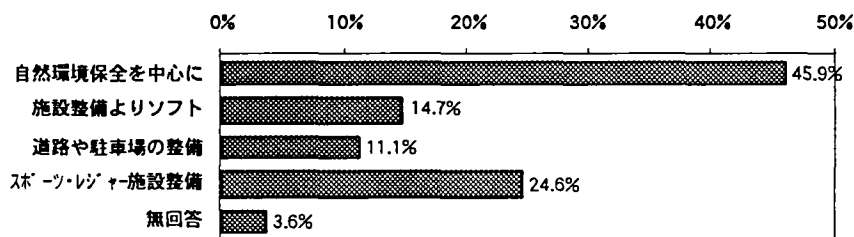


図3-25 海辺の自然や景色の活かし方

④水族館や歴史民俗資料館, 公園などの施設 (図3-26)

水族館や資料館, 公園などの施設については, 「現状を維持する」が44.1%で最も高く, 次いで「施設の拡充を図る」が21.0%, 「町財政に見合った経営を行う」が20.4%, 「新たな観光施設をつくる」が12.0%となった。新たな施設をつくることに関しては, 文化財の活かし方でも山の活かし方でも, 12~14%とほぼ同じ程度になった。これと比べると海辺に関して新たな施設を整備すべきとした割合が, この倍の約25%になったことは注目される。

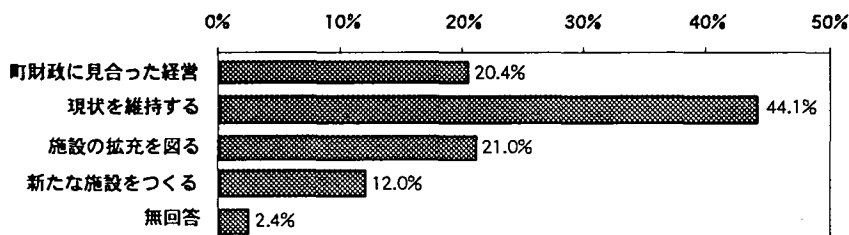


図3-26 水族館や資料館等の施設の活かし方

観光行政の評価 (問4④) とのクロス集計の結果からは (表3-14), 「町財政に見合った経営を行う」べきとした層は, その約9割が現在の観光行政に問題があると考えている。施設の拡充や新規施

設を求める場合にも「問題がある」の割合がやや高くなり、「現状を維持する」の場合には「問題がある」の割合が相対的に低くなった。観光振興ためのお金のかけ方について(表3-15), 「町財政に見合った経営を行う」と考える場合は「お金をかけすぎている」を選んでいるが(全体平均の19.8%に対して44.1%), 施設の拡充や新規施設を求める場合は, 6, 7割の人が「今以上に観光振興ために投資すべき」を選んでいる。水族館などの施設の評価については, 他の資源と比べて, 住民の間の意見が分かれている。

表3-14 水族館や資料館等を活かす方向と観光行政の評価とのクロス表

	回答数	全体	1	2	無回答	
全体	333	100.0	21.9	71.2	6.9	問4④ 観光行政の評価
町財政に見合った経営	68	100.0	8.8	86.8	4.4	
現状を維持する	147	100.0	28.6	63.9	7.5	1: よくやっている
施設の拡充を図る	70	100.0	24.3	72.9	2.8	2: 問題がある
新たな施設をつくる	40	100.0	17.5	75.0	7.5	
無回答	8	100.0	12.5	37.5	50.0	

表3-15 水族館や資料館等を活かす方向と観光振興のための財政規模とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	無回答	
全体	333	100.0	45.9	28.2	19.8	6.1	問4⑤ 観光振興のための財政規模
町財政に見合った経営	68	100.0	25.0	25.0	44.1	5.9	
現状を維持する	147	100.0	40.1	38.1	16.3	5.5	1: 今以上の投資
施設の拡充を図る	70	100.0	70.0	14.3	14.3	1.4	2: 現状程度でよい
新たな施設をつくる	40	100.0	62.5	27.5	2.5	7.5	3: お金のかけすぎ
無回答	8	100.0	37.5	0.0	12.5	50.0	

⑤旅館や土産物店が並ぶ町なみ(図3-27)

町なみについては, 「観光客の好みやイメージにあった町なみを創造する」が30.0%, 「景観保全を強化して町なみを守る」が29.4%とほぼ同程度になった。これらに次いで「現状程度で十分」(21.0%), 「規制を緩和する」(8.1%), 「町なみより道路整備」(6.3%)となった。文化財や自然資源と比べると, 町なみの場合は, それを守ろうという姿勢が弱くなる。

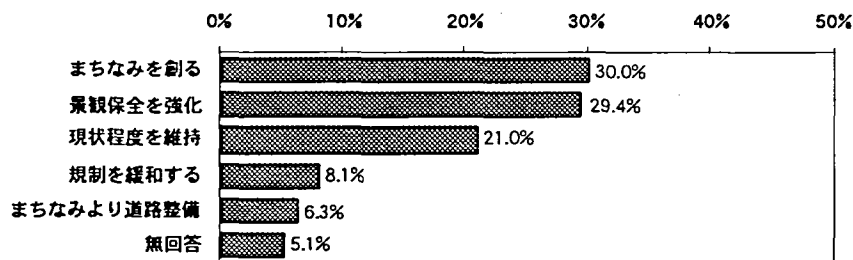


図3-27 まちなみの活かし方

問7 宮島の観光客について

①観光客は増えた方がよいか (図3-28)

現在、宮島には200万人を越す人々が訪れているが、「もっと多くの観光客に来てほしい」と考える人は、全体の57.1%になっている。宮島は行楽・観光地の歴史が長く、産業面でも観光業に特化しているので、当然な結果といえるが、日本で世界遺産登録を受けた、白川郷や屋久島、白神山地などで、観光客が急増したことが地域社会の問題になっていることを考えると、同じ世界遺産登録地では宮島は特異な存在といえるかもしれない。

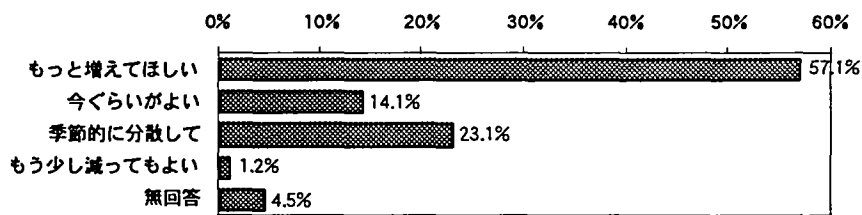


図3-28 今後観光客が増えてほしいか

②観光客が多い日の印象 (図3-29)

観光客が多い日には、過半の人が「にぎやかでよい」と思い(55.3%)、「うるさいとか、うっとうしい」と思う人はほとんどいなかった。「観光地なので仕方がない」は22.8%、「気にしたことはない」は16.2%であった。この設問と次の設問は、宮島だけで問うてもほとんど意味がないが、今後、他の地域と比較する場合には参考になるだろう。

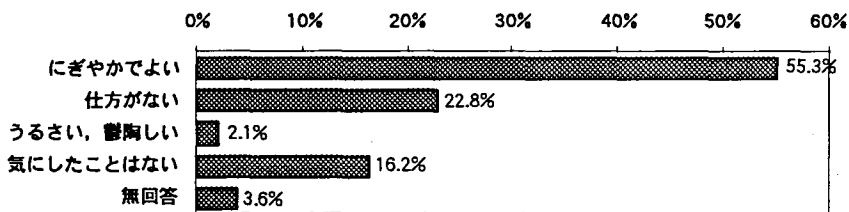


図3-29 観光客が多い日に感じる気持ち

③観光客が少ない日の印象 (図3-30)

観光客が少ない日には、6割近くが「さびしい」と思っている(57.7%)。「不安に思う」も17.4%になった。「静かで落ち着くと思う」は9.9%、「気にしたことはない」は11.7%であった。

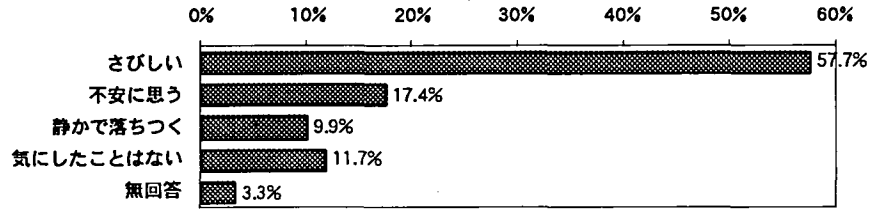


図3-30 観光客が少ない日に感じる気持ち

問8 観光地であるために自分の生活で迷惑を被っているか (図3-31)

観光地であるために迷惑を被っていると思うことがあるかについて、「迷惑とは感じない」が45.9%で最も多く、次いで「たまに迷惑に思う」が44.7%となり、この二つで回答を二分している。

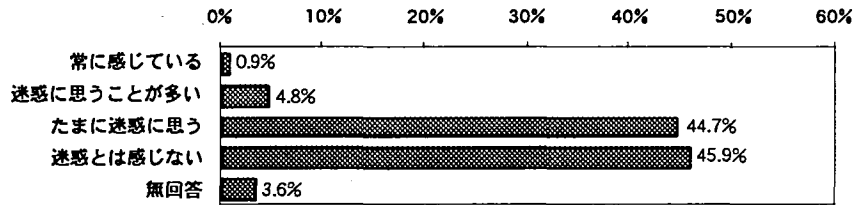


図3-31 観光地であるために迷惑だと思うことがあるか

問9 観光地であるために迷惑を被っていると感じる事 (複数回答) (図3-32)

「ゴミが町中に散乱する」が最も多く (59.2%)、次いで「観光客が与える餌で鹿が増える」(44.1%)、「交通渋滞が起こる」(39.0%)、「なにごとにも観光が優先される」(19.2%)、「風紀上・治安上のトラブルが起こる」(9.6%)、「イベントなどの手伝いになり出される」(7.2%)となる。鹿の問題と交通渋滞は宮島ならではの事情がある。鹿が町の中を歩き回り、ところ

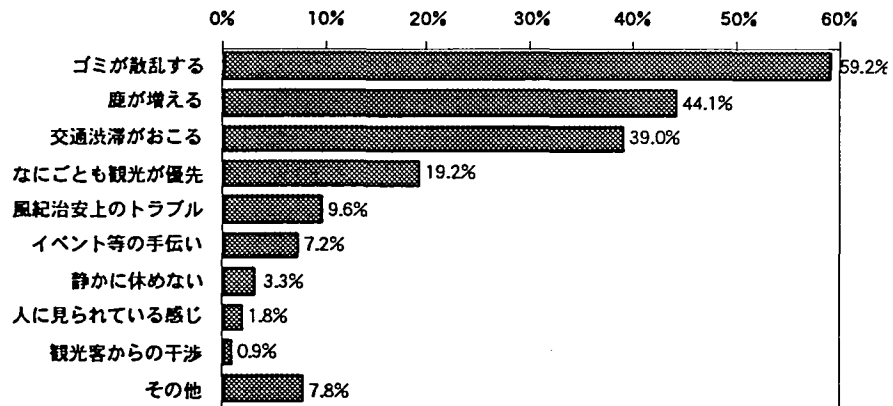


図3-32 迷惑だと感じるのはどういう時 (複数回答)

かまわず糞をまき散らし、庭に入ってきて植木などを食べてしまったり、観光客の荷物を食べてしまったりということが起きている。庭に鹿が入ってこないような工夫が各家でなされている。交通渋滞は観光地一般でみられることではあるが、宮島では道路の拡幅などが容易にできないため、海水浴シーズンのように自家用車での来島者が集中するときには、特に渋滞が発生する。

問10 観光地であることの生活上のメリット（複数回答）（図3-33）

観光地であることのメリットとしては、「上下水道などの生活基盤の整備が進んでいる」が最も多く、半数の人がこのことをメリットと考えている。魅力ある観光地であるためには、これらは必要な投資であるが、人口が3,000人に満たない町で、200万人を越す来島者がいることを前提とした施設を維持することは財政にとっての大きな負担になっている。半数の人が生活基盤整備をあげたということは、このことが住民の間でもかなり理解されていることの現れではないかと考えられる。

生活基盤整備が進んでいることに次いで、「知名度が高い」（41.3%）、「仕事につながっている」（40.4%）、「散歩したりする環境に恵まれている」（33.1%）、「渡船の便がよい」（27.7%）、「人口が少ない割には各種施設が充実している」（22.0%）となる。ただし、「仕事につながっている」の40.4%は、問19の職業を問う設問における観光関連の割合27.3%と比べると高すぎるので、選択者の中には、自分の生活ではなく町民の生活という観点から答えている人もいると思われる。

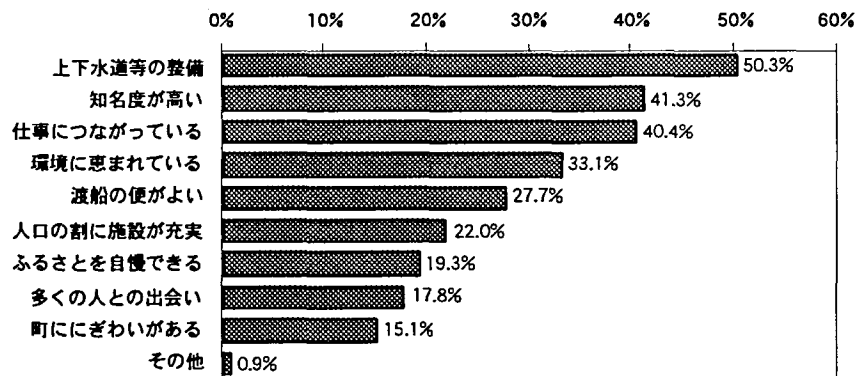


図3-33 観光地であるために役立っていること(複数回答)

問11 厳島神社の世界遺産登録について

問11～問15で厳島神社が世界遺産登録されたことに関連した質問を行った。

①世界遺産登録に関心を持ったか（図3-34）

「とても関心を持った」が最も多く (43.2%) , 「やや関心を持った」がそれに次いだ (35.4%) 。8割近い人が感心を持っていた。「あまり関心なかった」と「全く関心なかった」が合わせて17.4%であった。

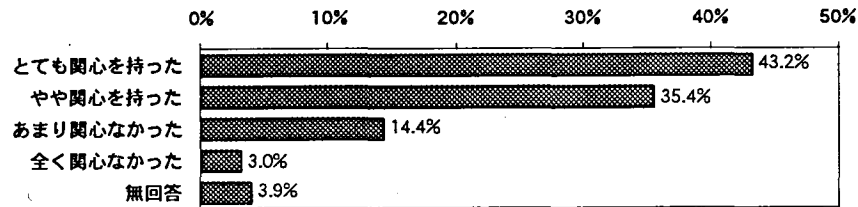


図3-34 世界遺産登録に関心を持ったか

②世界遺産登録を知ったのはいつか (図3-35)

登録されることを知ったのは、登録が決まるまでの1年間という人が61.9%で最も多く、それ以前から知っていた人は18.6%とあまり多くなかった。これは、文化庁から教育委員会を通じて地元の話が伝わったのが登録の1年ほど前だったという話と符合する。しかし、厳島神社は日本が世界遺産条約を批准した時点で (1992年) , 今後申請すべき遺産のリストに載っていたので、そのことを考えると、文化庁からの具体的な話があるまで地元で世界遺産登録を求めるような盛り上がりはあまりなかったと推察できる。登録が決まるまで知らなかった人も、14.7%に及んだ。

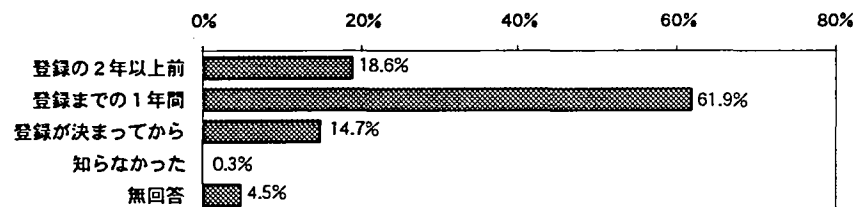


図3-35 いつ登録されることを知ったか

③世界遺産登録に向けて個人的にとった行動 (図3-36)

原爆ドームの世界遺産登録に向けては、アメリカや中国などの反対があるなど登録に政治的な意味合いが与えられ、登録促進に向けた市民運動が展開された。一方、同時に指定された厳島神社の登録にあたっては、島民の盛り上がりは特になかったという話を役所や住民からの聞き取りなどで聞いた。むしろ、登録促進を求める動きよりも、登録によって新たな規制が課せられるのではないかと心配する声が聞かれたという。本設問は、このことをアンケートによって確認しようとしたものである。

結果としては、「活動があれば協力したかったが、そのような活動がなく参加できなかった」が最

も多く (40.2%) , 次いで「住民が行動することではないので何もしなかった」が23.4%となった。「世界遺産登録に関心がなく何もしなかった」が7.2%あり、「世界遺産登録されることに反対だった」人もわずかながらいた。

住民は世界遺産登録を好意的に受け取ってはいたが、自分が関わろうとするほどには積極的に考えていなかったようである。聞き取りで「登録は上から降りてきた話」という声が聞かれたこととも符合するようである。逆に住民が関わることではないと考える人も、4人に1人おり、いずれにせよ登録に向けて町民全体が盛り上がったという雰囲気ではなかったようである。

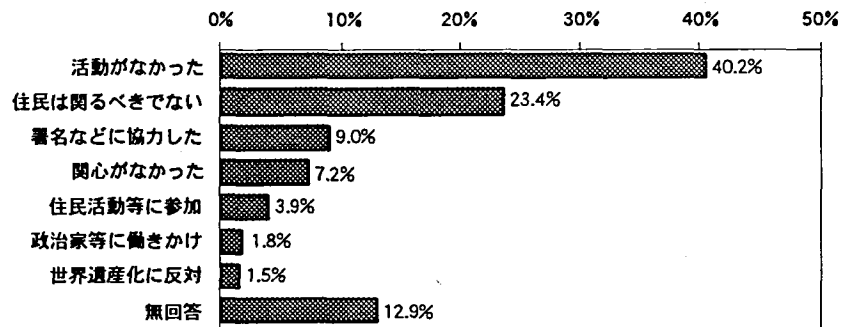


図3-36 登録に向けて活動をしたか

問12 日本三景と世界文化遺産のどちらが観光地宮島をアピールするか (図3-37)

これまで長いこと宮島のキャッチフレーズとなってきた「日本三景」と、新たなキャッチフレーズになりうる「世界遺産」のいずれが、観光地としての宮島をアピールするかを尋ねた。日本三景か、世界遺産かは五分五分の結果となった。

登録されると今でもいろいろ規制があるのに、さらに規制が課せられるのではないかと考えていた人がいたように、世界遺産登録の名前は知っていても、登録されたらどうなるのかが知られていない。そのことが世界遺産への期待があまり高くないことにつながっているのではないだろうか。

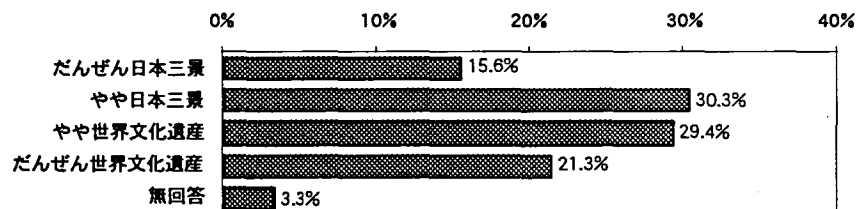


図3-37 どちらが宮島を強くアピールするか

問13 厳島神社の登録に際して抱いた期待や不安 (図3-38)

厳島神社が登録されることで抱いた期待や不安について尋ねた。最も多かったのは「より確実に文化財が守られるようになると思った」で(26.7%), 次いで「宮島の宣伝になって観光客が増える」(21.3%), 「世界に認められると誇らしく思った」(19.8%), 「建築規制などが強くなるのではないかと不安に思った」(15.9%)となった。期待を抱いたか、不安を感じたかのどちらかといえ、登録を期待した人の方が多かったといえる。ただし、観光客が増えると期待した人が約2割しかいなかったことや、登録されることに対して不安を抱いた人が少なくはなかったことは特筆できる。

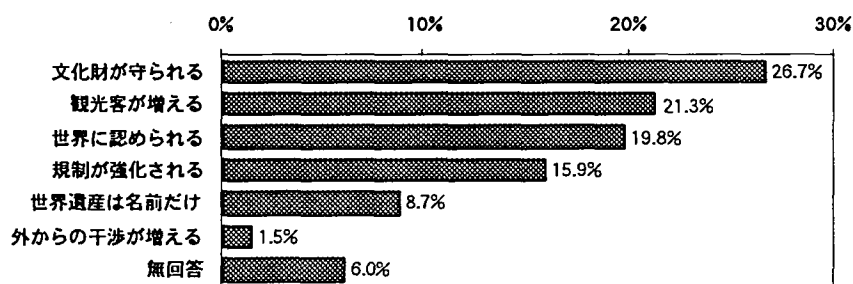


図3-38 世界遺産登録への期待と不安

問14 世界遺産登録されてよかったこと (図3-39)

世界遺産に登録されてよかったこと、効果があったと思えることは何かを複数回答可で尋ねた。最も多かったのは「厳島神社や宮島の知名度が上がった」(52.6%)で、ほぼ半数の人が登録によって宮島の知名度が上がったことを良しとしている。以下、「厳島神社や宮島への世間の関心や知識が増えた」(38.1%), 「国際的な観光地になった」(37.5%), 「文化財保護の支援体制が強化された」(27.0%), 「住民の神社への思いが強くなった」(18.9%)などが続いた。世界遺産に登録された効果は、意識面での効果が主と考えられている。「観光客が増えた」は7.2%で最も割合が低くなった。

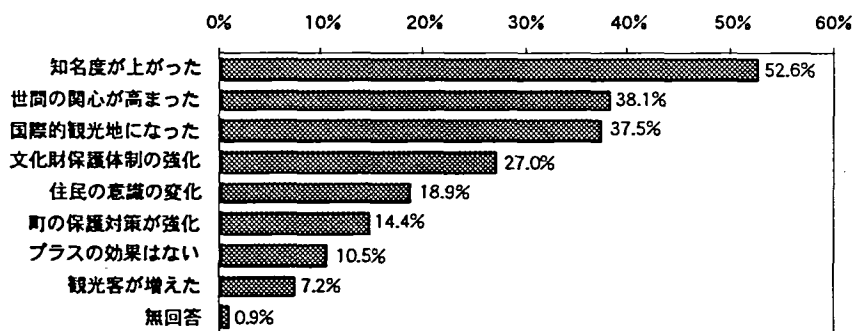


図3-39 世界遺産に登録されてよかったこと (複数回答)

問15 世界遺産登録されて好ましくない影響があったこと (図3-40)

世界遺産に登録されて好ましくない影響があったと思えることは何かを複数回答可で尋ねた。「好ましくない影響はなかった」が55.6%で最も多くなった。これに次ぐものは「文化財を守るための規制が強くなった」(19.8%)と「なにごとにも文化財の保護が優先されるようになった」(19.2%)で、他の項目の割合は低かった。特別に規制が強化されたことはないのです、これらは必ずしも事実と合っていない。以前から規制の存在を好ましく思っていなかった人が、世界遺産登録を機に改めて規制の存在を再確認したということであろう。

問14, 15からは、住民の多くが、登録で宮島・厳島神社の知名度は上がったものの、それ以外には特別にプラスの効果もマイナスの効果もなかったと認識していることがわかる。

実際には世界遺産に登録された翌年(登録は1996年末だった)の来島者数は大きく増えたのだが、その年にNHKの大河ドラマ「毛利元就」が放映されていて、広島県内の観光地は元就ブームで、ゆかりの地では観光客が増えており、宮島の観光客増加の理由が登録の効果か元就ブームか判断できない。1997年には年間300万人を越す観光客が訪れたが、翌年からは観光客数は減り続け、1999年にはしまなみ海道開通の影響もあって250万人を割り込んでしまい、過去10数年の最低水準にまで落ち込んでいる。観光客数の増加という点では、登録の効果はあったとしても一瞬のことであった。ただし、土産物店などでの話では、登録後に外国人の観光客が増えたとのことである。

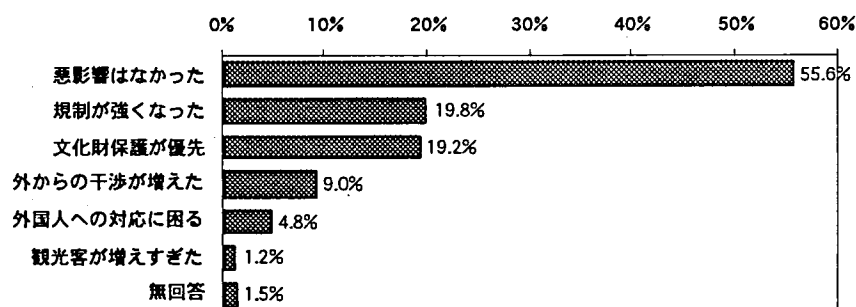


図3-40 世界遺産登録の好ましくない影響 (複数回答)

問16 文化財の島としての各種規制について

宮島の住民には、町の観光が文化財や自然でもっており、それを守ることが大切であることは認識しているものの、文化財保護のための各種規制があることを快く思っていない人も多い。規制が存在することについて、町にとって、自分にとってどう思うか、また、日本国民や後生の人たちに対してどう思うかを尋ねた。

①町にとって (図3-41)

「文化財を守るためには規制は必要である」が55.6%で圧倒的に多い。しかし、「規制があるために人が町から出ていってしまう」と「規制がまちづくりの障害になっている」を合わせると22.2%となり、マイナス面の認識も少なからず持たれていることがわかる。

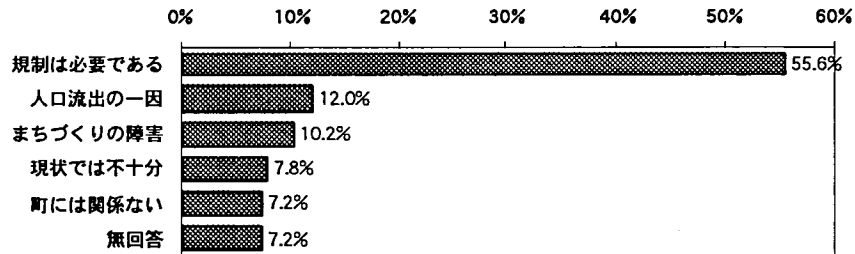


図3-41 文化財保護の規制に関する意見 (町にとって)

②自分自身にとって (図3-42)

自分自身にとってどうかという問いに対しては、「やむを得ない」が51.4%と最も多くなった。これに次いで「規制は当然で、むしろ文化財の島に住んでいることを誇りに思う」が22.8%となった。町にとって文化財を守るための規制は必要であり、一住民である自分自身としてはやむを得ないと考える住民が、全体的にみれば多い。

「規制を緩くしてほしい」は9.9%、「迷惑なだけなのでなくしてほしい」は2.1%となったが、①で町にとってマイナスであると認識している人が2割を超えていることと比べると、自分の問題としてマイナス面を意識している人は少なくなる。事実、「自分には関係ない」とした人が8.1%であった。

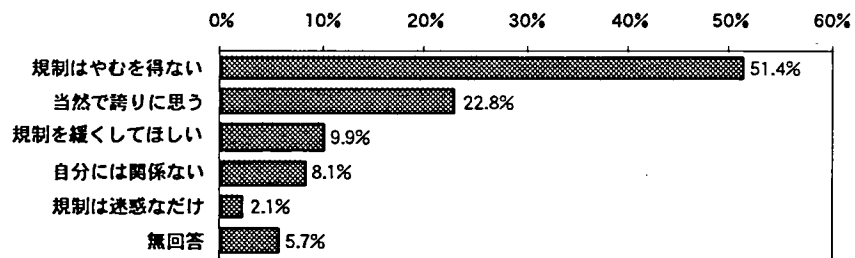


図3-42 文化財保護の規制に関する意見 (自分にとって)

③日本国民や後世の人々に対して (図3-43)

日本国民や後世の人たちに対して、「文化財を守ることは宮島住民の責務である」と答えた人が58.3%となった。本音かどうかは検証できないが、たとえ建前としても約6割の人が「住民の責務で

ある」と答えたことは重視してよい。宮島に住んでいるということへの誇りが感じられる。

この選択肢に次いで、「住民の犠牲のもとで文化財が守られていることを理解してほしい」が14.7%、「日本や世界の遺産ということよりも住民の生活が優先されるべきだ」が10.5%になった。

「生活が優先されるべき」が1割程度になるが、この1割程度（1割強）という数字は、この設問に限らず、新規集客施設をつくるべきとか、山を開発すべきとかいう、他の選択肢で開発指向の強い層が全体に占める割合とほぼ一致している。人によって回答のパターンは異なるので、住民の中から同じような回答している特定の1割の層をとり出すことはできないが、いくつかの設問で1～2割の人が現状を否定的にとらえ、残りの大部分が積極的・消極的の差はあっても現状を受け入れている傾向がみられることは、このアンケートの全般的な特徴といえる。

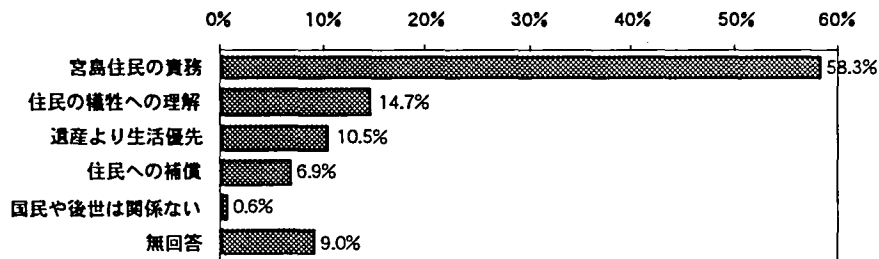


図3-43 文化財保護の規制に関する意見（国民等に対し）

第4章 観光地域しまなみ海道の現状と住民意識

第1節 しまなみ海道の概況

(1) しまなみ海道の歴史

しまなみ海道は本四連絡橋の最後のルートとして1999年に開通した。「しまなみ」という概念でのルート沿いの島々を総称するようになったのは、ルート開通をにらんだ動きである。したがって、ここでふれる歴史は、現在でいうしまなみ海道ではなくて、その島々を含む芸予諸島の歴史である。瀬戸内海の歴史について最新の白幡編(1999)をはじめ、さまざまな書籍が出版され、ここでその内容を繰り返す必要はない。ここでは、しまなみ海道の現状と今後の観光開発に関連する要点のみまとめておく。つまり、現在の観光資源の由来に関する事柄とこの地域の環境や土地利用に影響を与えた事柄である。

歴史的な遺産として、しまなみ海道では水軍の文化がとりあげられることが多い。水軍の組織や活動、その果たした役割は、時代によって変化し、瀬戸内海の中でも地域性による差が大きく現れた。海賊は海上の盗賊ととられることも多いが、重要な交通ルートである瀬戸内海を管理する役割を果たしていたという見方もできる。中世には西瀬戸では村上水軍の影響力が強く、はっきりとした縄張りがあり、通る船はそこを支配する海賊の一員を船に同乗させることで襲撃対象となることを免がれ、安全な航行が可能になった。このように西瀬戸では海賊の組織化によりある一定の秩序がつけられていたのに対し、東瀬戸ではこのような秩序は形成されなかったといわれる。しまなみ海道はちょうどこの西瀬戸と東瀬戸の境界にあたり、独特な水軍文化を有している。

この地域の歴史を遡る上で、海賊よりもさらに古い現象としてよく言及されるものに塩作りがあり、その歴史は縄文時代まで遡るといわれる。塩を生産する技術が発展していく中で、花崗岩の侵食とその堆積によりできた砂浜の存在や、潮の干満の大きさ、雨の少ないおだやかな気候など、条件の揃っている瀬戸内海は日本で最も重要な産地になり、19世紀には全国総生産量の9割を生産するまでになった。塩を全国に運ぶために海運業が発達したといったプラスの効果と、製塩の燃料とするため周辺の森林が伐採され、森林が失われるマイナスの影響とがみられた。

明治時代から過剰生産のために塩田の廃止が相次ぐ。1971年に法律により日本の塩生産方法が変わり、塩田が全面的廃止にいたった。現在はエビの養殖など第一次産業に利用されるところもみられるが、大部分が建築用地に変わり、福祉施設、または大型店舗が並ぶのもこの塩田の跡地である。

陸の交通が未発達なため、塩を始め、多くの製品が瀬戸内海の海上輸送により全国各地に運ばれた。四国と本州を南北に結ぶ航路では、四国伊予から蠟や紙、本州安芸から綿や塩などがそれぞれ対岸に

運ばれた。また17世紀から江戸や大阪・京都などから瀬戸内海を通過して日本海側へ回る航路が重要な物質輸送ルートとして定期的に利用されるようになり、瀬戸内海を東西に往来する船が増加した。天然の良港といわれた尾道は、瀬戸内海の中心的な港町として繁栄した。また、物流ルートの中断点に位置する島々は、米などの生活必需品を交易により入手することが可能であったため、それぞれ独特な産業を育てて、自家消費よりも商業用の作物の生産に力を入れた。このようにして島の「専門化」が進み、現在みられる島ごとに多様な経済構造がつくられた。

このような専門化は農業や漁業ではっきり現れるが、全く別々の道を歩んだのではなく、各地に共通した発展方向もみられる。島嶼部の農業はサツマイモ、綿、モモ、ミカンへと主たる作物の種類が変化した。柑橘類生産が本格化したのは戦後からで、1980年代末にオレンジの輸入自由化の影響を受けた後は、島ごとに数種類の品種を集中して生産する傾向が強まった。漁業では潮流や水温など、場所により条件が異なるので、漁法や魚種に差がみられるものの、広く養殖が普及したことは共通した特徴である。すでに18世紀にはカキやノリの養殖が登場するが、本格的な養殖は戦後から普及し、現在は島ごとに特徴ある産物を生産している。全体的な傾向としては、第一次産業について東瀬戸では漁業が主となり、西瀬戸では山口県の諸島を除けば農業が主となっている。

塩や農水産物の輸送など、船による運搬を中心に生きてきた瀬戸内海で造船業が発展したのは当然であろう。しまなみ海道周辺の近代的な造船は1905年に生口島で始まった。1912年には日立造船が因島へ進出し、戦争中には向島に造船所を建設した。その後、1972年に瀬戸田町の地元資本の造船所が日立造船の傘下におかれ、内海造船となるなど、外部資本を中心とした造船業が発達する。しかし、オイルショックの影響を受け、1978年に瀬戸田・因島・向島を含む尾道地域は、自治省により造船の業種で特定不況地域振興総合対策の指定を受けた。因島市の造船業従業者は1971年から87年までに10分の1に減少し（由比浜編，1993），岩城村では1981年から87年まで村内5か所の造船所の従業者は半減した。その後、しまなみ海道広島側の基盤産業であった造船業は厳しい状況が続いている。

造船業に限らず、各地の全産業について従業者数を本社所在地別に分析すると、瀬戸内地域における経済圏域が明らかになる。瀬戸内地域に最も大きな影響を及ぼしているのは東京を中心とした経済圏であり、その下位に大阪・広島・福岡を中心とした経済圏が位置し、香川・岡山の経済圏が重なるといった重層的な圏域構造がみとめられる。東京に本社をおく企業の従業者の割合が特に高い業種は建設業、製造業、運輸通信業、金融保険業で、島の経済に関連の深い造船業、海運業はそこに含まれる（由比浜編，1993）。日立造船の例で見ると、大阪本社の支配下に、因島の造船所がおかれ、その従業員と下請けの関連産業に従属する人々の住む因島及び周辺の島々という、重層的な地域構造がみ

られる。このような構造は本州よりも島嶼部, そして四国側で顕著である。海上の交通量が多く, 事故が相次いだことも架橋計画がすすめられた理由であったが, それよりも経済的な効果への期待が架橋の主たる理由で, 特に四国の地域振興を目的としてこの大規模プロジェクトは進められた。橋の建築に向けた最初の調査は1959年に行われ, 60年代の末に高度経済成長を背景に3つのルートが認定された。しかし, オイルショックの影響で計画が変更され, まずは1ルート(瀬戸大橋)3橋(大鳴門橋, 大三島橋, 因島大橋)を優先着工することになった。その他の橋の着工が次の経済成長期, つまりバブルの時期までずれており, 1999年ようやく全ての橋が完成した。

(2) しまなみ海道の現状

しまなみ海道は, 人口規模や年齢構造, 産業構造などの異なる6つの島(1市7町)をつなぐ。北半分が広島県, 南半分が愛媛県である。その他, 橋脚が設置されただけの島として無人島が2か所, 今治市に属する有人島が1か所あり, さらに向島に尾道市の一部が含まれるので, 合計9島で3市7町の区域に渡っている。さらに愛媛側には橋でつながっていないが, 観光ガイドブックなどでは「しまなみ海道」地域に含められ, 橋で結ばれた島々と密接な関係を持っている5つの有人島(3町村)がある。以下, これらの島々の現状をみることにするが, 対象とするのは尾道市, 今治市を除く橋のかかった1市7町と, 橋はかからなかったが関係の深い島の1町2村の合計1市8町2村とする。その理由は, 尾道市と今治市は人口や経済的な規模があまりにも島嶼部と異なるため, 合算すると島嶼部の特徴がみにくくなるなど問題が生じるからである。ただし, 両市はしまなみ海道のスタート地点になるため, この地域の観光を考える際(第2節)には両市を含めて考える。

まずこの地域の特徴として, 全国の過疎地域に共通することであるが, 激しい人口減少と高齢化が上げられる(図4-1)。人口減少と高齢者が全人口に占める割合との間に強い関係が現れてきたのが80年代以降の過疎化の特徴であり, 1990年の過疎地域活性化特別措置法もその実態を反映している。人口減少と高齢化は本州または四国から離れた位置にある島ほど顕著になる。1990年からの5年間で各島の人口は平均で7.6%減少したが, その減少率はその次の5年間でも改善されず, 7%台で相変わらず高い。

各島は特徴的な経済構造を持ち, 2, 3の産業を基盤としている。そのため, 産業部門別の従業者構成も第1次・第2次・第3次産業の分類で異なっている(図4-2)。広島側の向島町, 因島市は造船業の比重が高く, 加えて人口の多さを反映して卸売・小売・飲食業の蓄積もある。なお, 向島町の住民は隣接する尾道市に職場を持つ場合が多い。生口島にある瀬戸田町は, 柑橘類生産を主体とする

農業が中心的な産業であり、それに造船業が加わる。しかし、島の東南部は行政的に因島市に属し、そこから因島の造船所に通う住民が多いため、島全体でみれば就業者ベースにおける造船業の重要性はより高い。橋のかからなかった離島では、岩城村は瀬戸田町とよく似た産業構造を持つが、弓削町と生名村の住民は、となりの因島市の造船業とサービス業に従業する島外通勤者の割合が高い。これらの島は行政上、愛媛県に属するが、生活上は主に広島県側とのつながりが強い。大三島は農業の島

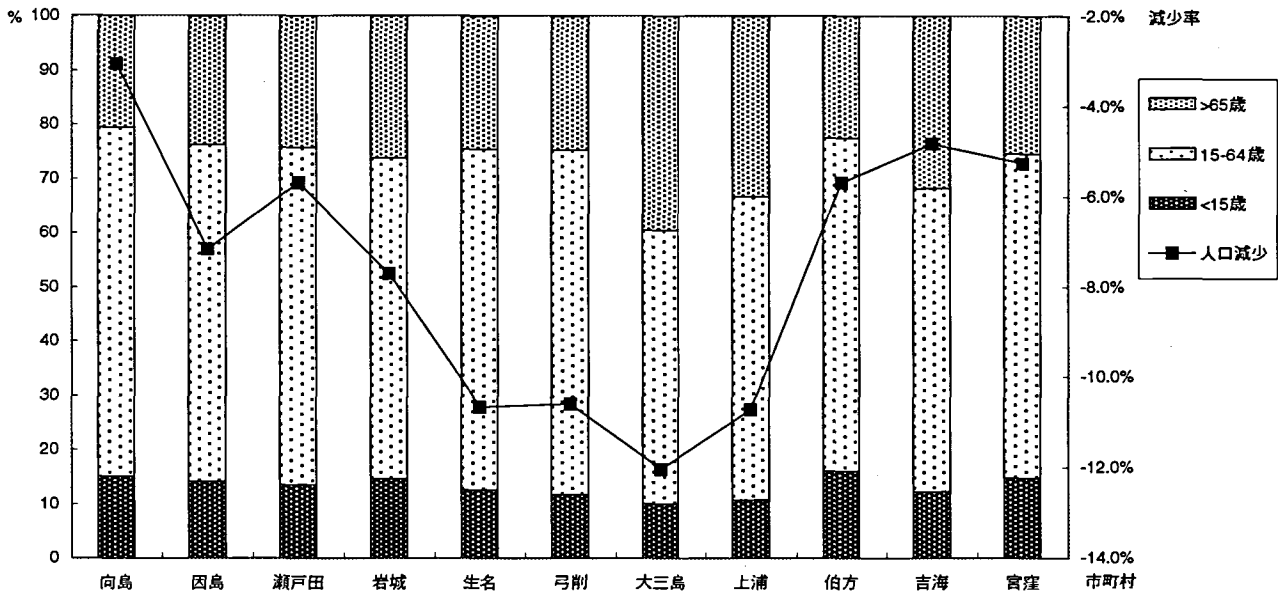


図4-1 しまなみ海道沿いの市町村の年齢構造(1995)と人口減少(1990-95)

資料 1990,1995年国勢調査

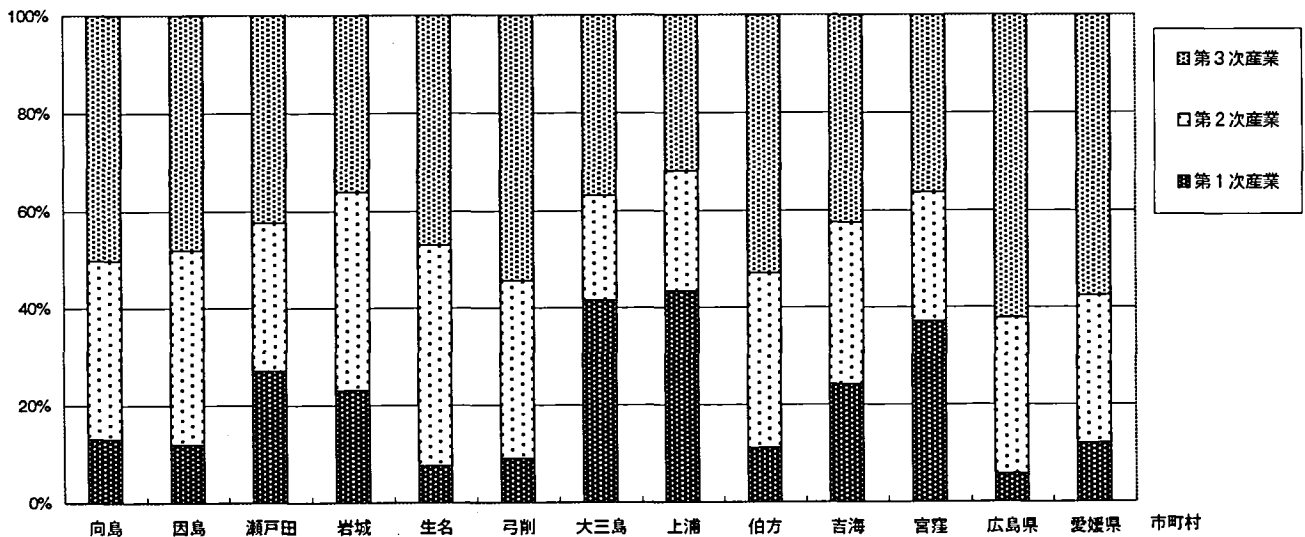


図4-2 しまなみ海道沿いの市町村の産業別従業者構成 (1995)

資料 1995年国勢調査

で高齢者割合も高い。伯方町は独特な存在で、海運業に属するものが多く、当地で従業する者のうち20%弱が全国各県に居住地をもっている。吉海町と宮窪町は同じ大島に位置するが、宮窪町はしまなみ海道で唯一漁業を中心としている町であり、採石も行われ特徴的な産業となっている。

造船業や農業の比重が全体的にみると高いといえるが、造船業の不況と農産物の輸入自由化は地域経済に大きな影響を及ぼし、人口の流出に拍車をかけた。このような状況を反映して、各市町村の財政力指数は低い。特に愛媛側は伯方町を除いてすべての町村が0.3を下回り、県内町村の平均にも及ばない(横山, 1999)。

なお、ここでは産業大分類ベースの概観なので、観光産業についてくわしく触れることはできないが、強いて一つのデータをあげるならば、観光産業の一つといえる宿泊業の従業者割合は、因島市や瀬戸田町でさえ2%前後にとどまり、全国平均の1.7%とあまり変わらず、事業所統計(1996年)から読みとるかぎり、観光産業がそれほど重要ではないといえる。

橋の開通以前にはフェリーや高速艇が通勤・通学をはじめ住民の足になっていたが、一つの島の中にも複数の発着場があり、航路網も複雑にはりめぐらされていたため、観光客にとっては利用しがたいものであった。

(3) 観光への架橋の効果

しまなみ海道の橋は、1968年の尾道大橋をはじめ、次々と開通した(表4-1)。これらの橋は、本州と四国を結ぶ連絡ルートとしてよりも、島と島、島と本州または四国を結ぶところに大きな意味を持ち、生活と観光の橋としての性格が強い(藤目, 2000)。歩道と自転車道が伴設されている本四連絡ルートはしまなみ海道だけで、それがこのルートの特徴となっている。住民が生活用に利用できると同時に観光客が橋を歩きながら景観を楽しむことも可能なので、生活の利便性の向上に加えて観光客が増えることも期待され、橋の効果を新たな産業おこしへ結びつけようとする動きがみられる。大鳴門橋も、瀬戸大橋も、明石海峡大橋も開通直後に周辺へ観光ブームをもたらしたが、どちらも数か所の地名度の高い施設に観光客が集中し、そしてブームによる観光客の増加効果は2年間で消えてしまった。しかし、橋開通をあてこみ、宿泊施設など観光客を受け入れる施設が整備され、今後の観光開発の基盤になったところもみられる。

離島が橋により本土または他の島とつながることは、島国の日本ではめずらしくないことで、その効果について日本離島センターが1998年に調査(日本離島センター, 1998)を行った。その対象地域として、当時すでに本州とつながっていた因島市と瀬戸田町が含まれていた。その結果は興味深い

表4-1 各橋の使用開始時期と交通量

橋名	開始時期 年・月	交通量 1999年度
尾道大橋	1968	
新尾道大橋	1999.5	3521366
因島大橋	1983.12	4417794
生口橋	1991.12	3321503
多々羅大橋	1999.5	1982905
大三島橋	1979.5	2471117
伯方橋	1988.1	2708034*
大島大橋	1988.1	
来島海峡大橋	1999.5	2628996

本州四国連絡橋公団の資料により作成

*伯方・大島

新尾道大橋、多々羅大橋、来島海峡大橋は5月2日開通

のでここで紹介しておく。架橋前に期待したことは、暮らしの利便性の向上、農林水産業の振興、観光業の振興の3項目に集中し、架橋後、期待通りに効果が上がったとみられる分野としては利便性の向上、観光業の振興と緊急交通手段の確保があげられた。しかし、農林水産業の振興と商業の振興に関しては、期待通りの効果はあがらなかったと認識されている。因島市の場合、開通前の期待は観光業、商工業、暮らしの利便性になっていたのに対して、実際の効果は暮らしの利便性、観光業、通勤・通学の分野でみられた。瀬戸田町では、暮らしの利便性、商工業、観光業という順に期待されていたが、実際は観光業と暮らしの利便性の分野で効果が高かった。調査対象となった43島のうち、期待していたよりも架橋後に観光業への効果が上がったと評価された島の割合は27%でかなり高い。このような傾向は、各地の産業構造の認識にも反映され、架橋前から観光業を重要な産業の上位3業種としてあげていた島は、瀬戸田町を含めて全体のわずか9%であるが、架橋後の産業として27.9%の島が観光産業を重要産業として数えるようになった。観光客の増加がみられた島は、全体の94%にのぼるが、人口の少ない島ほど観光客の増加が激しく、もともと観光客入り込みが少なかったために、架橋の影響が大きく現れたと考えられる。しかし、具体的な宿泊施設やレストラン、土産物店などの、観光関連施設の架橋後の変化をみると、民宿の新設が25.6%、島内資本の旅館・ホテルの新設が23.3%、島内資本のレストラン・食堂の新設が20.9%、既存旅館・ホテルのリニューアルが18.6%の島で行われた。ただし、それほど高い数値ともいえず、しかも各施設はそれぞれ各島に1か所ぐらいで、小規模なものがほとんどであった。逆に施設の新設立地やリニューアルがなかったところが、39.5%あり、長期的にみて観光業への影響が大きかったとはいえない。因島の場合は宿泊収容力が43人増え、レス

トランが1軒新設されただけで、瀬戸田町の場合は民間による活動はみられなかった。

この調査は各市町村の役場から得られた情報をまとめたもので、住民の意見をアンケートの対象にしていない。瀬戸田町のように、行政は観光業を重要な産業として位置づけているにもかかわらず、生口橋開通後に民間による開発がみられなかったという事実は、行政の視点と現場の対応との違いを物語っているといえよう。また、本調査が架橋直後の効果と長期的な効果とをはっきり分けていないことも、特にブーム現象が激しい観光の分野では問題となる。しかし、この調査結果としまなみ海道全通前に橋が順次にかかっていた際に得られた経験とをあわせて考えれば、架橋による観光への影響が大きいことに間違いない。それにどう対応するかは、長期的なインパクトを左右させるといえよう。

愛媛県側の1997年の調査（いよぎん地域経済研究センター，1997）によると、企業（57.3%）よりも市町村（72.9%）と県民（76.2%）の方が何かの効果进行期待する割合が高かった。市町村が最も期待する効果は観光であるが、県民が経済的な効果よりも「車での行動範囲が広がる」という、個人的な効果を望んでいた。観光客が増えることを期待する割合が30%を下回っていたが、地域別にみると島嶼部で宇和島地方に次いで低いのが興味深い。逆に期待に歯止めをかけている理由としては料金の割高、そして地域活性化に結びつかないことがあげられている。つまり、今までの架橋経験をもとに、地域活性化よりも個人の行動範囲が広がることが期待されており、県民や企業は海道開通を冷静にみているといえよう。その中で、しまなみ海道沿いの住民はどのような期待を持ち、それは開通後にどのように変わったのか、今回のアンケートにおいて明らかにしたかったテーマの一つである。

第2節 観光の現状と問題点

（1）観光資源

日本人の伝統的な観光旅行は、景観観賞、社寺を含めた歴史遺跡見物、そして温泉を主な目的として行われてきたが、先に述べたように、瀬戸内海の観光的魅力は島と海の景観に基づいている。松山市の道後温泉は唯一温泉地として名が高く、この周辺で最も収容力の高い宿泊地になっているが、しまなみ海道の島々には1995年に多田羅温泉ができるまで温泉はなく、現在もその一か所の入浴施設にかぎられる。歴史的遺産は、本州側の尾道市に多く、それを目当てに多くの観光客が訪れる。その観光客数は年度によるばらつきはあるものの、広島県内で3・4位に入る。今治市の今治城は尾道の諸遺産に比べると集客力が弱く、客数も年々減少しつつある。島嶼部では大三島にある大山祇神社とその武具類を集めた宝物館が多くの観光客を集め、中心的な観光地の一つとなっている。さらに隣の瀬戸田町では戦前から長年かけて日本各地の有名な仏教建造物を再現してきたことで知られる耕三寺があ

り、この2か所がながらく観光の目玉として、多くの観光客、特に団体客を引きつけてきた。

橋の建設が具体化してきた1970年代は、さまざまなレジャー活動が流行り始めた時期でもあり、その後の各種地域計画においてマリンレジャーが急速に普及することを想定するようになった。1987年の総合保養地域整備法（通称リゾート法）もフランスなどの海岸リゾートを手本とし、海に臨んだ宿泊施設、マリーナ、海水浴場をセットとしたリゾート区域を整備することを一つの原型とした（総務庁行政監察局編、1994）。この法律に基づき、瀬戸内海を囲む1府10県のうち6県が海岸リゾートの構想をうちだした。これらの構想はバブル崩壊の影響もあり、そのほとんどが計画段階で中止されることになった。ただし、計画の一部は後に県や市町村により実現され、瀬戸内海地域にある程度の実績を残した（Funck, 1999）。しかし、しまなみ海道の開通に当たって出版された多くの観光ガイドブックを見るかぎり、海水浴場や遊漁船以外、マリンレジャー施設はほとんど記載されていない。全国のマリンレジャーへの参加率を項目別に分析すると、ヨット、スキューバダイビング、サーフィンのいずれも1%にすぎない（総務庁統計局、1996）。どれも大都市圏住民の参加率が高く、ヨットのみ広島県が全国平均を上回る。しかし、マリーナの整備が進まない中で、ヨットに乗ったことがある人の割合は1991年の調査に比べてさらに減っており、マリンスポーツの中でも自然条件からみて瀬戸内海が好適地であるといえる項目でさえ発展の見通しがあまりない。日帰りレジャーを考えるならば、居住地をベースにした人々のニーズを意識することは大切であるが、ダイビングやサーフィンをする場合は瀬戸内海よりも海外のリゾート地に行くだろう。これまで期待をこめて想定されてきたマリンレジャーの時代は、瀬戸内海には訪れていないようであり、海外のリゾート地域との競争を考えれば、今後も普及する見通しは暗いといわざるをえない。

マリンレジャーの急速な普及は実現しなかったが、しまなみ海道地域では、観光施設の多様化が進み、観光資源が複合化しているのは確かである。ここでは個々の施設について述べないが、全体的な開発の過程の担い手、並びに今後の方向について説明しておく。

広島側では、生口島までの3つの連絡橋がすでに1991年に開通しており、そのスタート地点に尾道という集客力の強い観光地が立地していることや、後背圏の人口が四国より多いことなどにより、愛媛県よりも早く観光客が増加した。あわせて施設整備も進んだ。特に瀬戸田町は、当時町長の主導による積極的な施設整備を勧め、1986年にオープンしたコンサートホールをはじめとして、相次いで観光施設を完成させた。その開発過程について、石田（1994）が詳しく紹介している。

広島県の「瀬戸内中央リゾート構想」は1989年の承認に基づき、因島、向島、生口島の3島それぞれに開発プロジェクトが計画された。このプロジェクトには県が1987年に示していた「園芸ベルト地

帯構想」を実現する主要3施設, 因島フラワーセンター(1994オープン), 向島洋ランセンター, 瀬戸田シトラスパーク(いずれも1998年オープン)も含まれていた。リゾート計画の多くの民間プロジェクトが実現されずに終わった中で, 農業と観光を結びつけることを目的にしたこれらの施設は, 県と各市町との協力により完成された。

愛媛県側では, 県が橋の開通を視野に入れて, 「愛媛瀬戸内リゾート開発構想」(1990年承認)として, しまなみ海道沿いの島々を含む4つの重点整備地区に宿泊施設, マリーナやゴルフ場などのスポーツ施設, 遊園地, 物産センターなどを整備する計画を立てた。その中には, 無人島を丸ごとリゾートに変身させる計画もあった。バブル経済がはじけ, 民間企業が各種事業から撤退した後, 一部のプロジェクトは公共事業として県や町村により進められた。各町村に必ず一つの観光施設が立地することになったのは, 公共事業として計画が進められたことにもよる。これらの開発プロジェクトにはふるさと創生資金が利用されたものも多い。

行政が関わる施設が多いだけに, つくられた施設には, 地場産業との結びつきが目立つ。例えば, 大三島の石材を紹介する石文化伝承館や, 石材野外アートが置かれている運動公園, あるいは瀬戸田町のシトラスパークなどがあげられる。民間でも地場の産業を活かした施設やイベントが増え, 向島や因島の観光ミカン園, 今治市や生口島の造船場における進水式への観光客参加, 伯方島の製塩工場の見学, 大島の漁業体験, 今治市のタオル作りなど, それぞれ規模は必ずしも大きくないが, 集客には成功している。

歴史的資源を掘り出し, または文化的遺産を活かすことも行政主導の観光開発事業の特徴である。水軍の歴史を取り上げた資料館が, 因島水軍城(1983年オープン)をはじめ, 他の島でも造られた(大島, 伯方島)。地元ゆかりの芸術家・著名人にちなんだ博物館もこの分類に含まれるが, 最も成功した例は瀬戸田町の平山郁夫美術館であろう。

施設整備とは異なり, 運輸業, 宿泊施設, 飲食店, 土産物店のような観光サービス業類は, 規模は小さいながら地元の民間資本により営まれている。各島の宿泊施設は表4-2でまとめた通り¹²⁾, 季節営業のものが多い民宿と, 値段的にも規模的にもそれに近い小旅館が大部分を占めている。

ある観光地の現代化を表す指標として日本では宿泊施設の総部屋数に占めるホテル・ペンションの部屋数の割合がよく使われる。しまなみ海道周辺の島で外部資本によるホテル開発が行われたのは, 1989年の岩城村が最初であるが, その後の開発はあまり進まず, リゾートホテルは現在も数軒にかぎられ, ペンションも2軒にすぎない。しかし, 各島にはユースホステルやキャンプ場があり, 加えて町村営の合宿施設も近年無人島や廃止になった小学校を活かして整備されている。これら宿泊施設の

安さの一つの魅力になる。最新のガイドブックに載っている島嶼部の宿泊施設102軒のうち、料金が1万円以上の施設は13軒だけで、それもほとんど1泊2食の料金である（JTB, 2000）。宿泊施設についても、今治市、尾道市と島嶼部とではその規模や集積状況が全く異なる。両市を比べると、今治市のほうがホテルの整備が進んでいる。

表4-2 しまなみ海道沿いの宿泊施設と収容人員

	ホテル 施設数	収容 人員	旅館 施設数	収容 人員	民宿 施設数	収容 人員	その他 施設数	収容 人員	合計 施設数	収容 人員
尾道市	9	1031	21	859	6	67	1		37	1957
向島(町のみ)	3	150	1	30	1	50	1		6	230
因島	3	221	10	193	6	177	2	98	21	689
生口島	1	20	3	220	6	138	3	138	13	516
岩城島	1	48*	2	46	2	60	1	10*	6	164
生名島					1	9*	1	30*	2	26
弓削島			1	10	1	20	2	152	4	182
大三島			7	290	11	248	1	150	19	688
伯方島			6	170	4	135			10	305
大島	1	36	3	115	10	365			14	516
今治	18	1574	13	536	1	70	2	225	34	2405
島嶼部	9	427	33	1074	42	1193	11	538	95	3232
合計	36	3032	67	2469	49	1330	14	763	166	7594

資料:

<http://www.pref.ehime.jp/event/shimanami/event/hotel/index.html> 6.11.2000

中国電力株式会社経済研究センター, 1999,p.14

JTB編, 2000

PLANET編, 1999

* 部屋数から計算したもの; ホテルの場合部屋数*2, 和風施設の場合部屋数*3

飲食店は各島に立地しているが、観光バスが駐車できる団体対応の店は瀬戸田町に集中していた。もともと他の島には、このような店が不足したため、開通前にしまなみ海道の中間点に当たる生口島・大三島ではドライブインの新增設が4件進められた。その経営者は海運業者、道後温泉のホテル業者、そして瀬戸田町の商工会と、さまざまな業種に渡っている（いよぎん地域経済研究センター, 1998）。土産物店が商店街をなすほど並んでいた瀬戸田町であるが、港から耕三寺にいたる商店街は、モータリゼーションに対応できず集客力を失い、駐車場の近くに新しい店が立つようになった。海道開通に際して、各イベント会場やサービスエリアに土産物店が併設された。

このように観光施設の多様化は、しまなみ海道の開通に当たって、さらにその動きが加速したが、同時にサービス面での対応遅れは今後の課題として残されたままになっている。

橋の開通を前に、広島県と愛媛県の20市町村はしまなみ海道周辺地域振興協議会を1994年に設立し、広域課題に対する連絡調整、地域の活性化につながる調査や施策の推進、そして広域共同プロジェクトの推進にのりだした。愛媛側の場合は島嶼部だけではなく、今治市周辺の4町1村を含めている。観光に関連する活動の主な内容は、ガイドブックの作成、バスルートやサイクリングシステムの調査、シンポジウムや研究会の開催、しまなみ開通記念イベントの開催などで、イベント以外では特に県境を超えた自転車の乗り捨てシステムを作ったことが特筆される。

(2) 観光客の特徴

観光動態を把握する際のデータの信頼性に関する問題については先に述べた。広島県の3島の観光客数に関していえば、瀬戸田町では長いこと有料施設である耕三寺のデータのみが正確な数値として計上されるにとどまっていたし、向島と因島のデータは1990年代まで海水浴場や国立公園域の山を訪れた観光客数を推定したものにすぎなかった。ただし、近年は有料施設が増え、各施設の入場者数が以前より正確につかめるようになった。そのため、しまなみ海道が開通した影響を調べるには役に立つ。愛媛県の観光統計では、大山祇神社宝物館の入場者数がしまなみ海道沿いの観光客の実態をつかむ上では比較的正確な値である。これらの数値をとりあげ、観光客入込数の推移をみる(図4-3, 4-4)。この図では観光客入込数の推移に2つのパターンがあることがわかる。一つは景気変動を反映した大きな波で、もう一つは各橋の開通に応じた増減である。

入場料をとる施設がそれぞれ定めている「団体」の最低人数と、各県が統計上で定めている団体客の定義は必ずしも一致しないので、団体客と個人客の割合については正確さに問題があり、データはあくまでも目安を示すものにすぎない。宿泊客の割合も同様である。その点に留意しつつも、あえて概観すれば、瀬戸田町では団体客の割合が64.8%、宿泊客の割合が5.8%、向島町ではそれぞれ18.7%と4.1%になっている(1997年、「平成9年広島県入込観光客の動向」)。団体客の割合は観光施設により異なるが、観光客のほとんどが日帰り、または通過型であるといえる。その点に先に触れた宿泊施設の収容能力が不足することや、多様化が進んでいないことなどが関連すると思われる。

しまなみ海道開通後、観光客数が予想通り急増し、集客力の高い6施設(耕三寺、平山郁夫美術館、シトラスパーク、因島フラワーセンター、因島水軍城、向島洋ランセンター)で1999年5月から10月までに観光客入込数が、前年に比べて平均で5.5倍増になった(図4-5)。この期間中に6施設を訪れた240万7千人のうち、82.9%が瀬戸田町の3施設の入場者であり、その半分以上が耕三寺を訪れている(ひろぎん経済研究所, 1999)。1999年の年間観光客数は、大山祇神社が5.2倍にはね上がったの

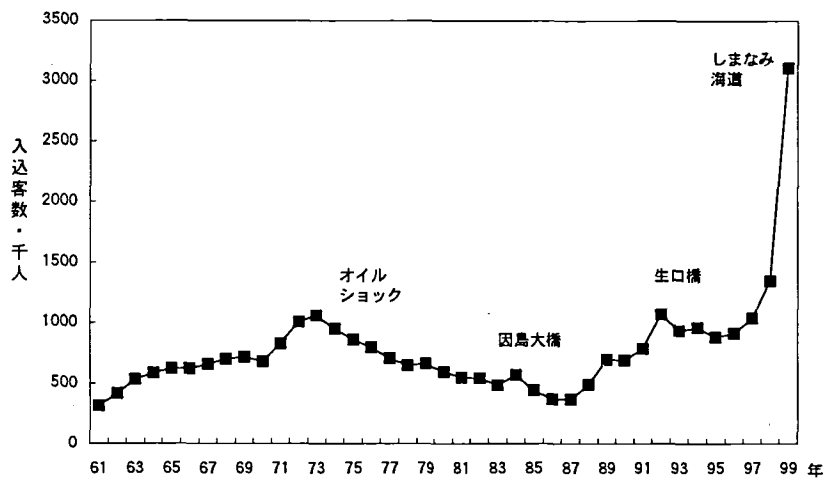


図4-3 入込客数：瀬戸田町

資料：広島県入込観光客の動態

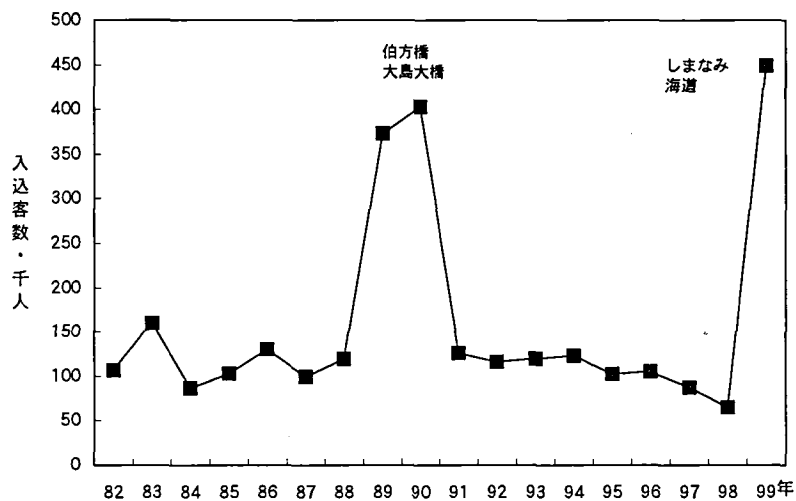


図4-4 入込客数：大山祇神社

資料：愛媛県観光客数とその消費額

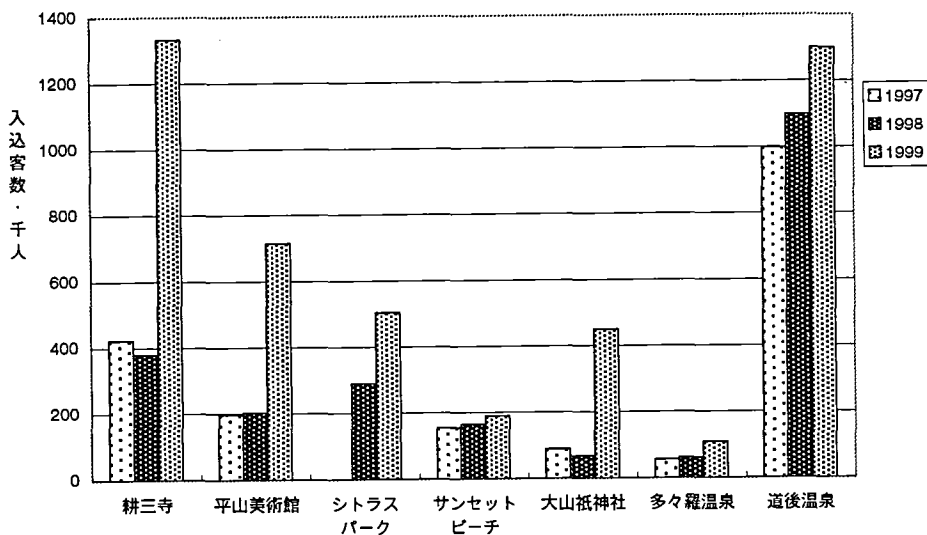


図4-5 しまなみ海道重要施設の観光客入込数 (1997-99)

資料：愛媛県観光客数とその消費効果；瀬戸田町の資料

をはじめ、平山郁夫美術館の3.5倍、耕三寺の3.5倍と続く。この3施設に比べて知名度の低いシトラスパークは1.7倍増、多々羅温泉は2倍、そして橋で結ばれなかった弓削島の弓削ロッジは1.1倍にとどまった。つまり、しまなみ海道が開通し各島が線上に結ばれても、観光客は特定の点に集中する傾向は続いている。

開通後の観光客動向についてさまざまな調査が行われている。そのうちで重要な結果のいくつかをここで紹介しておく。取り上げたのは、以下の4つの調査結果である。一つは、ひろぎん経済研究所によるもの（ひろぎん経済研究所、1999）で、1999年8月に複数の観光施設でアンケート調査を行い、1,281件の回答を得た。第2に、中国電力株式会社経済研究センターによる調査は1999年7月から9月まで行われた調査（中国電力株式会社経済研究センター、1999）で、高速道路沿いの駐車場を含む各種の観光施設で121件を回収した。第3は藤目（2000）によるもので、1999年8月に実施した調査で、実施場所は不明だが550件の回答をまとめた。最後に著者が自ら1999年11月に生口島のシトラスパークと平山郁夫美術館でアンケート調査を行なった結果である（回答数は214）。

これらの調査の特徴をまとめると、まず団体客の割合が高いことが目立つ。その割合を居住地別にみると、近畿・中部・関東からの観光客の場合、団体客の割合がさらに高くなった。遠方からの観光客は団体でかつ宿泊旅行である場合が多く、逆に周辺地域からの観光客は個人で日帰り旅行を楽しむ。夏は宿泊する旅行者が多く、調査によっては宿泊観光客の約半数が2泊以上していると結果もみられる（ひろぎん経済研究所、1999）。宿泊地のトップは1万人/日程度の収容能力を有する道後温泉で、それについて広島市、尾道市があがっている。島嶼部での宿泊は、どの調査でも10%をわずかに超える程度にとどまる。秋に実施した調査では周辺地域からの旅行者の割合が増加し、そのため団体客の割合及び宿泊客の割合が減少する。

旅行のルートは、当然ながら居住地と宿泊地に関連するが、中四国からの日帰り客はそれぞれの出発点へUターンするのに対し、一方通行でしまなみ海道を抜けた観光客は、瀬戸大橋や明石大橋などを利用するコースを選んでいる（ひろぎん経済研究所、1999、中国電力株式会社経済研究センター、1999）。個人客の中には、アンケート回答時点では、まだコースを決めていないと答えた人もいた。

この地域の観光資源の中では、景観が重要な役割を果たしてきたが、それに加えて近年さまざまな施設が整備され、多様な観光活動が可能になってきた。しまなみ海道が開通し、訪れた観光客はそれらの資源をどのように評価しているのだろうか。それぞれのアンケート調査の結果をみれば、これまでの景観に橋が加わったことでより魅力が高まったとされ、景観は相変わらず瀬戸内海観光の重要な要素になっていることが分かる。ひろぎん経済研究所の調査において、旅行目的として「海や島々な

どの景観を楽しむ」と答えた観光客は57.7%で最も割合の高い項目となった。近畿または関東から来た観光客の中では、その割合がさらに高く、60%を超えている（ひろぎん経済研究所, 1999）。他の調査では、しまなみ海道の評価を尋ねたところ、景観について「非常によい」と答えた人は3分の2にも上ったが、観光施設・宿泊施設・イベント・従業員の接客態度の各項目について「非常によい」という評価をした人はいずれも1割前後にとどまった。加えて、景観に対する評価はしまなみ海道全体に対する評価を規定しているとの指摘もある（藤目, 2000）。著者が1999年秋に行った調査でも、各施設、みやげ、食事などの評価を含む9項目について来訪前に抱いていた期待の程度と実際に来て得られた満足度を尋ねているが、島の自然景観並びに橋の景観は、期待度も満足度もともに最も評価が高かった。しかも、満足度は来る前に抱いていた期待度を上回っていた。橋が瀬戸内海の景観に新しい偉大さを加えると同時に、それを眺める絶好のポイントにもなっている。橋を歩く人のために橋のもとに新しく駐車場を設置したところもあるほど、橋の上からの眺めは魅力的であり、登る苦労を忘れさせる。

観光施設の多様化は進んでいるが、特に遠距離から訪ねてくる観光客は従来どおり瀬戸内海の景観的魅力を求め、どちらかといえば周辺から来る観光客のほうが、観光資源が複合的に結びつきつつあるしまなみ観光地域を楽しんでいる。

第3節 住民の意識

次に瀬戸田町の住民を対象として2000年4月に行ったアンケート調査の結果を報告する。住民登録している瀬戸田町民のうち528名を層化多段階無作為抽出法により抽出した。瀬戸田町の観光施設は町の中心地でもある島の北西部に集中しているため、島内の居住地により観光に対する意識が異なると考えられる。町全域の調査を行うためにまず町を元の小学校区域（6区域）に分けた。それについて年齢層を配慮してサンプルを抽出した。先に述べたように、瀬戸田町の年齢構成はかなり偏っており、すべての年齢層からの回答を得るため、各区ごとそれぞれ5つの年齢層を設定し、各層から同人数をランダムに抽出した。ただし、高根島の人口は他の区域のほぼ半分なので、抽出人数も他区域の半数とした。

得られた回答は281通で、53.2%の回収率であった。そのうち50・60代からの回答が全体の42.6%を占め、結局人口の年齢構成を反映する結果になった（表4-3）。なお年齢層を3つにまとめると、30代以下が26.0%、40・50代の中年層が37.7%、60代以上の高年齢層が31.7%を占める。性別は女性55.1%、男性39.2%となり、宮島のサンプルと比べて女性の回答者が多かった。それは個人をラン

ダムに抽出し、世帯宛ではなく、その個人宛にアンケートを送ったことによると考えられる。

表4-3 サンプルの年齢層構成と瀬戸田町全体の年齢構成（15歳以上、%、1995）

年齢層	サンプル	瀬戸田町
30代以下	26	25.7
40・50代	37.7	38
60代以上	31.7	36.3
不明	4.6	0

居住地別にみると観光の中心になっている瀬戸田地区からの回答が全体の20.6%で最も多く、サンセット・ビーチのある西地区は12.8%で少ない。高根地区は、他の地区の半数しか配布しなかったが、回答は全体の11.0%を占め、他の地区に比べて回収率が高くなった。

回答者の約半数（49.1%）が島内で就業している。仕事の内容は、農業が18.5%で最も多く、それに造船業（8.9%）、観光業（7.1%）と続く。その他、専業主婦が11.7%、年金生活者は16.7%を占め、仕事を二つあげた人は22名で、7.2%となる。観光業との関わりとしては、パートやアルバイトを含めて家族のだれかが観光業に従事している割合は11.7%（本人が関わる場合を除く）である¹³⁾。これを上記の本人が観光業に従事する割合7.1%と合わせた18.8%が自分自身あるいは家族のだれかが仕事として観光業に関っていることになる。その割合は瀬戸田地区（29.3%）と南地区（35.4%）で特に高く、逆に若荷地区では9.3%と相対的にみて低い割合であった。しかし、瀬戸田地区は本人が観光業に従事している割合と、家族が観光業に関っている人の割合の両方が高い。南地区の場合は本人より家族の中に観光業に従事しているメンバーがいる割合が高くなっているにすぎないことを考えると、観光産業における瀬戸田地区の中心的な位置は明らかである。

観光客と関わる程度により、観光に対する見方が異なる可能性があるので、それに関する問を含めた。まったく関わりがないと答えた人は32.7%と高く、これと「道を聞かれるなど、生活で関わるごとがときどきある」程度の人の割合（40.6%）を加えると、回答者の73.3%が観光客との関わりがあまりないといえる。「仕事上毎日のように関わっている」割合は、瀬戸田地区で10.4%と高く、逆に高根地区では、道を聞かれることもなく「まったく関わりがない」と答えた人が全町平均の2倍（61.3%）となった。高根島に渡ってしまうと観光客との関わりは薄いことが分かる。

自分自身の旅行経験について問うたところ、日帰り旅行に年数回出かける人は34.9%、年1・2回程度の人は35.9%となり、あわせて約7割の回答者が、年に一回以上は日帰り旅行に出かけている。宿泊旅行になると、年1・2回という回答が42.7%で最も多く、逆に数年に一度しか宿泊旅行に出

ない人は35.2%にもものぼる。

また、回答者のほぼ7割以上(74.4%)が20年以上瀬戸田町に住んでおり、10年以上の割合を加えると9割近くの人が長年この町に暮らし続けている。

以上からわかる回答者の特性として、仕事上のつながりから観光に関心を持つ人はあまり多くなく、自分自身の旅行活動もそれほど活発とはいえないといえる。ただし、瀬戸田町での居住歴は長いので、島の発展を長い間見てきたことは間違いない。

問1 瀬戸田町をどのようなレベルの観光地だと思いますか (図4-6)

瀬戸田町を国内における重要な観光地として評価した割合は6.1%とかなり低く、中四国地方の重要な観光地(33.1%)とするか、しまなみ海道地域における重要な観光地(60.5%)とする評価がほとんどである。住民は瀬戸田町をローカルなレベルの観光地として評価している。ただし、しまなみ海道の名前をあげる人が6割に達しているということは、新しい観光ルートへの期待の大きさと、しまなみ海道地域における瀬戸田町の存在の大きさを住民自らが認識していることがうかがわれる。

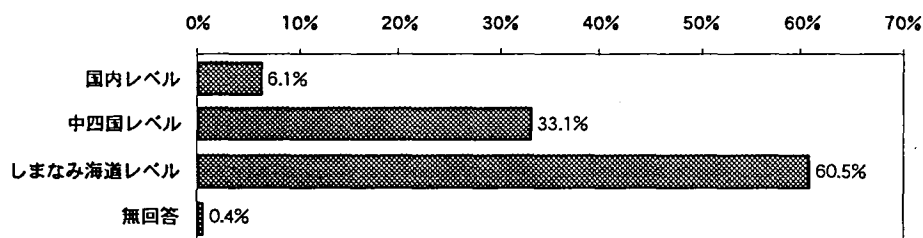


図4-6 瀬戸田町はどのレベルの観光地か

問2 生口島の特徴 (図4-7)

回答者が観光産業、あるいは観光客との直接的な関わりが少ないということ、先に述べたが、生口島は観光の島であると特徴づける割合は55.5%で、農業の島(38.1%)、あるいは造船業の島(4.6%)とする割合を大きく上回る。生口島を観光の島ととらえる傾向は特に20代、50・60代で強く、年齢層と有意な関係がある。

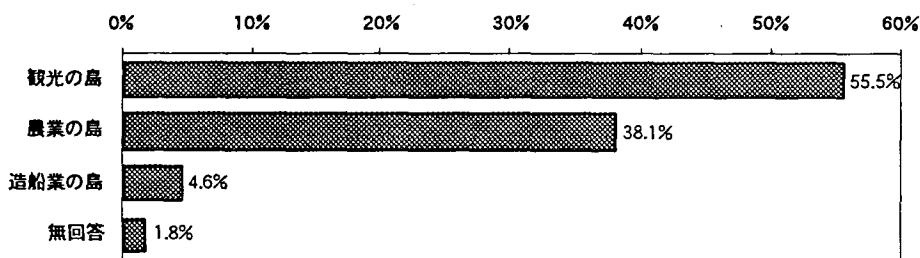


図4-7 生口島はどんな島

問3 瀬戸田町の観光資源 (図4-8)

この問では、14項目の中から複数回答（3つまで）で重要な観光資源を選択してもらったが、その結果には明確な特徴が現れた。重要な観光資源として耕三寺や平山郁夫美術館などの文化資源が最も高く評価され、回答者のほぼ3分の2がこれを選んでいる。次いで、瀬戸内海の景観と海辺がそれぞれ3割の人にあげられた。その他、農業も22.6%を占めるが、それ以外の項目はすべて16%以下で評価が低い。特に観光産業と直結するイベント、土産物、食べ物を重要な観光資源とする割合は、どれも7%以下で、町並みをあげた人の割合も5.3%にとどまった。

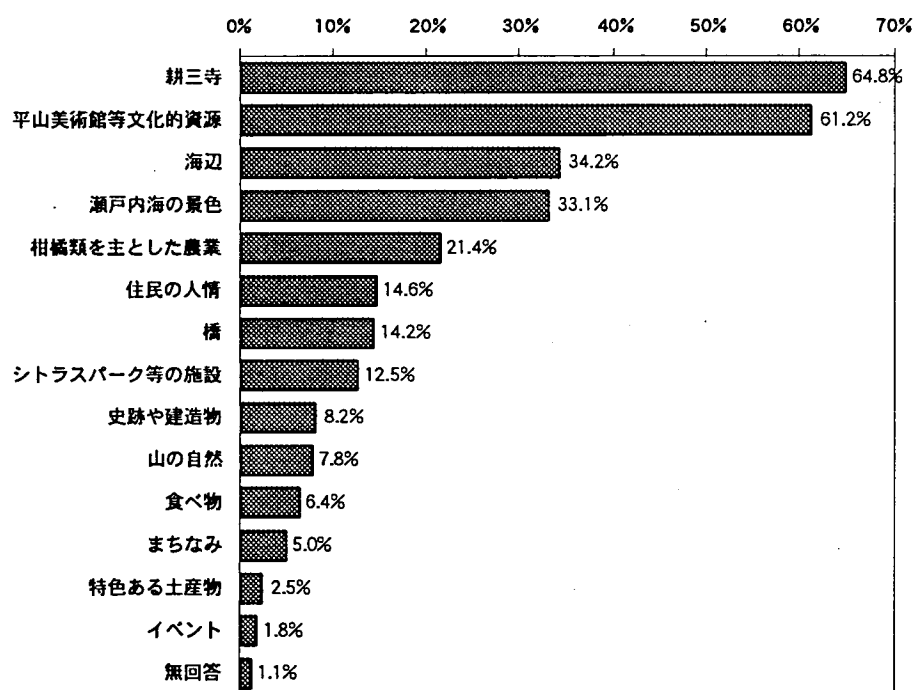


図4-8 観光資源 (複数回答)

年齢層別に見ると、高年齢者が平山郁夫美術館などの文化的資源を74.2%という高い割合で評価していることが目立つ。性別にみると、男性のほうが女性と比べて海を高く評価している（44.5%）。この回答は海水浴の経験とその頻度についての質問（問25）と関連していると考えられ、女性は昔は海で泳いでいたが現在は泳いでいないのに対して、男性は今でも夏に数回泳いでいる人が多い。この例からもうかがわれるように男性と女性とでは海との関わりが異なるようである。なお、この問の詳細な数値については後で触れる。

この結果を前述の瀬戸田町を訪れた観光客に対するアンケートの結果と比べてみると、観光客が観光地としての瀬戸田町に抱く期待と、住民が重要と判断している観光資源との間にずれがあることが

わかる(表4-4)。8項目のうち、来訪者が最も期待し、実際に訪れてみた時に十分な満足感が得られたのは島や橋の景観であった。住民が高く評価しているのは文化資源であり、中でも平山郁夫美術館はその中心的な存在であるが、これに対する観光客の期待度はシトラスパークよりも低く、4位にとどまった。ただし、実際に訪れてみると期待以上の満足が得られ、満足度ではシトラスパークを上回る評価が与えられ、住民の判断に近づいたといえる。食事や土産品に対する期待や満足度は、観光客の場合も住民同様に高くない。

表4-4 観光客の期待と満足

	期待	満足	満足-期待	
島の自然景観	4.31	4.48	0.17	5 大変期待・満足した
橋の景観	4.31	4.47	0.17	4 まあまあ期待・満足した
シトラスパーク	3.92	4.01	0.10	3 どちらとも言えない
平山美術館	3.89	4.21	0.32	2 あまり期待・満足しなかった
道路整備	3.69	3.71	0.01	1 全然期待・満足しなかった
食事	3.47	3.48	0.01	
耕三時	3.42	3.58	0.16	
みやげ	3.35	3.55	0.20	

絶対数：214

資料：著者による調査

つまり、観光客は、観光資源としてしまなみ海道全体を意識し、その景観の美しさや橋からの眺めのよさを期待して当地を訪れ、実際にそれに満足するのに対し、住民は瀬戸田町の特徴な文化資源の方を高く評価しているといえる。

海辺が高く評価される背景には、この地域ではじめて施設の充実した海水浴場として整備されたサンセットビーチが全国的から視察団を引きつけるほどの評価を得たことがあげられる。自然資源の中で、山よりも海の方が重要な資源だと判断されていることは、宮島町でのアンケートで神社の背景であり、登山者にも人気のある弥山に代表される山の自然が高い評価を得たことと対照的である。

問4 瀬戸田町の観光のあり方について

①力を入れるべき分野(図4-9)

現状では自然を観光資源として低く評価したことと表裏の関係といえるが、今後力を入れるべき分野として「瀬戸田町の自然を活かした事業」を選んだ割合が最も高くなった(24.6%)。次いで「集客力のある観光施設の整備」が17.8%となったが、今まで施設整備を進めてきたため観光客入込客数が年々増加した経験から、今後も力を入れるべき分野だと判断されたのであろう。さらに「周辺の観

光地との連携」(15.0%), 「農業を活かした事業」, 「歴史と文化を活かした事業」(ともに10.7%)が続き, 瀬戸田町の経済的な特徴と新しくできたしまなみ海道への期待を表している。しかし, 資源として自然よりも評価が低かった土産物や料理については, 今後の観光の目玉とするために力を入れるべきだと答えた人は6.3%ととても少なく, 発展性のない分野と判断されているといえよう。

この問への主な回答をもとにして, 自然派, 施設派, 連携派, 農業派, 歴史文化派の5つの類型を設定することができる。これらを以下の各問においてクロス集計する際の分類として利用する。

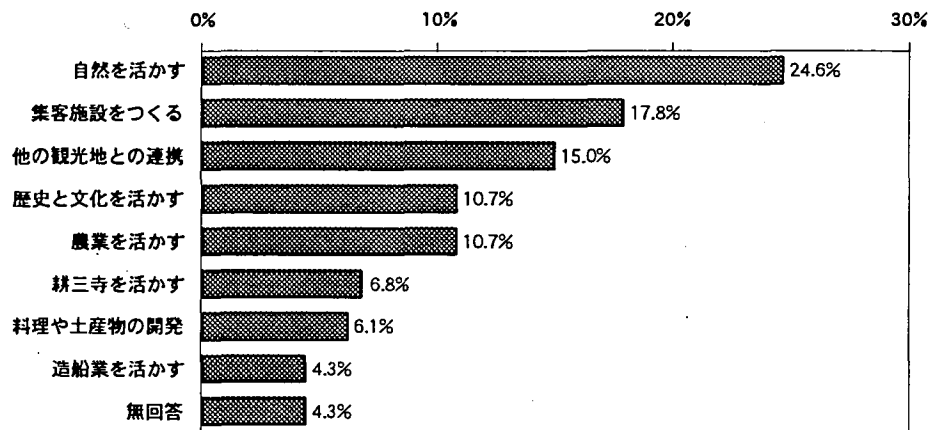


図4-9 力を入れるべき分野

② 意識すべき観光客 (図4-10)

従来の瀬戸田町の観光は耕三寺を訪れる団体客を中心に成り立っていたといえるが, 近年さまざまな施設が整備され, 個人客の増加がみられる(広島県入込観光客の動向)。この背景として, 今後も意識すべき観光客として個人客をターゲットにした方がよいと答えた人の割合は61.9%となった。団体客を意識すべきとした人は33.8%で個人客とした割合よりかなり低い, 宮島で尋ねた同様の問の結果と比べてはるかに高い。ただし, しまなみ海道の開通後に相次いで瀬戸田町にやってきた観光バスの姿を見たことがこの回答に影響したかもしれないし, 団体客に頼った観光から完全に脱却することに不安を感じる人が多いこともその一因と考えることもできる。

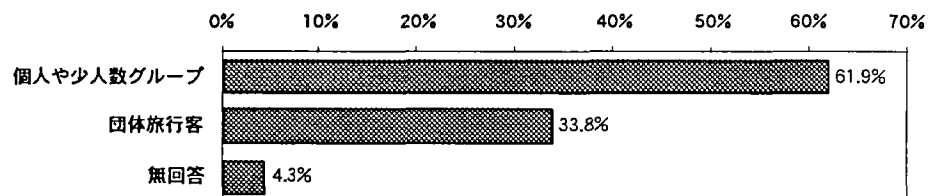


図4-10 意識すべき観光客

③ 観光業者のあり方 (図4-11)

今後の観光開発の担い手として、68.7%の人が島内の観光関連業者に期待し、27.4%が大手観光業者の参入を望んでいる。瀬戸田町は全国的にリゾートが話題になった頃には、町としてすでに観光開発を進めていたため、他の島ほどには外部資本の開発計画を受け入れていなかった。加えて瀬戸内海地域で多くの計画が頓挫した記憶が住民の中でまだ新しく、外部大手企業を開発の担い手としてあまり頼りにしていない一因になっているのかもしれない。

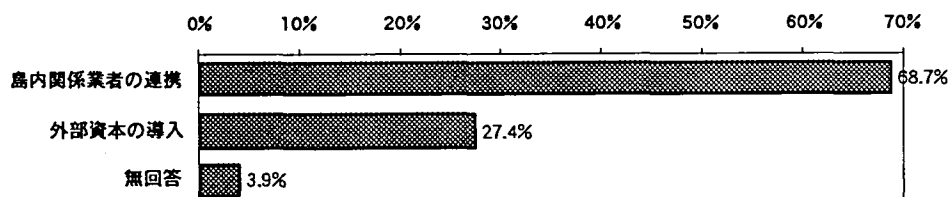


図4-11 今後の活性化のために

④ 町の観光行政について (図4-12)

⑤ 観光振興のための財政規模 (図4-13)

⑥ 財源の配分 (図4-14)

瀬戸田町が積極的に観光開発を進めてきたことを反映して、53.7%が「よくやっている」と町の行政を評価している。しかし、問題があると指摘している人も35.6%と多く、自由記述欄に具体的な問題点が数多く書き込まれた。例えば、多かった回答として、観光客への無料サービスが多すぎるとか、特定の分野に偏った支援が行われていることがよくないなどの批判があげられている¹⁴⁾。このような不満はあるものの、約半数(49.5%)が観光振興のための財政規模を「現状でちょうどいい」と答えている。今後の投資のあり方として、かぎられた財源を福祉や教育にかけべきだと思っている人が最も多い(43.1%)。観光以外の産業への投資を求める声はあまり高くない(22.8%)。

この回答は問4①で分類した類型によって異なる。「自然派」と「農業派」を合わせたクロス集計の結果、このグループでは「観光振興にお金をかけすぎている」という意見が38.8%で、全体の24.6%を大きく上回っている。逆に「施設派」は財源の配分について、観光に使うべきと思う人は40.0%で、他の産業の振興に回すべきと答えた人は8.0%となったが、全体のデータがそれぞれ23.8%、22.8%となっていることと比べて大きく異なっている。また、このグループは観光の活性化を島内の業者ではなく、大手観光業者の参入により図るべきだと答えた人が半数を越え(56.0%)、全体(27.4%)のほぼ倍になっている。つまり、今後の観光開発が大手民間企業の資本力と町行政による観光振興の双方から進められることを望んでいる。

これらの結果を宮島の状況と比較すると、瀬戸田町は公共事業として積極的に観光開発を進めてきたことは評価されているが、今後もさらに同じ方向に進めていくことには懐疑的な住民の態度がみられる。なお、宮島の場合は、町がこれまでも観光振興策を行ってきたにもかかわらず、それを充分と考えられておらず、町の基盤産業といえる観光業の振興に今後さらに力を入れるべきだという意見が多い。両町の住民の意識に対照的な違いがみられた。

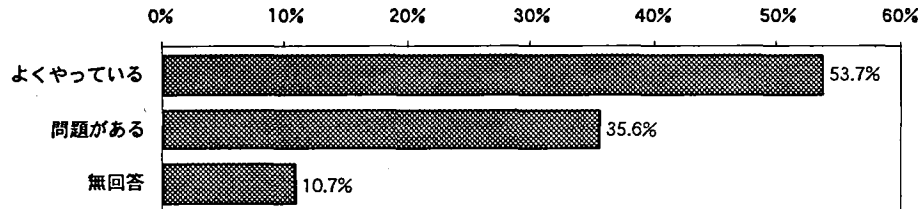


図4-12 町の観光行政について

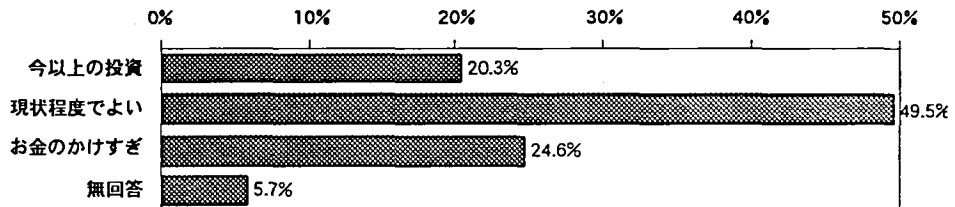


図4-13 観光振興のための財政規模

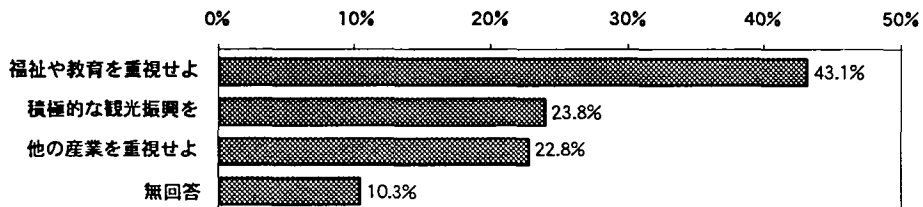


図4-14 財政の配分

問5 以下の資源が現在、観光面で十分に活かされていると思いますか

(図4-15,4-16,4-17,4-18,4-19,4-20)

各資源の活かし方については、5段階で評価を求めたが、ここでは「十分に活かされている」と「まあ活かされている」をあわせて「活かされている」とし、「あまり活かされていない」と「全然活かされていない」を「活かされていない」にまとめた。「活かされている」と判断された資源は、平山都夫美術館やシトラスパークなどの施設(80.1%)を筆頭に、耕三寺(71.9%)、海辺(66.2%)

と続き、逆に、山（66.2%）と町並み（62.3%）は「活かされていない」ように思われている。祭りやイベントについては、中間的な意見が多く、十分に活かされていると判断する割合も低ければ、全く活かされていないという評価も低くなり、どちらかというを活かされ方についてはっきりしていないような印象を受ける。

この質問は問4①でとりあげた、今後力を入れるべき分野との関連が予想されたが、クロス集計してみると意外と関連性がなく、有意な差はみとめられなかった。これは問4①と、問6の今後の各資源の活かし方についての回答をクロス集計した結果に有意な差がみられたことと対照的であった。今後の発展方向に関する意見の差は認められるが、現代の瀬戸田町の観光資源に対する評価は全体的にかなり一致しているといえる。

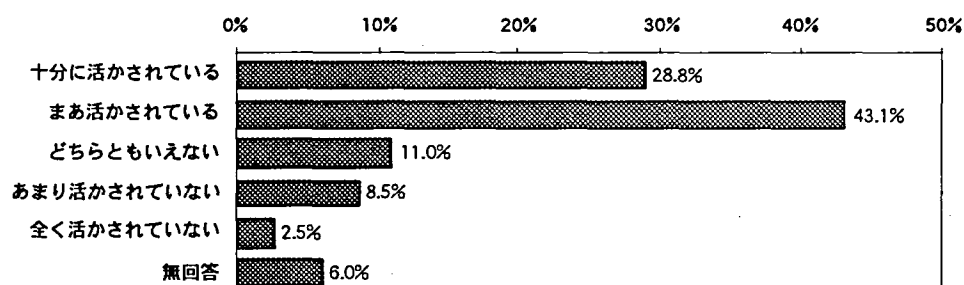


図4-15 耕三寺、その他の文化財

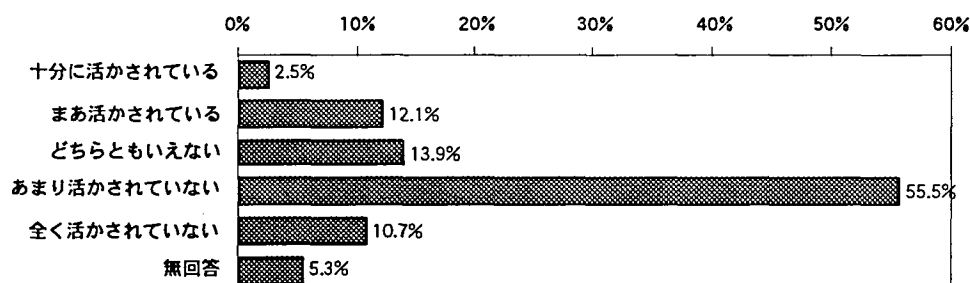


図4-16 山の自然や景色

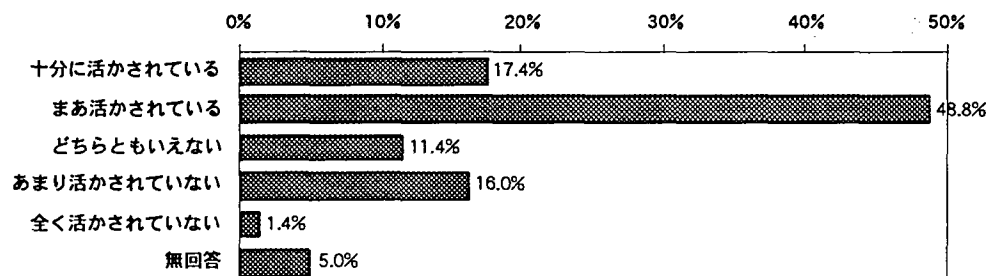


図4-17 海辺の自然や景色

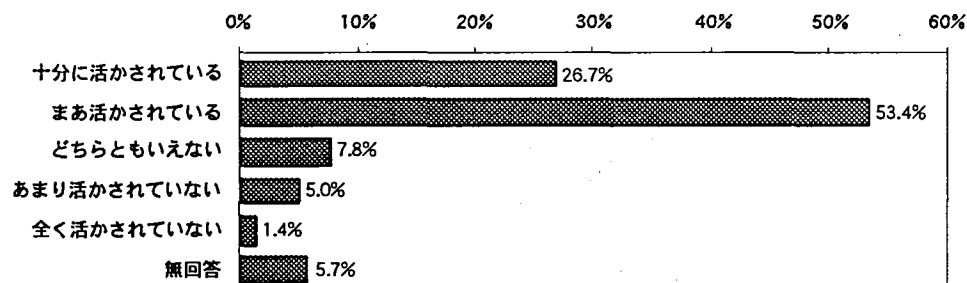


図4-18 シトラスパーク、平山美術館等の施設

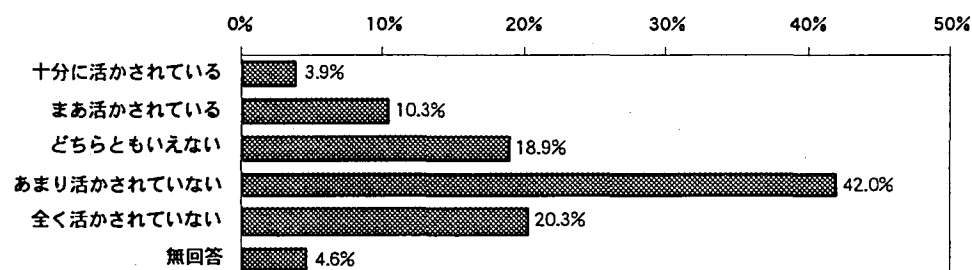


図4-19 土産物店が並ぶまちなみ

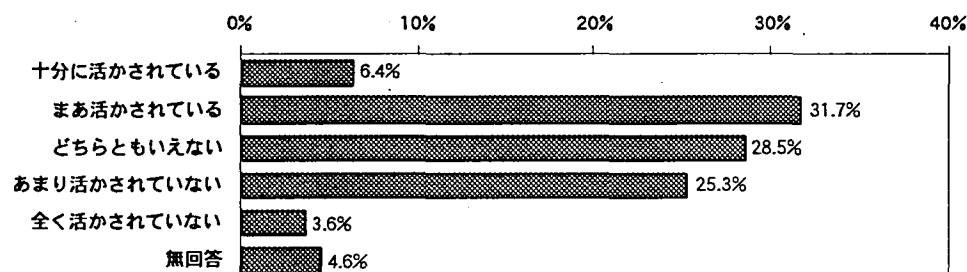


図4-20 各種の祭りやイベント

問6 各資源の今後の活かし方について (図4-21,4-22,4-23,4-24,4-25)

それぞれの資源を将来どのように活用すべきかを問う設問として、4つの選択肢を用意した。基本的にそのうちの2つは保存を重視するもので、残りの2つが開発を志向するものとした。その結果、開発、あるいは整備することが望ましいとされた資源は「町並み」(52.3%)と「山」(48.4%)、「耕三寺」(44.5%)であり、逆に「海辺」と「既存」の施設については今以上の開発は必要ないという意見が強くなった(それぞれ61.4%と77.2%)。

問6と先の問4①とをクロス集計すると、いくつか注目すべき点が明らかになる(表4-5,4-6,4-7)。

問4で今後、観光で力を入れるべき分野として「自然を活かした事業」と答えた「自然派」は、各資源の活かし方について、全体平均に近い割合で回答した。保全を重視する項目が平均を5%ほど上

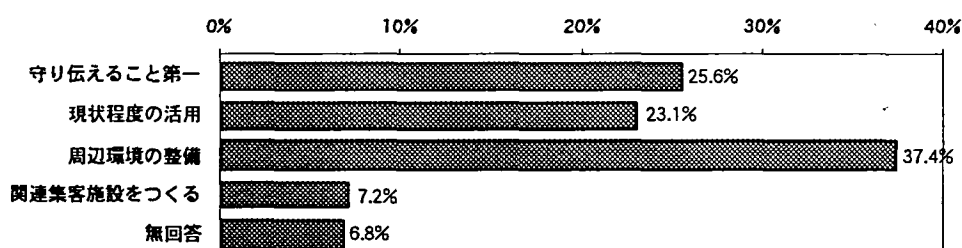


図4-21 耕三寺、その他の文化財

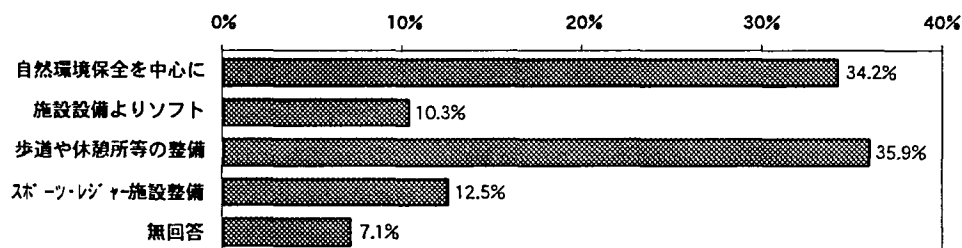


図4-22 観音山その他、山の自然や景色

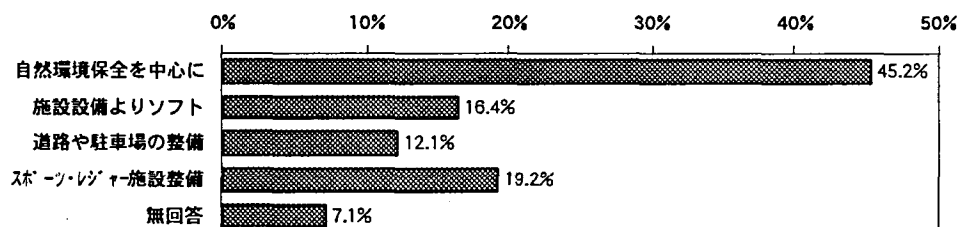


図4-23 サンセットビーチその他、海辺の自然や景色

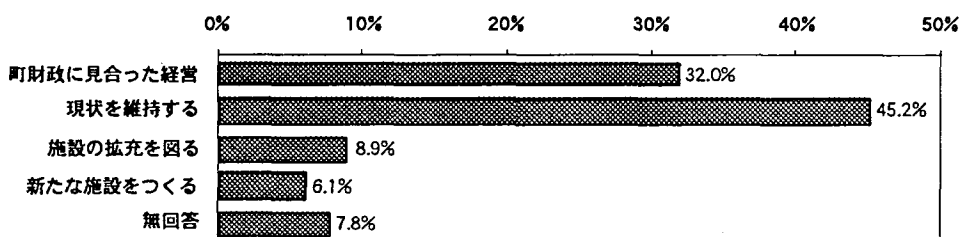


図4-24 シトラスパークや平山美術館等の施設

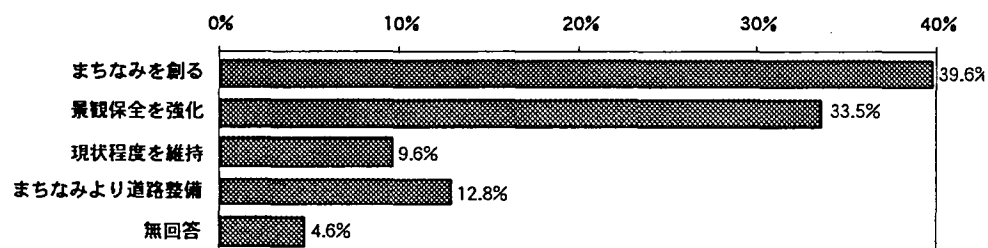


図4-25 土産物店が並ぶまちなみ

表4-5 力を入れるべき分野と山の自然や景色を地域づくりに活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答
全体	221	100.0	34.2	10.3	35.9	12.5	7.1
歴史文化派	30	100.0	26.7	6.7	50	6.7	10
自然派	69	100.0	37.7	15.9	34.8	8.7	2.9
施設派	50	100.0	24	2	44	26	4
連帯派	42	100.0	35.7	9.5	26.2	19.1	9.5
農業派	30	100.0	40	16.7	30	0	13.3

問6②観音山その他、
山の自然や景色
1：保全
2：観察
3：整備
4：施設

表4-6 力を入れるべき分野と海辺の自然や景色を地域づくりに活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答
全体	221	100.0	45.2	16.4	12.1	19.2	7.1
歴史文化派	30	100.0	36.7	20	13.3	20	10
自然派	69	100.0	53.6	23.2	5.8	14.5	2.9
施設派	50	100.0	36	8	14	38	4
連帯派	42	100.0	45.2	16.7	7.1	19.1	11.9
農業派	30	100.0	50	20	16.7	0	13.3

問6③サンセットビーチ等、
海辺の自然や景色
1：保全
2：観察
3：整備
4：施設

表4-7 力を入れるべき分野と観光施設を地域づくりに活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答
全体	221	100.0	32	45.2	8.9	7.8	6.1
歴史文化派	30	100.0	16.7	50	20	3.3	10
自然派	69	100.0	49.3	42	4.4	1.5	2.9
施設派	50	100.0	20	38	10	28	4
連帯派	42	100.0	26.2	47.6	9.5	7.1	9.5
農業派	30	100.0	43.3	46.7	0	3.3	6.7

問6④シトラスパーク、
平山美術館等の施設
1：無理のない経営
2：現状維持
3：施設の拡充
4：新しい施設

回り、施設整備を進める項目で同程度低くなっているが、いずれも有意な差ではなかった。全体的な傾向は「農業派」と似ているため、この2つの類型を一つにまとめてクロス集計を行った。その結果、既存の施設の活かし方について「規模を縮小しても、町財政に見合った経営を行う」と答えた割合が半数近くなり（47.5%）、全体平均（32.0%）を有意に上回った。この2つの類型は、今後の海の利用について、自然保全を中心に行うべき（52.5%）、あるいは自然観察会などソフト事業を主に行うべきとした割合（22.2%）が、それぞれ全体より10%前後高くなった。山の活用についても同様だが、全体との差は有意とならなかった。まとめると、両グループとも保全を指向する傾向が読みとれるが、この自然保護の志向は町の財政に関する心配や、柑橘類の産地になっている山に対する関心が背景になっている。

問4①で「集客力のある観光施設の整備」に力を入れるべきとする「施設派」が、この問においても各資源を活かしたスポーツ・レジャー施設などを新しくつくることを求めるのは当然であるが、その割合は、山、海辺、観光施設について特に高くなり、後者では平均を2割上回っている。

問4①で「周辺の観光地との連携」をあげた「連携派」の特徴は目立たないが、強いてあげれば、文化財の周辺環境を整備することを選んだ割合が平均を10%上回っている。「歴史と文化を活かした事業」を選んだ「歴史文化派」は、山や海辺の自然を保護することでは平均を下回るが、「景観保全の取り組みをつくって町並みを守る」と答えた人の割合が最も高く、50%を越える。ただし、「連携派」、「歴史派」のいずれも全体平均と比べて有意な差がでる項目はなかった。つまり、類型として最も特徴が明確に現れるのは、開発を指向する「施設派」と保存を重視する「自然・農業派」である。

性別、居住地別、仕事別には顕著な差はないが、年齢別には回答のばらつきがみられる(表4-8,4-9,4-10)。施設の活用について「無理のない経営」を求める割合が中年年齢層で高く(43.4%)、「現状維持」の割合は若い世代(52.1%)、「施設の充実」を図りたい者の割合は高年齢層で(15.7%)それぞれ高くなる。山については、中年層までが保全を重視し、高年齢層では遊歩道の整備を求めている。ただし、若い層では保全と並んでスポーツ・レジャー施設整備への要求も強い。海辺も同様である。海も山も自然観察ガイドなどソフトな方法で活かしたい割合は中年層で高くなる。つまり、若い層には、環境を意識する層と、スポーツ・レジャー施設に関心を持つ層があり、中年層では、財政面への配慮もあるのか、保存指向で、高年齢層はある程度整備された自然を望んでいるといえよう。

表4-8 年齢と山の自然や景色を地域づくりに活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答	
全体	281	100.0	34.2	10.3	35.9	12.5	7.1	問6②観音山その他、 山の自然や景色
30代以下	73	100.0	38.4	9.6	30.1	17.8	4.1	1: 保全
40/50代	106	100.0	39.6	14.2	37.8	5.7	2.8	2: 観察
60代以上	89	100.0	23.6	7.9	39.3	15.7	13.5	3: 整備
無回答	13	100.0	38.5	0	30.8	15.4	15.4	4: 施設

表4-9 年齢と海辺の自然や景色を地域づくりに活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答	
全体	281	100.0	45.2	16.4	12.1	19.3	7.1	問6③サンセットビーチ等、 海辺の自然や景色
30代以下	73	100.0	45.2	15.1	9.6	26	4.1	1: 保全
40/50代	106	100.0	52.8	19.8	9.4	16	1.9	2: 観察
60代以上	89	100.0	39.3	13.5	16.9	16.9	13.5	3: 整備
無回答	13	100.0	23.1	15.4	15.4	23.1	23.1	4: 施設

表4-10 年齢と観光施設を地域づくりに活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	無回答	
全体	281	100.0	32	45.2	8.9	7.9	6.1	問6④シトラスパーク、 平山美術館等の施設
30代以下	73	100.0	28.8	52.1	6.9	8.2	4.1	1: 無理のない経営
40/50代	106	100.0	43.4	45.3	4.8	5.7	0.9	2: 現状維持
60代以上	89	100.0	22.5	41.6	15.8	7.9	12.4	3: 施設の拡充
無回答	13	100.0	23.8	30.8	7.7	23.1	15.4	4: 新しい施設

次の問7から問10までは島での暮らしについての質問である。

問7 観光客数の望ましい推移方向 (図4-26)

観光客が「減ってもよい」と答えた人は、わずか7.5%にとどまる。現状程度でちょうどよいという意見が38.8%で最も多く、「もっと来てほしい」割合も24.9%となった。観光客による経済効果への期待があるといえるだろう。観光入込の季節変動が激しいことが観光産業の課題となっていることを理解し、客数が年間を通じて分散してほしいと考える人は25.6%となり、かなり多い。

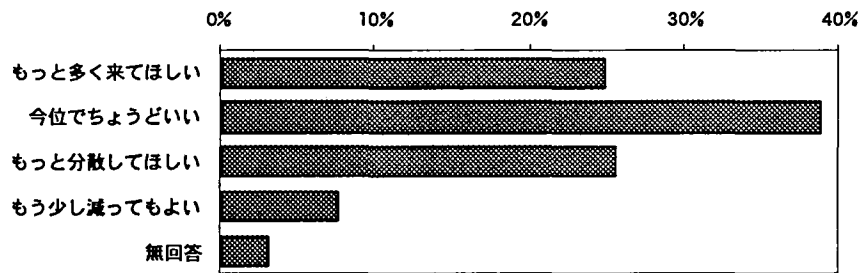


図4-26 瀬戸田町の観光客の数について

問8 観光地であることを迷惑に思うことがあるか (図4-27)

観光地である以上、住民はいろいろな迷惑を被ることがあり、観光開発を進める上で、住民のニーズと観光客へのサービスとの調和を図ることは重要な課題となる。ただし、瀬戸田町の場合、「たまに迷惑に思う」人が過半数 (59.8%) を占めるが、それほど深刻に受けとられておらず、「迷惑だと感じることはない」割合 (22.1%) を合わせた81.9%の人が、生活への悪影響をあまり感じていないといえるだろう。問22で尋ねた観光客と関わる頻度と重ねてみると、「仕事上、毎日のように関わっている」人は、「迷惑だと感じることはない」割合が有意な差とはならないものの、平均をかなり上回る (38.5%)。ただし、自分あるいは家族の誰かが仕事上観光業に関わっている人の場合は、全体平均との差はあまりみられない。

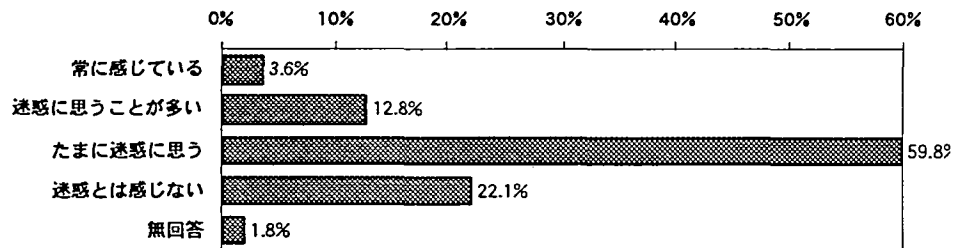


図4-27 観光地なために迷惑だと思ふことがあるか

観光客の存在を迷惑に感じるかどうかは、観光客数の今後の望ましい方向（問7）に影響する。「迷惑に思うことが多い」人は、これ以上客の増加を望まないのは当然といえるが、「もっと来てほしい」と答えた割合も8.3%でかなり低くなった。逆に、迷惑に感じていない人の場合は、「もっと来てほしい」を選んだ割合が全体を大きく上回っている（36.1%）。

観光客が集中するのは島の数か所に限られるため、日常的にあまり関わりもなければ、気になることもない住民が多いとの印象を受ける。しかし、数は少ないものの、観光産業と関連のない人の中に、観光客を迷惑的な存在として考える人がいる。

問9 迷惑と感じること（複数回答：3つまで）（図4-28）

「迷惑だと感じることはない」人でも、具体的に質問されると、いくつかの項目を選んでいる。全体としては9項目のうち、最も迷惑としているのは交通渋滞（81.9%）で、しまなみ海道開通後、瀬戸田町の南部では、高速道路が未完成なためかなりの渋滞が生じたことを反映している。次いで、「ゴミが散乱する」が46.6%、「治安上のトラブル」が30.3%、「観光が優先される」が27.5%、「夜間や休日、静かに休めない」が14.6%と続き、その他の3項目はすべて10%以下である。治安の問題は宿泊施設への聴き取り調査でもとりあげられており、自動車の中からものを盗れたなど、今まであまりなかった犯罪が増えたと感じられている。

渋滞が気になるかどうかは、迷惑の感じ方全体に影響する。「迷惑だと感じることはない」人は、交通渋滞を選んだ割合（64.5%）は全体平均より低くなり、迷惑を強く感じる人は、迷惑理由として渋滞を選ぶ割合（91.7%）がきわめて高い。ゴミ問題の場合も同様の傾向がみられるが、この場合の差は有意ではない。

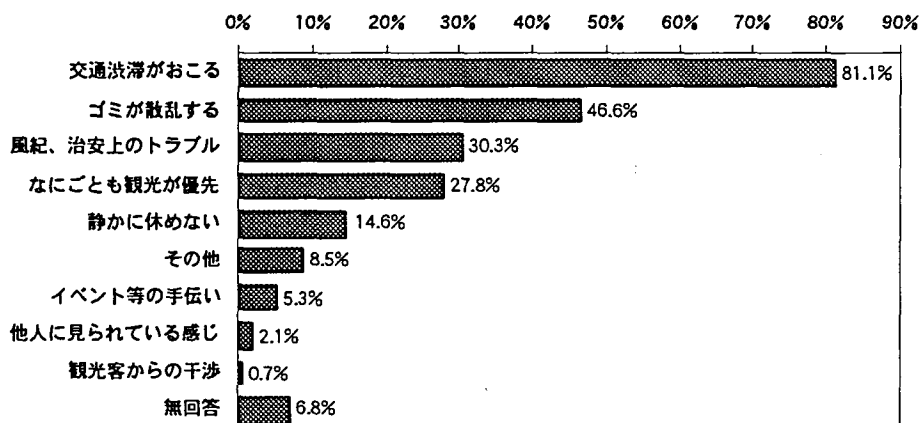


図4-28 迷惑だと感じるのはどういう時（複数回答）

問10 生活に役立つこと (複数回答: 3つまで) (図4-29)

観光客が多く訪れることは、仕事を始め、生活に役立つことが多くあると考えられる。アンケートの結果としては、最も高く評価されたのが、「町にぎわいがある」ことで(51.3%)、これに「ふるさとを自慢できる」こと(48.4%)と、「多くの人との出会いがある」(19.9%)を合わせて考えると、観光産業での仕事などから得られる個人的な利益よりも町の雰囲気への影響が重視されることが明らかになる。「人口の割には、各種の施設が充実」し(42.7%)、「散歩したり、趣味の活動をする環境に恵まれている」(28.1%)という、アメニティー面も生活上のプラスの効果として支持されている。「仕事につながっている」と答えた人は、26.3%にとどまる。ただし、仕事の内容や観光客と接する機会についての設問と重ねると、「観光業」に従事している人や家族の中に観光業に従事する者がいる人の場合には43.4%、「仕事上、毎日のように観光客と関わっている」人(問22)の場合には84.6%もの割合で観光地であることが仕事につながっていることを選んでいる。逆に農業従事者は、観光と仕事とが必ずしもつながっていないようで、「仕事とつながっている」を選ぶ割合(13.4%)は全体平均にどまっている。

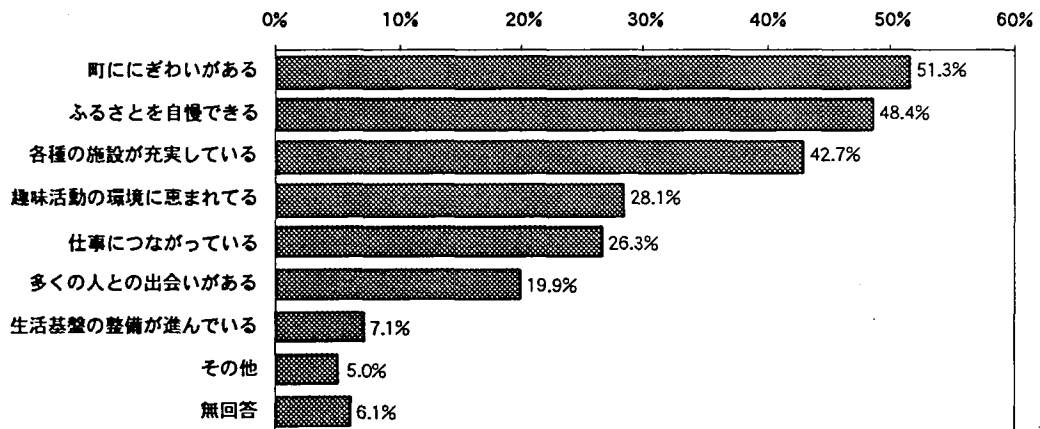


図4-29 観光地であるために役に立っていること (複数回答)

観光地であることが生活のどのような面で役立つのかは、年齢、性別、仕事、居住地など、さまざまな要素の影響を受けられると思われる。しかし、今回の調査では有意な差が認められるほどの強いものは少なく、年齢層による差のみで有意な差が生じた。「出会い」を大切に思う割合は中年層では低く(11.3%)、家族や仕事の生活関係で新たな出会いを必要としないほど人間関係が安定していると思われる。60代以上の方が「ふるさとを自慢できる」ことを高く評価し(62.9%)、高齢者が自分の町を大切に思っていることがうかがえる。観光が「仕事につながる」と答えた割合は、30代以下では38.4%となり、逆に高年齢層では全体平均の半分(13.5%)まで下がる。仕事の内容は先述のとおり、

観光業との関わり以外、あまり影響がないが、農業従事者の場合には「散歩したり、趣味の環境に恵まれている」ことを大切に思わないようである(9.6%)。居住地による影響は顕著ではなく、西地区(27.8%)と北地区(27.0%)の居住者が出会いの大切さを重視することが目立つくらいである。

次の問11から問14まではしまなみ海道の開通についての質問である。

問11 開通する前の期待と不満 (図4-30)

大鳴門橋をはじめ、しまなみ海道より早く開通した本四連絡橋の全てが一時的な観光ブームをまきおこしたが、同じことが規模は多少劣るものの、しまなみ海道の各橋の開通時にも生じた。この経験があるので、42.0%の回答者が「観光客が増えても、それは一時的なことにすぎないと思った」と答えたのは当然であろう。そして、「観光地としてこれから繁栄すると思った」(16.0%)という期待よりも、「瀬戸田町が通過点になる」という不安のほうがわずかに高かった(16.4%)。生活が便利になることを期待した人は12.5%、橋が開通してもあまり変わらないという回答は7.1%であった。

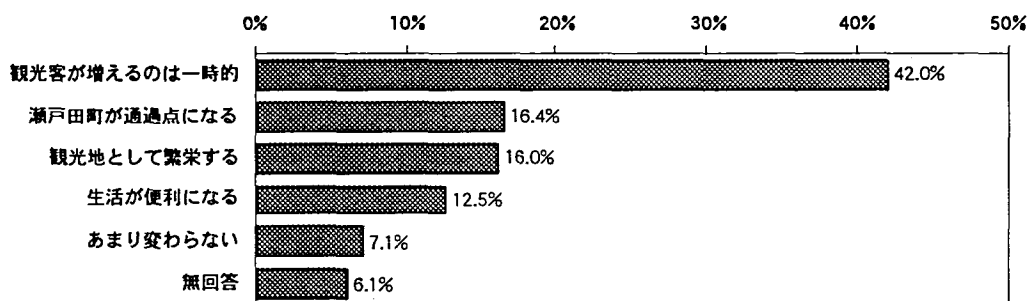


図4-30 開通前の期待と不安

このような期待と不安を問10の観光地であることが生活のどのような面で役立つと考えているのかと重ねてみると(表4-11)、「町がにぎわう」とした人の場合、「観光地としてこれから繁栄する」と期待した割合が高くなった(22.9%)。逆ににぎわいを重視しない人は、通過点になることに不安を強く感じる(19%)か、または橋が開通してもあまり変わらないと冷静な回答を寄せた割合が全体平均より高くなった(11.7%)。

表4-11 観光地であることが役立つ面と開通前の期待、不安のクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	5	無回答
全体	281	100.0	16	12.5	42	16.4	7.1	6.1
にぎわい	144	100.0	22.9	15.3	38.2	13.9	2.8	6.9
にぎわい以外	137	100.0	8.8	9.5	46	19	11.7	5.1

問11 開通前の期待、不安
 1: 観光地として繁栄
 2: 生活が便利
 3: 一時的な効果
 4: 通過点
 5: あまり変わらない

問12 開通して、よかった、効果があったと思えること（複合回答：3つまで）（図4-31）

効果があったものとして多くの回答が集まったのは「町の知名度があがった」（59.8%）、「観光客が増えた」（50.9%）、「町に活気がでた」（39.5%）、「他の島とのつながりができた」（34.2%）と続く。その他「生活範囲が広がった」（16.7%）と「住民が観光業に関心を持つようになった」（13.5%）も10%を越えたが、残りの項目はすべて10%以下であった。プラスの効果はなかったと答えた人は10.7%であった。

上位にあがった多くの項目は、経済的な効果よりも町の雰囲気やイメージ面での好影響を示すもので、問10とも共通する傾向である。問10で観光地であると「ふるさとを自慢できる」と評価した人は、開通により「町の知名度があがった」を選んだ割合が全体平均より高く（71.3%）、観光地なので「町にぎわいがある」と答えた人は、「町に活気がでた」ことを高く評価している（56.9%）。また、観光地であることが「仕事につながっている」とした人の25.7%は、「住民が観光業に関心を持つようになった」ことをあげている。

なお、性別、年齢、仕事などの要素はしまなみ開通の効果に対する意見に有意な差がでるほどには影響しなかった。

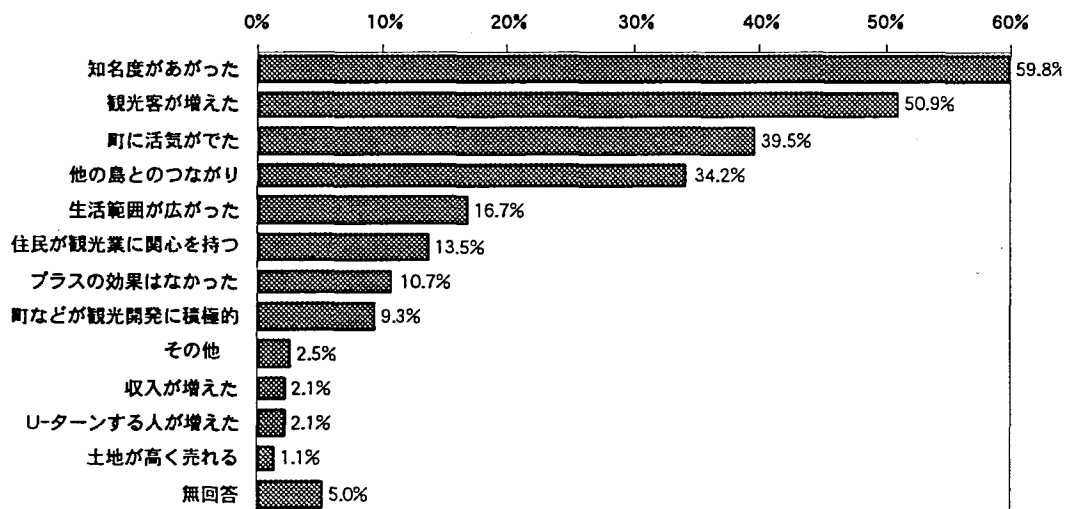


図4-31 開通してよかったこと（複数回答）

問13 開通による好ましくない影響（複合回答：3つまで）（図4-32）

この問への回答には、大きく2つの傾向が認められる。一つは交通量が増えたことにより生じたもので、「渋滞の増加」（70.8%）と「排気ガスや騒音の増加」（53.8%）が最も高い割合となった。両方を選択した人も38.4%となった。もう一方が「観光産業に関係のない住民には迷惑がかかる」

(35.9%) や「観光客用の施設の整備が町の負担になる」(23.5%) にみられるように、観光業と直接関係のない住民にとっては、しまなみ海道開通後に観光客数が増えたことが必ずしも望ましくないという意見である。他には「自動車を運転しない人の生活が不便になった」が22.8%、「通り過ぎるだけの人が増えた」が10.7%の割合を占める。

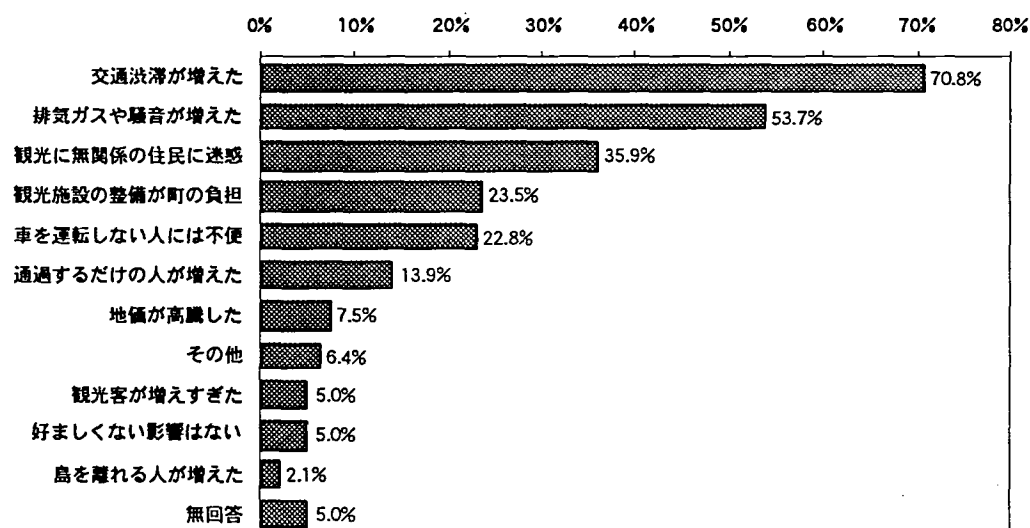


図4-32 開通の好ましくない影響 (複数回答)

開通後に生じた好ましくない影響としてあげられた項目は、問9の観光地であるために迷惑と感ずることとの共通性がみられる。問9で交通渋滞を問題としていした人は、しまなみ海道開通後の悪影響として「渋滞増加」を選んだ割合も高く(79.4%)、ゴミ問題を意識していた人は開通後に生じた環境問題として「廃棄ガスや騒音が増えた」ことに強い不満を感じている(61.8%)。そして、有意な差はなかったが、「観光が優先される」ことを迷惑に思う場合は、「観光産業に関係のない住民に迷惑がかかる」を選んだ割合が全体を10.0%も上回り、46.2%となった。

年齢層によって回答に差がみられる項目は「渋滞の増加」であり、仕事や日常生活で自動車に乗ることが多い中年層の方が交通渋滞を強く意識するようである(79.2%)。

他の質問との関連性は全体的に弱いですが、問4⑤で町の財政規模について「観光振興にお金をかけすぎている」という意見を示した回答者は、しまなみ海道開通による問題として「観光客用の施設の整備が町の負担になる」ことを強く意識し(37.7%)、全体平均を14.2%も上回っている。そして高根地区の居住者の場合は、「自動車を運転しない人の生活が不便になった」と答えた割合は32.1%と高い数字になった。

問9から問13までをまとめると、観光地であるために生じるプラスの効果とマイナスの効果はしまなみ海道開通の影響との間に共通性が強いといえる。プラス面では町のイメージアップや活気や賑わいが増すような、経済利益と直接結びつかないものが重視される。マイナス面では、交通渋滞、排気ガス、ゴミのような生活環境の悪化と、観光業と関わりのない住民への負担や迷惑や町財政の問題が意識される。問9・10の結果と、問11・12・13の結果との共通性をみると、しまなみ海道の開通によっても、観光地としての瀬戸田町の評価が住民の間であまり変わらなかったことがわかる。また、評価が年齢や性別、仕事などの要素にほとんど影響されないことも明らかになった。

問14 他の島とつながったことを地域づくりにどのような方法で活かすか (図4-33)

しまなみ海道により、生口島は他の島と陸路で結びついたが、このことをさまざまな方向で活かすことができる。回答がよせられた望ましい方向としては「福祉や生活に役立つ共同施設をつくる」ことをあげた割合が27.0%で最も高く、「広域的な行政の協力体制をつくる」ことを望む人は17.4%でこれに次いだ。「観光施設をしまなみ海道沿いに分布させ、広域観光地をつくる」のが14.6%、「観光地としての宣伝に活かす」のが13.9%、あわせて28.5%が広域的な連携を観光に活かすことを重視している。「造船業など、基盤産業の連携」が10.0%、「農業の連携」が6.9%で、他の産業分野での連携はあまり期待されていない。

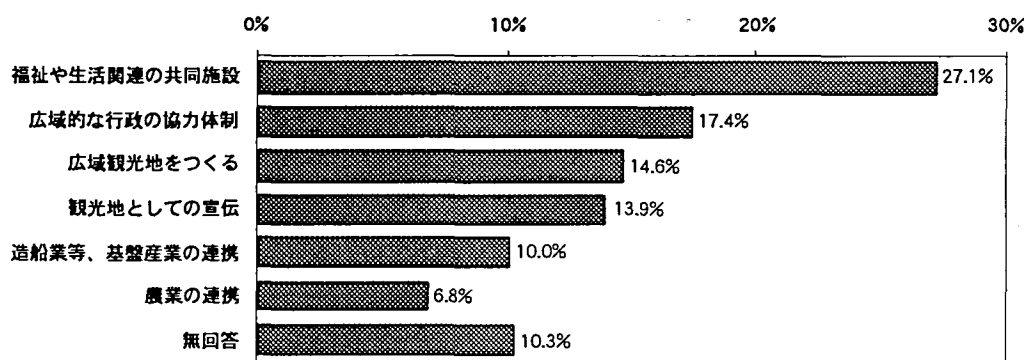


図4-33 他の島との連携を地域づくりに活かす方向

この問では、年金生活者は全体的傾向と異なる回答をした (表4-12)。「宣伝に活かす」は26.1%と高く、逆に「広域的な行政体制をつくる」を低く位置づけている。年齢層別にみても有意な差とはならなかったが、広域的な行政体制への関心は高年齢層が全体平均より6.2%低い。広域合併などの行政改革に対する警戒感があるのかもしれない。

表4-12 仕事の業種と他の島との連携を地域づくりに活かす方向とのクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	5	6	無回答
全体	281	100.0	13.9	14.6	10	6.8	27.5	17.4	10.3
年金生活	46	100.0	26.1	8.7	8.7	2.2	30.4	4.4	19.6
年金生活以外	235	100.0	11.5	15.8	10.2	7.7	26.4	20	8.5

問1 4 他の島との連携を地域づくりに活かす方向

- 1：観光地としての宣伝に活かす
- 2：広域観光地をつくる
- 3：造船業など、基盤産業の連携をはかる
- 4：農業の連携をはかる
- 5：福祉や生活に役立つ共同施設をつくる
- 6：広域的な行政の協力体制をつくる

問23 他所からの親戚・客を案内するとき、生口島も含めてしまなみ海道沿いのどこにつれていきますか。(図4-34)

この問に対する回答では、瀬戸田町内の施設が大部分を占めた。平山郁夫美術館(50.9%)は人気が高く、耕三寺(45.2%)を上回る。以下、シトラスパーク(27.4%)、サンセットビーチ(17.8%)と続く。島外では大三島が案内先として人気があり、大山祇神社とその宝物館の他、多田羅温泉と2つの美術館をあわせて16.7%となる。多田羅大橋、来島大橋、その他の橋に案内する人はあわせて11.4%となるが、その割合は問3で橋を重要な資源と評価した14.2%とほぼ同じである。観光客が評価するほどには、住民は橋の景観を主要観光資源とみていないことが、実際の行動に反映されている。

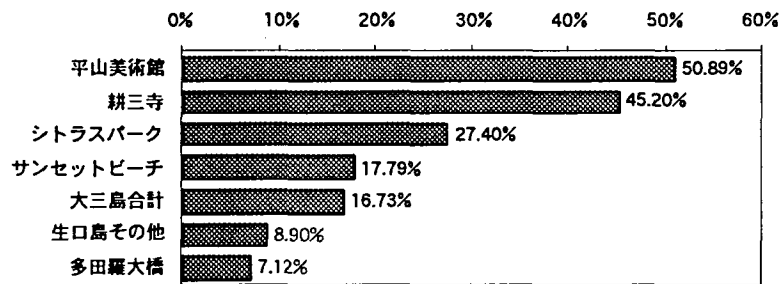


図4-34 親戚、客を案内する場所、施設

問24 ご自分が余暇のときに、生口島も含めてしまなみ海道ぞいの島々にでかけることがありますか。そのとき、たずねていく場所・施設をご記入下さい。

この問では、たずねた場所を「定期的」、「年に数回」、「年に1, 2回」、「数年に一回」、「一度訪ねたことがある」という頻度によって5項目に分け、それぞれ具体的に記入してもらった。「定期的に訪ねる場所・施設」の項目に場所名を記入した人は全体の21.0%にすぎず、各場所があげ

られた割合が少いうえに、余暇活動としてではなく、病院に通うことを回答に含めたケースもあり、この項目については分析から外した。「年に数回」から「数年に一度」までの3段階についてそれぞれ3割前後の回答者が具体的な場所をあげた。「一度訪ねたことがある」という項目では44.8%の人が何らかの場所を記入した。この項目が最も回答が多く、その割合の差が大きいことから、住民にとってもしまなみ海道は自らのレクリエーションの場とはなっておらず、外来の観光客と同様にあくまで観光地として意識されていることがうかがわれる。

「年に数回訪ねる場所・施設」(図4-35)として最も多くあげられた施設は平山郁夫美術館とサンセットビーチがそれぞれ4.3%¹⁵⁾で並び、次いで3.2%で耕三寺が続き、その他の生口島の場所や施設の合計(8.3%)を足せば島内にある各施設の合計は20.1%にのぼる。島外では因島が4.3%、大三島が3.6%、多田羅大橋が2.5%となり、それ以外の場所はほとんどあげられなかった。

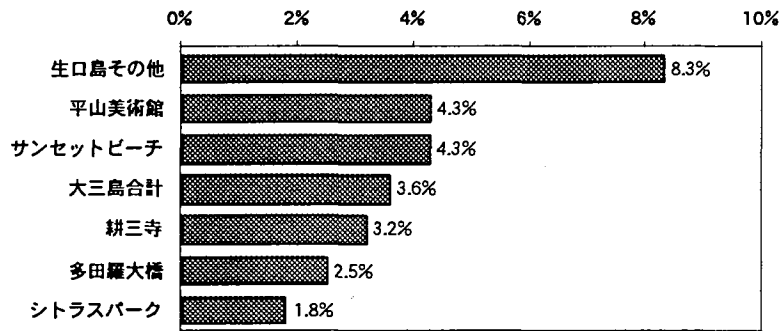


図4-35 年に数回訪ねる場所、施設

「年に1, 2回訪ねる場所・施設」(図4-36)では、行動範囲がさらに生口島(20.6%)と大三島(8.2%)に集中する。瀬戸田町内の順番は、平山郁夫美術館(7.8%)、サンセットビーチ(5.0%)、シトラスパーク(3.6%)となる。このパターンは「数年に一度」(図4-37)であげられた場所の場合にもあまり変わらないが、因島のフラワーセンター(4.6%)が加わり、生口島の割合(12.5%)が多少下がる。

「一度行ったことがある場所・施設」(図4-38)についての回答では、大島がバラ園を中心に合計で8.5%、松山・今治が5.0%を占め、はじめて大三島以外の愛媛側の場所が登場する。生口島内ではシトラスパークが5.3%で最も高く、新しい施設なので、一度は見るべき観光施設と考えられている。

以上、瀬戸田町住民の余暇的な訪問先は生口島内の観光施設に集中し、中でも平山郁夫美術館が親しまれていることがわかる。島外の重要な場所は、隣の大三島で、尾道など本州側はあまり選ばれていない。ただし、アンケートの主旨が観光で、しかもしまなみ海道に集中していたため、この間で

「余暇時」を聞いても、買い物や外食のような活動は意識されず、観光について回答されたことが十分に考えられる。

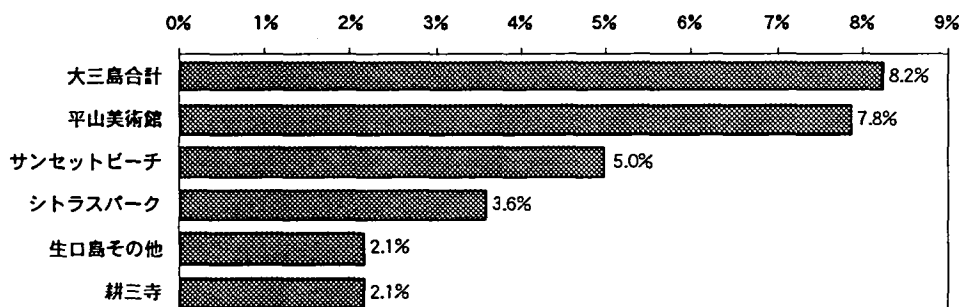


図4-36 年に1、2回訪ねる場所、施設

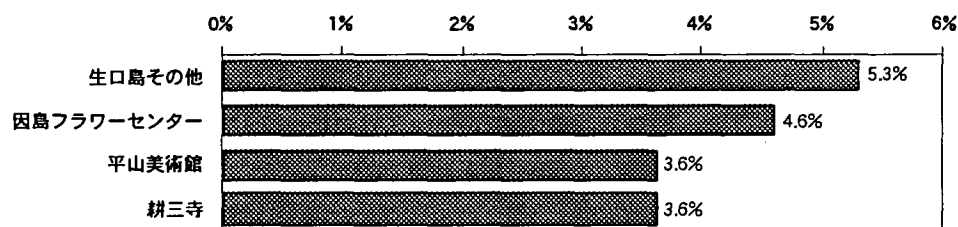


図4-37 数年に1度程度訪ねる場所、施設

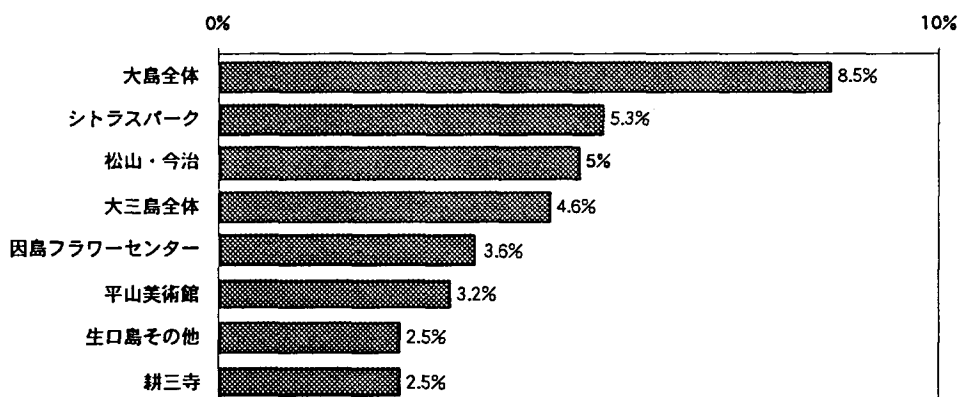


図4-38 一度訪ねたことがある場所、施設

問25 瀬戸内海で泳ぐことがありますか。(図4-39)

住民の判断の中で、海は瀬戸田町の重要な観光資源であることが問3で明らかになった。その海との関わりを計るため、この問を加えたが、回答者の年齢が関係し、「昔は泳いだことがあるが、今は泳がない」という答えが60.5%で最も多い。しかし、現在も夏に一回か数回泳ぐ人も24.9%いる。この回答には性別が影響し、現在でも泳ぐ割合は男性(40%)が女性(20.7%)をほぼ倍で上回る(表

4-13)。このような傾向は全国のマリンレジャー活動にも見られ、男性のほうが海洋レクリエーションへの関心が高い（総務庁統計局，1996）。

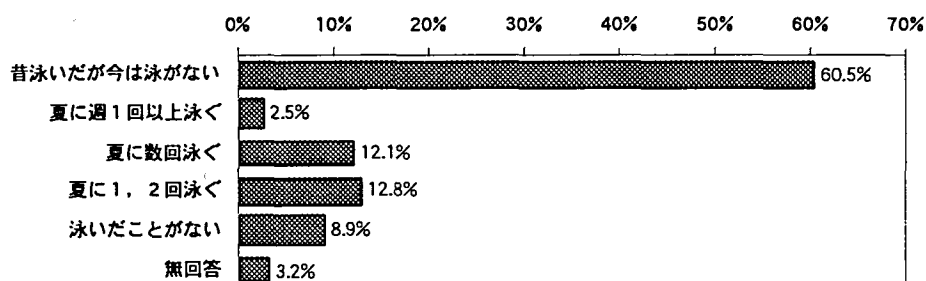


図4-39 瀬戸内海で泳ぐことがあるか

表4-13 瀬戸内海で泳ぐことがあるかと性別のクロス表

	回答数	全体	1	2	3	4	5	無回答
全体	281	100.0	60.5	2.5	12.1	12.9	8.9	3.2
男性	110	100.0	51.8	2.7	17.3	20	7.3	0.9
女性	155	100.0	67.1	2.6	9	7.7	9.7	3.9
不明	16	100.0	56.3	0	6.3	12.5	12.5	12.5

問2 5 瀬戸内海で泳ぐことがあるか

- 1 : 昔泳いだことがあるが、今は泳がない
- 2 : 夏に週1回以上泳ぐ
- 3 : 夏に数回泳ぐ
- 4 : 夏に1, 2回泳ぐ
- 5 : 泳いだことがない

第5章 考察・結論

第1節 宮島と瀬戸田町の比較

2つのアンケート調査から、伝統的な観光地である宮島と、観光地としてまだ歴史が浅く、しまなみ海道の開通により急に脚光を浴びた瀬戸田町との、いくつかの相違点と共通点が明らかになった。

1) 観光地としての熟度と観光への依存度

このことについて宮島町と瀬戸田町との違いは、回答者の観光業に従事する割合からも明らかになるが、住民の意識の差としても現れている。例えば、観光地であるために生活していて迷惑を感じるかどうかの質問では、宮島町の住民が観光地であることを当然に思い、あまり迷惑であると感じていないのに対して、瀬戸田町の住民の場合には、観光客のことを迷惑に感じる機会が多いようである。観光業が地域経済の基盤をなしているため、宮島の回答者はより多くの観光客に来てほしいと願うのに対し、瀬戸田町では現在程度で充分という回答が最も多かった。この背景には、しまなみ海道が開通して一年たたないうちにアンケートを行ったため、「現在程度」といっても例年に比べればかなりの人数であったことを忘れてはならない。逆に宮島の場合は2年続けて観光客が減少してきている状況にあり、危機感を感じるのは当然であろう。

2) 観光資源の評価

文化財や、山・海などの自然資源、町並みなどについて住民の評価が両町が異なる。宮島では、厳島神社をはじめ、その他の史跡や建造物などが高く評価され、観光資源として活かされていると判断されている。そして、今後の活用方向として保全を中心とすべきだという姿勢が強く示され、そのために土地利用などの規制も必要なものとして認められている。瀬戸田町では耕三寺と、現代文化を活かした平山郁夫美術館やベルカントホール、ピエンナーレなどが町の最も重要な資源とされるが、その他の史跡や建造物などはあまり高く評価されていない。耕三寺は、歴史的遺産としてよりも、その建設に込めた建立者の願いの語り、必ずしも歴史的とはいえない建造物そのものが集客力のもとになっている。また、これらの資源の今後の活かし方としては積極的な保全よりも、現状維持か周辺環境の整備が求められている。これらのことは、歴史性を意識する宮島と、新興観光地としての瀬戸田町との差を反映しているといえよう。あるいは、過去からの文化的伝統と現代に創られた文化との差が観光資源のあり方の違いとして現れているともいうことができる。

今後、観光に関して力を入れるべき分野として最も高い割合となったのは、両町とも「自然を活かした事業」であり、近年の日本の観光において自然が注目されてきていることを反映しているといえよう。ただし、自然資源の中で、瀬戸田町では、海辺と瀬戸内海の景色が資源として高く評価されて

いるのに対して、宮島町では山の自然が重視されている。現状を海辺も山の自然もあまり活かされていないと判断する宮島町民に対して、瀬戸田町民は海は十分活かされていると答える。両島ともに公共事業として海水浴場が整備されているが、宮島の場合は施設が集落から離れた島の反対側に立地し住民の目にふれにくいことに加え、海水浴客が島内の交通渋滞をまねいていると思われるのに対して、瀬戸田町のサンセットビーチは開発当時にモデル海水浴場として全国的な評価を受けており、これらが住民の評価に影響していると考えられる。また、山に関しては、昔から神社の領域とされた宮島の弥山には宗教的な意味付けがされており、その原生林が世界遺産登録の対象になっていることなどから、山を守る意識は宮島での方が強い。

今後の活かし方として、半数近くが海辺の環境保全を重視すべきと答えたことや、約2割がスポーツ・レジャー施設の整備を望んでいることなど、両町の回答に共通する特徴がみられる。

その他共通点として、新たな施設を作ることを求める回答者が少なく、今後の観光開発ではハード中心の方針から脱却すべきと考える傾向があると認められる。さらに、観光客の好みにあった町並みを創造する発想と、町並みの景観保存を強める発想がほぼ同程度であることも、両町で同じであり、今まであまり活かされてこなかった町並みという資源に対して、住民の間で意見が割れている。

3) 行政の活動とその評価

瀬戸田町が積極的に観光施設の整備を進めてきたことを住民の過半数が「よくやっている」と評価しているが、観光開発に直接関わるより、近年では周辺のインフラ整備が主となっている宮島町の活動には多くの町民が問題点を指摘している。財政的に表現すれば、宮島町の場合は観光振興のための投資が足りないという批判があるのに対して、瀬戸田町の場合は現状以上の投資をしないほうがいい、かつ、観光よりも福祉を優先すべきだという意見が多い。その背景には、宮島町では競艇収入に余裕があったときに各種福祉施設が整備されてきたことに加え、世界遺産登録・毛利元就ブーム後、観光客入込数が減っていることをふまえ、町の積極的な態度を求める声が高まったことがあげられる。逆に瀬戸田町の場合は、新しい施設を整備するたびに議会や町民の間で議論が重ねられたため、施設の維持費なども意識されている。そして、観光業そのものが宮島ほどには中心的な産業となっていないので、観光業に関わりのある一部の町民の利益のために町の予算を集中的に投入することは批判の対象となる。

4) 観光によるプラスとマイナスの効果

両町においてともに観光のマイナスの影響としてあげられたものとして、ゴミの増加や渋滞などの具体的な問題点と、何事にも観光が優先されてしまうという、抽象的な問題点が指摘されている。そ

の他、観光を目的に訪れる人がほとんどである宮島に対して、瀬戸田町ではしまなみ海道の開通により、観光客のみならず、島を通過する人が増加し、来訪者の増加にともなう治安の問題が意識されるようになった。

観光のプラス効果としては、観光地の環境を整えるために、下水道などの生活環境の整備や施設の充実が積極的に図られたという生活上の利便性の向上に関連するもの、あるいは知名度や故郷が自慢できるなどの地域意識に関連するものが、両町ともに上位にあげられている。また、観光地であることが宮島では直接仕事につながると意識される割合が高いのに対して、瀬戸田町では個人の利益よりも町全体のにぎわいを生み出していると評価されている。経済的な効果が、それぞれの地域における観光業の重要性を反映するような形で現れているといえよう。

5) 「世界遺産登録」と「しまなみ海道の開通」に対する期待と評価

宮島では、世界遺産登録に対してほとんどの回答者が事前になんらかの期待を抱いていたが、しまなみ海道開通に対しては、瀬戸田町の住民は、冷静に一時的な効果にすぎないと判断する人が最も多かった。事後の評価では、宮島では過半数が登録による悪影響を一切感じていないが、瀬戸田町ではほとんどの人がなんらかのマイナス効果をあげている。それは、物理的な存在である「橋」と、イメージ上の存在である「世界遺産登録」の本質的な違いといえればそれまでだが、これに加えて、瀬戸田町住民が「橋」を冷静にみている理由として、全通以前から部分的に橋はつながってきており、その効果を住民が経験してきていることや、しまなみ海道の開通によって四国につながることでよりすでに開通している本州との架橋のほうが重要と認識されていることなども反映されている。

第2節 両地域からみた瀬戸内観光地域の特徴

本稿は、第1章に示したように、事実上も意味論的にも瀬戸内における新旧対照的な2つの観光地、宮島としまなみ海道を事例として、両地域の観光地としての位置づけや性格について再検討するとともに、それぞれがどのように観光に対応しているのかを住民の意識や行動に焦点を当てて考察することを目的とした。加えて、わずかな事例ながらそこから観光地域としての瀬戸内の特徴を垣間見ようという思いももっていた。最後に、明確な結論とまではいかないまでも、これらについての考えをまとめておく。

まず、両観光地は、大きくみれば「瀬戸内」という名称で括られる観光地域の中に含まれ、訪れる観光客数の規模からみても、瀬戸内西部を代表する観光地といってよい。ただし、「瀬戸内」という名称でこの地域の景観や観光対象を一括りにしたのは近代以降のこととされ、宮島のようにそれ以前

から多くの人が参拝や物見遊山に訪れる場所は、瀬戸内海沿岸各地に別々のものとして点在していた。白砂青松の海岸美と島々が織りなす景観美は、瀬戸内海らしい、日本の伝統的な風景として、観光地としてのイメージ形成に欠かせないものであった。しかし、瀬戸内海は古くから物流のメインルートであり、長らく日本の産業経済の主軸となる地域であった。今でこそ産業経済の重心は東に移ってしまったが、今なお太平洋ベルト地帯、あるいは第一国土軸の西半分に位置づけられる。沿岸各地には時代ごとにさまざまな産業が成立・集積し、地域全体を見渡せば各種の産業地域がパッチワーク状につながり合っている。

また、日本の国土構造の階層化が進み、中央から離れた島嶼地域や沿岸の中山間地域は、ますます周辺的な地域へと構造化され、産業経済の低迷、過疎化、高齢化などの諸問題に悩んでいる。かつてこれらの地域を後背地として成立してきた沿岸の多くの都市は、より「上位の」都市や海外を向いており、これらの地域は、最近の市町村合併促進の動きをみても、整理・統合される対象として位置づけられるようになってきている。

観光に関しても、地域間の階層化は、観光圏の形成という意味で重要である。市場規模を考えれば、観光振興を図るためには大都市圏の住民をターゲットとした戦略が必要となるが、逆に考えれば大都市からの距離が観光地の盛衰に大きな影響を与えるといえ、市場たるどの都市の観光圏に入るか（どこから多くの観光客を引きつけることができるか）が観光地域づくりの大きな課題となる。都市を中心とする観光圏は、利用する交通手段によって大きく異なる。自動車や近郊電車などを用いる場合には目的地までの時間距離と物理的な距離はそれほど乖離せず、都市を中心とした同心円的な観光圏が成立するが、飛行機を利用するような長距離移動を想定する場合には、観光資源の質の問題とともに、経済的にも時間的にも国内より海外の方が「近い」場合も考えられ、同心円的な観光圏は成立しない。

これを視野に入れて事例地域について考えてみると、西瀬戸地域は観光資源の質（そこにしかないという観光資源）を問わなければ、中途半端な位置にあるといえるのではないか。しまなみ海道では京阪神地域を重要な市場としているが、京阪神からの日帰り観光圏となる東瀬戸地域と違い、西瀬戸地域では京阪神からでも宿泊型の観光を考えないと、かなり慌ただしい旅程になってしまう。日帰り圏となる瀬戸内地域は、宮島もしまなみ海道も最も来訪者の割合の高い市場ではあるが、域内に100万都市広島などはあるものの人口集積はさほど大きくない。また、首都圏ほかからの集客を考える場合には、飛行機や新幹線等を用いての移動が主となるが、その場合には海外旅行との競争になる。宮島には全国からの観光客が訪れているが、修学旅行でも沖縄や長崎との競争にさらされているように、飛行機を用いる観光地との競争になっている。宮島の場合には厳島神社という世界遺産があり他と差

別化できるが、瀬戸内の海や景観に関しては、海岸美や島なみの景色、マリンレジャーをアピールする場合、海外の海洋リゾートや沖縄・奄美などに対し、瀬戸内海が競争力に勝るとはとてもいえない。つまり、西瀬戸地域は、大消費地から近からず、遠からずの位置にある観光地といえるのである。

瀬戸内海及びその沿岸地域は、観光に関して「瀬戸内」という統一したイメージで語られるが、現実には景観の統一性や瀬戸内全体として調和のとれた観光地域づくりは必ずしも重視されてこなかった。「瀬戸内」の一語で括られる観光地域であるが、実際には上述のとおり、この地域は各種産業地域がパッチワーク状につながり合っている状況にあり、観光地は域内各所に点在しているにすぎない。言い換えれば、瀬戸内のイメージは、海と島を不可欠な景観要素とする「面」的な観光地域であるが、実際には、個々の名所・施設などの「点」としての観光地が、概念的に広く結びつけられたものといえるのである。これは瀬戸田町でのアンケートでも示されたように、観光客の期待する瀬戸内像は面的な前者であり、各地の住民の意識には、瀬戸内の全体的な意識より後者の点的な認識や行動が対応しており、観光客と住民の意識差となっている。このように観光地域としての瀬戸内を考える際には、「面」と「点」の視点の対比はひとつのキーワードになる。

一例として、瀬戸内海の景観整備と環境保全について考えてみよう。瀬戸内海の景観は瀬戸内イメージを構成する最重要資源である。その景観形成にとって重要な意味を持つ環境対策は、瀬戸内海（沿岸地域）という括りが他のテーマ以上に強く意識され、法律的にも根拠が与えられ、行政を中心とする広域的体制が最も整えられているものである。しかし、瀬戸内地域の環境保全の現状は、公害対策を典型例とする事後的な対症療法的取り組みがなされているにすぎず、必ずしも具体的な「望ましい景観像」の実現に力が注がれているわけではない。あるいは、そのような景観像が構想としては書かれていても、広く一般に共有されているわけではない。事実、瀬戸内海沿岸では早くから臨海部開発が進み、工場その他の施設が次々とつくられ、沿岸部では背後の山地・丘陵の中腹まで宅地が造成されてきた。宮島に渡って巖島神社から対岸の廿日市市や大野町を眺めたとき、とても面的・全体的な景観や海岸美に対する配慮がなされてきたとは言えないのである。世界遺産の島・宮島に限っても、島内はともかく、島から見える景色が議論されない¹⁶⁾ことからわかるように、しまなみや海岸美をその魅力として語られる瀬戸内地域に関して、ネットワーク的などという意味ではない、全体的で面的な景観や観光地域の形成に向けた取り組みはなされていないのである。

瀬戸内観光地域は、点＝観光地の概念的・広域的なネットワークであるということに関して、瀬戸内海の島と瀬戸内海を囲む沿岸部の関係と、島どうしの関係に分けて整理することも大切である。

まず、島嶼部と沿岸部（本州・四国）との関係としては、瀬戸内海の島々は個々に観光地として成立しうるが、実際の観光客の行動などを照らし合わせて考えると、最寄りの沿岸域の都市とセットになってひとつの観光ルートがつけられている。それは宿泊観光客の割合の低さや団体観光客の割合の高さなどに反映されている。宮島は島嶼部の中では例外的に宿泊施設の収容能力が高いが、それでも来島者の大半は島内には宿泊しない（しきれない）。宮島観光は多分に広島都市観光とセットになっている。修学旅行はそのひとつの典型例であるが、広島球場でのナイター観戦と宮島観光がパックになったり、外国人観光客がヒロシマを訪れたついでに宮島を見に来たりといった、さまざまなケースが考えられる。このように沿岸部の都市に泊まって島に日帰り観光するだけでなく、近在の沿岸都市住民が島に日帰りで観光に訪れる場合も多い。また、瀬戸田町においても橋が架かることへの期待は、沿道の島々がつながることよりもその先の本州側とつながることであった。

観光地域としての瀬戸内は点としての観光地が概念的にネットワークされたものとしたが、それは、ひとつひとつの観光地がランダムに結びついているわけではなく、最寄りの都市と島とをセットとする地域単位があり、それらがさらに他と結びつく形になっていると考えられる。

さらに、瀬戸内の統一されたイメージは海や島なみで語られるとしても、沿岸の都市の観光資源として海や島なみが重視されているわけではない。ヒロシマや道後温泉、倉敷の美観地区など、各々の地域形成の背景に瀬戸内海は不可欠だったとしても、観光地としてのアピールには海はそれほど関係ない。面としての瀬戸内の観光資源イメージは、海や島なみであるが、実際に瀬戸内地域で相当量の観光客を受け入れているのは沿岸の都市観光であり、そこでは海や島なみはそれほど重要な観光資源とはいえないことを認識しておく必要がある。

次に、個々の島に注目すると、島ごとに地域の性格はさまざまである。このことは、当然なことではあるが、瀬戸内を統一的な観光イメージで括ってしまうときに見落とされがちな事実でもある。地域の主要産業は島ごとに特徴的な変化がみられるし、観光に関しても観光資源は島ごとに多様であり、力点をおいて語られる地域の姿も一様ではない。特に宮島としまなみ海道は対照的である。

アンケートの結果からは、観光資源として自然や歴史・文化を重視し、しかもそれを基本的には守り伝えていこうとする両地域に共通する住民の姿は浮かび上がるが、宮島では厳島神社を核とする観光地・宮島が基本であって、瀬戸内海のしまなみを構成するひとつの島であるという意識はあまり感じられない。瀬戸内ブランドより宮島ブランドが優先される。これは、しまなみ景観が意識されるはるか以前から、由緒ある名所として単独の観光地であった宮島故なのかもしれない。アンケートでも主要観光資源として瀬戸内海の景色をあげた人が、山の自然の3分の1、厳島神社を除く歴史や文化

遺産の半分以下しかいなかったという結果にも現れている。

一方、瀬戸田町では、瀬戸内海の景色や海辺の自然が高い評価を得ている。ただし、瀬戸田町の場合も住民の意識からは、点的な観光地像が感じられる。むしろ宮島の住民以上に観光地である空間の広がりには狭く認識されているといえるかもしれない。しまなみ海道は、尾道から今治までを結ぶ架橋ルートを前提に成立した地域名称であり、面的な広がりをもつ（少なくとも線的な）観光地域を想起させる。観光客の認識はまさにそうなのだが、住民のレベルでは観光地である場所はあくまでも点（狭い地区）である。瀬戸田町全町や生口島全域が観光の島と認識されるというよりは、瀬戸田地区やシトラスパークが観光地なのである。さらに住民にとっては、隣の島がすでにあえて訪れる観光地となっている。観光面での広域連携の必要性も、宮島の3倍近い数字とはいえ、わずか15%程度の人にしか選ばれていない。

いずれにしても、まず自分たちの島ありき、町ありきが基本的な発想で、瀬戸内という全体の中に自らを位置づける発想はなかなか湧きにくいのだろう。観光政策においても、瀬戸内地域内での地域間競争が瀬戸内地域全体の観光地としての魅力づくりや競争力の向上より重視される。瀬戸内という点＝観光地の概念的ネットワークの中で、点相互の競争に力が注がれてはいても、全体の底上げが図られているわけではないのである。

最後に、点のネットワークとしての瀬戸内観光地域に広がる別のより強いネットワークについて言及しておく。瀬戸内観光地域は、ある種の郷愁を伴って意識される「瀬戸内」イメージをより所に、点在する観光地を結びつけることで成立しているといえるが、瀬戸内海の島嶼部に対するこれとは別のイメージとして、島嶼部はどこも過疎地であり、厳しい社会経済状況にあるという語りがある。この「過疎」という視点で地域社会をとらえることは、「中央」の存在を暗黙の了解とし、中央に対する周辺地域として、これらの地域を位置づけることでもある。瀬戸内地域のひとつひとつの観光地は、瀬戸内イメージに支えられた水平的なネットワークの結節点であると同時に、全国に垂直的に張り巡らされた地域間ヒエラルキーの末端でもある。そして、今はむしろ後者の方が状況をよく表しているように思える。「しまなみ」をクローズアップさせた本四架橋も全国を中央に結びつける基幹交通網整備の一環としてつくられたものであるし、かつては各時代時代に新機軸を生み出しながら栄えてきた宮島でも、さらなる行政の観光振興策を求める行政主導のまちづくりが指向されている。行政主導を指向するということは、中央を頂点とする階層構造にはまり込んでいくことの裏返しでもある。

この地域が今後も観光の観点から「瀬戸内」にこだわるのであれば、改めて瀬戸内地域とは何なのかを問い直し、そこから何をすべきか発想し直すことが必要である。しかもそれは外からこの地域を

どう位置づけるのか, イメージするのかではなく, 地域の側, 住民の側からの意識変化と行動によって支えられていくべきことである。現在でも, それぞれの観光地の努力は認められるし, 観光地としての魅力も十分にある。ただし, 瀬戸内地域全体をひとつの観光地域ととらえた場合, スポット的な観光施設はいろいろつくられるものの, 面的な広がりをもつ全体的な景観や雰囲気は失われ続けている。そして, さまざまな空間レベルでの地域間競争が激しくなる中, 観光地域としての成長は頭打ちになっており, 次のステップに進むためにはどうしても旧来型の発想を乗り越える必要があるだろう。

注

- 1) 現在は観光振興ではなく「交流人口を活かそう」という表現が用いられることが多い。交流人口にはさまざまな意味があり、単なる観光客とは違うとされるが（国土庁計画・調整局編，1994，1995），多くの地域における実際の取り組みをみる限り従来とあまり変わらないのが現実である。
- 2) 前掲西田（1999）は50を超える近代欧米人の瀬戸内海賞賛の文献をリストアップしている。
- 3) 荒山（1995,1998）は，国立公園の選定を例に，近代のイデオロギーにより「ある風景」が「国家を代表する風景」としてオーソライズされることを論じている。ここではこの点についての議論は深めない。
- 4) 都道府県によって調査の名称は異なる。通常メソスケールでの観光客数はこの統計に基づいて示されることが多い。都道府県によって調査地の選定や調査方法がまちまちであること，また個々の観光地ごとに観光客数を把握する精度がまちまちであることなど，この統計の精度には問題がある。したがって大まかな傾向しかつかめないものである。国立公園利用者数も環境庁が各都道府県からの届け出をもとにまとめたものなので精度に難があることは同じである。
- 5) 月経やお産時の女性が忌舎にこもり家族と煮炊きをともにしないとか，墓を島内に設けないといったことで，1710年の巖島服忌令で集大成された（広島県教育委員会，1965）。
- 6) 広島県教育委員会（1972）において赤木昌彦は近世から近代にかけての政治社会情勢の変化と交易面からとらえた島民の生活の変化について論じている。
- 7) 林春徳の『日本国事跡考』に「松島，此島之外有小島若干。殆如盆池日波之景。境地之佳輿丹後天橋立、安藝巖嶋為三処奇観」とあり，これが日本三景の由来とされる（町立宮島歴史民俗資料館）。
- 8) 競艇には大竹市や大野町も関わっているが宮島ほどの依存度ではない。
- 9) 500m²までは建ぺい率が15%，500～1000m²なら20%である。
- 10) それにも関わらず，13mを超える公共施設や旅館が建てられているのは，公園計画に基づいてその制限を受けない施設として建設されたからである。公園計画に基づく施設は審査指針の対象とならない。公共施設，旅館，水族館，渡船場等が該当する。
- 11) 本章の以下のクロス集計に関する記述は，クロス集計表の独立性を検定し，1%有意となったもののみ取り上げている。
- 12) 表の情報は中国電力株式会社経済研究センター（1999），JTB(2000)，PLANET(1999)，愛媛県しまなみ海道の情報を載せたホームページ，そしていくつかの町村のパンフレットやホームページからまとめた。中国電力株式会社経済研究センター（1999）は各市または各島の施設と収容人数の合計，JTB(2000)にはすべての島の施設名，値段，部屋数，PLANET(1999)にはしまなみ海道沿いの島の施設名，料金，収容人数，愛媛県しまなみ海道の情報を載せたホームページには今治市と愛媛側の各島の施設名と料金が載っている。尾道・今治は中国電力のデータで，その他の数値は施設名を含めた三つの資料のうちせめて2つで確かめた宿泊施設のデータである。PLANETに含

めていない施設の場合, 収容人数を部屋数から計算した。

- 13) 設問では本人が関わる場合も含めて尋ねており, 回答は15.3%であった。この中から本人が関わっている3.6%分を除いた11.7%が本人を除く家族のだれかが関わる割合である。
- 14) この問については無回答が他の問よりも多く, 10.7%を占め, 町の名前で送られてきたアンケートに対する遠慮が読み取れる。
- 15) ここであげる割合は場所を記入した人に対してではなく, アンケート回答者全体に対する割合である。
- 16) 対岸でのマンション建設をめぐり, 海が見えること, 宮島その他の島々が見えることが問題になったが, 宮島から対岸がどう見えるかは問題にならなかった。

文 献

- 荒山正彦 (1995) 文化のオーセンティシティと国立公園の成立. 地理学評論68, pp.792-810
- 荒山正彦 (1998) 自然の風景地へのまなざし. 大城直樹・荒山正彦編『空間から場所へ』古今書院, pp.128-142
- 石田信夫 (1994) 『潮騒とクラシックとー突撃町長 (広島県瀬戸田町) のまちづくり』ぎょうせい, 239p.
- 今村外治 (1975) 巖島 (宮島) の地形・地質研究史. 天然記念物瀨山原始林・特別名勝巖島緊急調査委員会編 (1975) 『巖島の自然』宮島町, pp.1-10
- いよぎん地域経済研究センター (1997) [IRC調査]「瀬戸内しまなみ海道」にかける期待と課題ー企業, 市町村, 県民アンケート調査結果から. IRC 調査月報1997.12, pp.32-60
- いよぎん地域経済研究センター (1998) [IRC調査]しまなみ開通に向けた今治・島しょ部の動向. IRC 調査月報1998.12, pp.34-41
- 愛媛県観光協会編 (各年) 『観光客数とその消費額』
- 岡崎 環 (1986) 宮島をとりまく法. 宮島の自然と文化No.5 (宮島町博物館協会), pp.28-37
- 国土庁計画・調整局編 (1994) 『交流人口ー新たな地域政策』大蔵省印刷局, 215p.
- 国土庁計画・調整局編 (1995) 『交流人口ー地域を見つめる新たな視点』大蔵省印刷局, 224p.
- 国立公園協会・自然保護協会編 (1989) 『日本の自然公園』講談社, 421p.
- 白幡洋三郎編 (1999) 『瀬戸内海の文化と環境』神戸新聞総合出版センター, 310p.
- 総務庁行政監察局編 (1994) 『リゾート構造の着実な実現に向けて』大蔵省印刷局, 113p.
- 総務庁統計局 (1996) 『平成8年社会生活基本調査報告』Vol.4-1
- 中国新聞社編 (1996) 『神の島宮島を楽しむ』中国新聞社, 127p.
- 中国新聞社編 (1997) 『原爆ドーム 21世紀への証人』中国新聞社, 163p.
- 中国電力株式会社経済研究センター (1999) しまなみ海道開通後の影響と経済効果. 経済調査統計月報, 1999-10 (304), pp.2-23
- 西田正憲 (1999) 瀬戸内海の風景と異文化のまなざし. 白幡洋三郎編 (1999) 『瀬戸内海の文化と環境』神戸新聞総合出版センター, pp.246-267
- 日本水環境学会編 (1999) 『日本の水環境行政』ぎょうせい, 284p.
- 日本水環境学会編 (2000) 『日本の水環境6 中国・四国編』技報堂出版, 194p.
- 日本離島センター (1998) 『離島架橋の効果とその活用による離島振興方策に関する調査報告』, 309p.
- ひろぎん経済研究所 (1999) 『しまなみ海道開通及び「しまなみ海道'99」開催による観光消費効果』, 15p.
- 広島県教育委員会 (1965) 『広島県文化財調査報告 第5集』(大島暁雄・松崎憲三・宮本袈婆雄編 (1997) 『日本民俗調査報告書集成 中国の民俗 広島県編』三一書房)
- 広島県教育委員会 (1972) 『巖島民俗資料緊急調査報告書』(大島暁雄・松崎憲三・宮本袈婆雄編 (1997) 『日本民俗調査報告書集成 中国の民俗 広島県編』三一書房)
- 藤目節夫 (2000) しまなみ海道を活かす. IRC調査月報 2000.2 (いよぎん地域経済研究センター), pp.18-34
- 松岡久人 (1986) 『安芸巖島社』法蔵館, 244p.
- 宮島町教育委員会 (1994) 『宮島の自然』宮島町教育委員会, 230p.
- 横山昭市 (1999) 芸予諸島の変容と西瀬戸自動車道開通への対応. 愛媛の地理6(14), pp.1-13.
- 由比浜省吾編 (1993) 『地域構造の変容と地域開発』大明堂, 280p.
- Funck, Carolin (1999) When the Bubble Burst: Planning and Reality in Japan's Resort Industry. Current Issues in Tourism, 2-4, pp.333-354
- JTB編 (2000) 『るるぶー瀬戸内の島々』, 127p.
- PLANET編(1999) 『瀬戸内しまなみレジャーガイド』, 104p.

【1】「宮島の観光のイメージ・地域のイメージについて」の質問です。

問1 宮島は観光地として有名ですが、あなたは宮島をどのようなレベルの観光地だと思いますか。次から1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. 世界的に有名な観光地
- イ. アジアを代表する観光地
- ウ. 日本国内における有名な観光地
- エ. 中四国地方の有名な観光地
- オ. 広島県では有名な観光地

問2 宮島観光にとつての厳島神社について、あなたの考えに近いのは、あえて選ぶとしたら次のどちらですか。アかイのいずれかに○をつけて下さい。

- ア. 厳島神社は、宮島観光の中心である
- イ. 厳島神社は、宮島の数ある観光資源のひとつにすぎない

問3 厳島神社以外の宮島の観光資源について、より重要であると思うものを、次から3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 厳島神社以外のすぐれた史跡や建造物
- イ. 歴史上の出来事や故事
- ウ. みやげ物店や旅館の並ぶ町なみ
- エ. 水族館や公園などの施設
- オ. 花火大会など各種のイベント
- カ. ゆたかな自然の残る弥山などの山
- キ. 海水浴や釣りなどができる海辺
- ク. 瀬戸内海の景色
- ケ. 船でわたる「島」であること
- コ. 訪れた人への、宮島住民の人情やあたたかさ
- サ. カキやアノゴなどの食べ物
- シ. もみじ饅頭や宮島細工などの特色ある土産物
- ス. 島外ではあるが、競艇場

宮島の観光と生活に関するアンケート

ご記入にあたって

■このアンケートは、電話帳に記載された世帯にあてて、送付させていただきました。ご記入いただく方は、ご家族のどなたでも結構です。

■このアンケートは、研究の目的にのみ使います。その他の目的にデータを用いることはいたしません。

■このアンケートでは、大きく分けて3つのことをお尋ねしています。

【1】は、「宮島の観光のイメージ・地域のイメージについて」の質問です。

【2】は、「観光の島・文化財の島で暮らすことについて」の質問です。

【3】は、「このアンケートに回答された方について」の質問です。

■ご記入いただいたアンケート用紙は、お手数ですが、同封した返信用の封筒に入れて、平成12年2月29日までにご投函下さい。

ご協力よろしく願っています。

なお、このアンケートについて不明な点がございましたら、下記までご連絡下さい。

広島大学 総合科学部 地域文化コース 浅野敏久

739-8521 東広島市鏡山11-7-1
電話 0824-24-6364 (研究室)
0824-24-6360 (事務室)

問4 宮島の観光のあり方について、あなたの考えに近いものを、あえて選ぶとしてらどれですか。①～⑥のそれぞれについて、1つ選んで○をつけて下さい。

①力を入れるべき分野

- ア. 厳島神社を活かせる事業
- イ. 宮島の歴史を活かした事業
- ウ. 宮島の自然を活かした事業
- エ. 遊園地・テーマパークなどの、集客力のある観光施設の整備
- オ. 新しい料理や、みやげ物の開発
- カ. 県内の他の観光地との連携

②意識すべき観光客

- ア. 団体旅行者
- イ. 個人や少数人数グループの観光客

③これからの宮島観光を活性化するには

- ア. 島内の観光関連業者の連携・協力の強化
- イ. 島外からの大手観光業者の参入

④町の観光行政について

- ア. 現在の観光行政は、よくやっていると評価できる
- イ. 現在の観光行政には、問題がある

⑤観光振興のための財政規模

- ア. 今以上に観光振興のために投資すべき
- イ. 現状程度でちょうどよい
- ウ. 観光振興にお金をかけすぎている

⑥財源の配分

- ア. 宮島は観光の島なので、より積極的に観光振興を図るべき
- イ. 限られた財源のなかでは、観光より、福祉や教育などを重視すべき

問5 次にあげる①～⑥について、現在、観光面で十分に活かされていると思えますか。適当と思うものを、それぞれ1つ選んで○をつけて下さい。

①厳島神社、その他の文化財

- ア.十分に活かされている
- イ.まあ活かされている
- ウ.どちらともいえない
- エ.あまり活かされていない
- オ.全く活かされていない

②弥山その他、山の自然や景色

- ア.十分に活かされている
- イ.まあ活かされている
- ウ.どちらともいえない
- エ.あまり活かされていない
- オ.全く活かされていない

③包ヶ浦その他、海辺の自然や景色

- ア.十分に活かされている
- イ.まあ活かされている
- ウ.どちらともいえない
- エ.あまり活かされていない
- オ.全く活かされていない

④水族館や歴史民俗資料館、公園などの施設

- ア.十分に活かされている
- イ.まあ活かされている
- ウ.どちらともいえない
- エ.あまり活かされていない
- オ.全く活かされていない

⑤旅館やみやげ物店が並ぶ町なみ

- ア.十分に活かされている
- イ.まあ活かされている
- ウ.どちらともいえない
- エ.あまり活かされていない
- オ.全く活かされていない

⑥各種の祭やイベント

- ア.十分に活かされている
- イ.まあ活かされている
- ウ.どちらともいえない
- エ.あまり活かされていない
- オ.全く活かされていない

問6 次の①～⑤について、今後、地域づくりに活かすとしたら、どのような方向が望ましいですか。適当と思うものを、それぞれ1つ選んで○をつけて下さい。

- ① 厳島神社、その他の文化財
- ア. 文化財として守り伝えることが第一である
- イ. 現状程度の話し方で十分である
- ウ. 町なみや遊歩道など、周辺環境をさらに整備する
- エ. 神社や史跡にちなんだテーマパークなどをつくる
- ② 弥山その他、山の自然や景色
- ア. 山の自然環境の保全を中心に考える
- イ. 施設整備はほどほどにして、自然観察などを充実する
- ウ. 遊歩道や休憩施設などを、さらに整備する
- エ. 多くの観光客が集まるスポーツ・レジャー施設を整備する
- ③ 包ヶ浦その他、海辺の自然や景色
- ア. 海辺の自然環境の保全を中心に考える
- イ. 施設整備はほどほどにして、自然観察などを充実する
- ウ. 道路や駐車場などの整備を進める
- エ. 多くの観光客が集まるスポーツ・レジャー施設を整備する
- ④ 水族館や資料館、公園などの施設
- ア. 規模を縮小しても、町財政に見合った経営を行う
- イ. 観光面での効果を失わないため、現状を維持する
- ウ. 他の観光施設との競争力を強めるため、施設の拡充を図る
- エ. 新たな観光施設をつくる

- ⑤ 旅館やみやげ物店が並ぶ町なみ
- ア. 観光客の好みやイメージにあった町なみを創造する
- イ. 景観保全の取り組みを強化して、町なみを守る
- ウ. 現状程度の町なみで十分である
- エ. 住民に負担を強いる、さまざまな規制を緩やかにする
- オ. 町なみを整備するより、道路整備を行う

【2】 観光の島・文化財の島で暮らすことについての質問です。

問7 宮島の観光客についてお伺いします。①～③のそれぞれについて、あなたの考えに近いものを、1つ選んで○をつけて下さい。

- ① 宮島には、年間200万人を超える観光客が訪れていますが、観光客の数は今後どうなるのが望ましいですか？
- ア. もっと多くの観光客に来てほしい
- イ. 今ぐらいの観光客が来てくれればよい
- ウ. 多すぎる時と、少なすぎる時があるので、分散してほしい
- エ. 今は多すぎるので、もう少し観光客が減ってもよい
- ② 観光客が多い日に町を歩いていると、どのように感じることは多いですか？
- ア. にぎやかでよいと思う
- イ. 観光地だから仕方がないと思う
- ウ. うるさいとか、うっとうしいと思う
- エ. あまり気にしたことはない

- ③ 観光客が少ない日に町を歩いていると、どのように感じることは多いですか？
- ア. さびしいと思う
- イ. 不安に思う
- ウ. 静かで落ちつくと思う
- エ. あまり気にしたことはない

問8 観光地であるために、自分の生活で迷惑を被っていると思うことがありますか。1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. 常にそう感じている
- イ. 迷惑に思うことが多い
- ウ. たまに迷惑に思うことがある
- エ. 迷惑だと感じることはない

問9 観光地であるために、迷惑していると感じるのはどういふときですか。強く感じるものを、3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 交通渋滞が起こる
- イ. ゴミが町中に散乱する
- ウ. 観光客が与える餌で鹿が増える
- エ. イベントなどの手伝いに、かり出される
- オ. くだらないことで話しかけてくる観光客がいる
- カ. 夜間や休日、静かに休めない
- キ. つねに知らない人に見られている感じがする
- ク. 風紀上・治安上のトラブルが起こる
- ケ. なにごとも観光客が優先される
- コ. その他 具体的に書き下さい

問10 観光地であることは、どのような面で生活に役立っていますか。重要と思うものを、3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 仕事につながっている
- イ. 渡船の便がよい
- ウ. 人口が少ない割には、各種の施設が充実している
- エ. 上下水道など生活基盤の整備が進んでいる
- オ. 散歩したり、趣味の活動をする環境に恵まれている
- カ. 町ににぎわいがある
- キ. 多くの人との出会いがある
- ク. ふるさとを自慢できる
- ケ. よそで自己紹介する場合に、知名度が高い
- コ. その他 具体的に書き下さい

問11 厳島神社は世界文化遺産に登録されていますが、このことに関連して次の①～③のそれぞれについて、あてはまるものを1つ選んで○をつけて下さい。

①数年前のことを思い出して下さい。あなたは世界遺産に登録されるという話に関心を持ちましたか？

- ア. とても関心を持った
- イ. やや関心を持った
- ウ. あまり関心を持たなかった
- エ. 全く関心を持たなかった

②厳島神社が世界文化遺産に登録されたのは、平成8年12月（1996年）ですが、あなたが、世界遺産に登録されるということを知ったのはいつごろですか？

- ア. 登録された平成8年より、かなり前（2年以上前）
- イ. 登録が決まるまでの1年間
- ウ. 登録が決まった後
- エ. 世界遺産に登録されているということを知らなかった

③あなたは世界遺産登録にむけて、一住民として、なんらかの活動をしましたか？

- ア. 政治家や関係機関に働きかけた
- イ. 厳島神社の世界遺産化を求めめる住民団体や地域活動に参加した
- ウ. 厳島神社の世界遺産化を求めめる署名などに協力した
- エ. 活動があれば協力したが、そのような活動がなく、できなかった
- オ. 世界遺産登録には関心がなく、何もしなかった
- カ. 住民が行動することではないので、何もしなかった
- キ. どちらかといえれば世界遺産登録されることに反対だった

問12 「日本三景」と「世界文化遺産」とでは、どちらが観光地としての宮島を強く宣伝できると思いますか。あてはまるものを1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. だんぜん「日本三景」
- イ. どちらからかといえば「日本三景」
- ウ. どちらからかといえば「世界文化遺産」
- エ. だんぜん「世界文化遺産」

問13 世界遺産に登録される前を思い出して下さい。厳島神社が登録されることについて、どのような期待や不安がありましたか。1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. 世界に認められると誇らしく思った
- イ. より確実に文化財が守られるようになった
- ウ. 宮島の宣伝になって観光客が増えると思った
- エ. 保護のために建築規制などが強くなるのではないかと不安に思った
- オ. 県や国、海外からの干渉が増えるのではないかと不安に思った
- カ. 世界文化遺産などと言っても名前だけだと思った

問14 登録から3年がすぎた今、世界遺産に登録されて、よかった、効果があったと思えることは何ですか。重要と思うものを3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 国や県による文化財保護の支援体制が強化された
- イ. 文化財を守るための、町の取り組みが強化された
- ウ. 住民の神社への思いが強くなった
- エ. 厳島神社や宮島に関する世間の関心や知識が増えた
- オ. 厳島神社や宮島の知名度があがった
- カ. 観光客が増えた
- キ. 国際的な観光地になった
- ク. プラスの効果はなかった
- ケ. その他 具体的に書き下さい。

問15 世界遺産に登録されて、好ましくない影響があったと思えることは何ですか。重要と思うものを3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. なにごとも文化財の保護が優先されるようになった
- イ. 文化遺産を守るための規制が強くなった
- ウ. 宮島の土地利用について外部からの干渉が強くなった
- エ. 観光客が増えすぎた
- オ. 外国からの観光客が増え、対応に困るようになった
- カ. 好ましくない影響はなかった
- キ. その他 具体的に書き下さい

問16 宮島は、世界遺産のみならず、国立公園法や文化財保護法などによって、保全が定められた文化財の島です。そのため、史跡や建造物をはじめ、周辺の環境や景観をまもるための、いくつかの規制が設けられています。

これらの規制があることについて、①～③のそれぞれに対して、あなたのお考えに近いものを、1つ選んで○をつけて下さい。

- ①町にとって
 - ア. 文化財を守るためには、規制は必要である
 - イ. 規制は必要だが、現状では不十分である
 - ウ. 規制が、まちづくりの障害になっている
 - エ. 規制があるために、人が町から出ていってしまう
 - オ. 規制があろうがなかろうが、町にとっては関係ない
- ②あなたご自身にとって
 - ア. 規制は当然で、むしろ文化財の島に住んでいることを誇りに思う
 - イ. 文化的な価値を守るためには、規制はやむをえない
 - ウ. 今の規制はかなり厳しいので、緩くしてほしい
 - エ. 規制は迷惑なだけなので、なくしてほしい
 - オ. 自分には関係ない

③日本国民や後世の人たちに対して

- ア. 文化財を守ることは、宮島の住民としての責務である
- イ. 住民の犠牲のもとで、文化財が守られていることを理解してほしい
- ウ. 文化財保護に貢献しているのだから、住民への補償があつてよい
- エ. 日本や世界の遺産だという前に、住民の生活が優先されるべきだ
- オ. 国民や後世の人たちのことなど考える必要はない

【3】このアンケートに回答された方についての質問です。

問17 あなたの御年齢は？

- ア. 20歳未満 イ. 20歳代 ウ. 30歳代 エ. 40歳代
- オ. 50歳代 カ. 60歳代 キ. 70歳代 ク. 80歳以上

問18 あなたの性別は？

- ア. 男性
- イ. 女性

問19 お仕事の業種は？ パートやアルバイトも含みます

- ア. 農林水産業 イ. 建設業 ウ. 製造業
- エ. 観光業（商・飲食・サービス業など）
- オ. 商業（観光関連以外の商業）
- カ. サービス業（観光関連以外のサービス業）
- キ. 公務 ク. その他の産業 ケ. 専業主婦
- コ. 学生 サ. 年金生活など シ. その他

問20 あなたの勤務先は？

- ア. 町内
- イ. 町外
- ウ. 今は仕事をしていない

問20 あなたは宮島にお住まいになりましたか？

- ア. 5年未満
- イ. 5～10年
- ウ. 10～20年
- エ. 20年以上

問21 あなたは年間に何回くらい旅行に出かけられますか？

- ア. 年5回以上
- イ. 年3、4
- ウ. 年1、2回
- エ. 数年に1度程度
- オ. めったに旅行はしない

問22 これまで旅行されて、もともと気に入った観光地があれば教えてください。

①日本国内では、

②海外では、

ご協力ありがとうございました。

【1】「瀬戸田町の観光のイメージ・地域のイメージについて」の質問です。

問1 瀬戸田町は観光地として有名ですが、あなたは瀬戸田町をどのようなレベルの観光地だと思いますか。次から1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. 日本国内における有名な観光地
- イ. 中四国地方の有名な観光地
- ウ. しまなみ海道の重要な観光地

問2 生口島はどんな島ですか。あなたの考えに近いのは、あえて選ぶとしたら次のどれですか。1つを選んで○をつけて下さい。

- ア. 農業の島
- イ. 観光の島
- ウ. 造船業の島

問3 瀬戸田町の観光資源について、より重要であると思うものを、次から3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 耕三寺以外のすぐれた史跡や建造物
- イ. 耕三寺
- ウ. みやげ物店の並ぶ町なみ
- エ. シトラスパークや公園などの施設
- オ. 夏まつりなど各種のイベント
- カ. ゆたかな自然の残る観音山などの山
- キ. 海水浴や釣りなどができる海辺
- ク. 瀬戸内海の景色
- ケ. 橋
- コ. 柑橘類を主とした農業
- サ. たこや魚介類などの食べ物
- シ. レモンケーキなどの特色ある土産物
- ス. 平山美術館、ベルカントホール、ピーエナーレのような文化的資源
- セ. 訪れた人への、瀬戸田町住民の人情やあたたかさ

問4 瀬戸田町の観光のあり方について、あなたの考えに近いものを、あえて選ぶとしたらどれですか。～ のそれぞれについて、1つ選んで○をつけて下さい。

- 力を入るべき分野
- ア. 耕三寺を活かせる事業
- イ. 瀬戸田町の歴史と文化を活かした事業
- ウ. 瀬戸田町の自然を活かした事業
- エ. 遊園地・テーマパークなどの、集客力のある観光施設の整備
- オ. 新しい料理や、みやげ物の開発
- カ. 周辺の他の観光地との連携
- キ. 柑橘類など、農業を活かした事業
- ク. 造船業を活かした事業

意識すべき観光客

- ア. 団体旅行者
- イ. 個人や少人数グループの観光客

これからの瀬戸田町の観光を活性化するには、島内の観光関連業者の連携・協力の強化

- イ. 島外からの大手観光業者の参入

町の観光行政について

- ア. 現在の観光行政は、よくやっていると評価できる
- イ. 現在の観光行政には、問題がある
具体的に：

観光振興のための財政規模

- ア. 今以上に観光振興のために投資すべき
- イ. 現状程度でちょうどよい
- ウ. 観光振興にお金をかけすぎている

財源の配分

- ア. 瀬戸田町は観光が重要な町なので、より積極的に観光振興を図るべき
- イ. 限られた財源のなかでは、観光より、福祉や教育などを重視すべき
- ウ. 限られた財源のなかでは、観光より、他の産業を重視すべき

問5 次にあげる～について、現在、観光面で十分に活かされていると思いますか。適当と思うものを、それぞれ1つ選んで○をつけて下さい。

- 耕三寺、その他の文化財
- ア. 十分に活かされている
- イ. まあ活かされている
- ウ. どちらともいえない
- エ. あまり活かされていない
- オ. 全く活かされていない

観音山その他、山の自然や景色

- ア. 十分に活かされている
- イ. まあ活かされている
- ウ. どちらともいえない
- エ. あまり活かされていない
- オ. 全く活かされていない

サンセットビーチその他、海辺の自然や景色

- ア. 十分に活かされている
- イ. まあ活かされている
- ウ. どちらともいえない
- エ. あまり活かされていない
- オ. 全く活かされていない

シトラスパーク、平山美術館、ベルカントホールなどの施設

- ア. 十分に活かされている
- イ. まあ活かされている
- ウ. どちらともいえない
- エ. あまり活かされていない
- オ. 全く活かされていない

【2】観光の島・文化の島で暮らすことについての質問です。

問7 瀬戸田町には、年間約100万人の観光客が訪れていますが、観光客の数は今後どうなるのが望ましいですか？あなたの考えに近いものを、1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. もっと多くの観光客に来てほしい
- イ. 今ぐらいの観光客が来てくれればよい
- ウ. 多すぎるときと、少なすぎるときがあるので、分散してほしい
- エ. 今は多すぎるので、もう少し観光客が減ってもよい

問8 観光地であるために、自分の生活で迷惑を被っていると思うことがありませんか。1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. 常にそう感じている
- イ. 迷惑に思うことが多い
- ウ. たまに迷惑に思うことがある
- エ. 迷惑だと感じることはない

問9 観光地であるために、迷惑していると感じるのはどういうときですか。強く感じるものを、3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 交通渋滞が起こる
- イ. ゴミが町中に散乱する
- ウ. イベントなどの手伝いに、かり出される
- エ. くだらないことで話しかけてくる観光客がいる
- オ. 夜間や休日、静かに休めない
- カ. つねに知らない人に見られている感じがする
- キ. 風紀上・治安上のトラブルが起こる
- ク. なににことにも観光が優先される
- ク. その他 具体的に：

問10 観光地であることは、どのような面で生活に役立っていますか。重要と思うものを、3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 仕事につながっている
- イ. 人口の割には、各種の施設が充実している
- ウ. 上下水道など生活基盤の整備が進んでいる
- エ. 散歩したり、趣味の活動をする環境に恵まれている
- オ. 町ににぎわいがある
- カ. 多くの人との出会いがある
- キ. ふるさとを自慢できる
- ク. その他 具体的に：

- エ. あまり活かされていない
- オ. 全く活かされていない

- エ. あまり活かされていない
- オ. 全く活かされていない

問6 次の ~ について、今後、地域づくりに活かすとしたら、どのような方向が望ましいですか。適当と思うものを、それぞれ1つ選んで○をつけて下さい。

耕三寺、その他の文化財

- ア. 文化財として守り伝えることが第一である
- イ. 現状程度の活かし方で十分である
- ウ. 町なみや遊歩道など、周辺環境をさらに整備する
- エ. 寺や史跡にちなんだテーマパークなどをつくる

観音山その他、山の自然や景色

- ア. 山の自然環境の保全を中心に考える
- イ. 施設整備はほどほどにして、自然観察ガイドなどを充実する
- ウ. 遊歩道や休憩施設などを、さらに整備する
- エ. 多くの観光客が集まるスポーツ・レジャー施設を整備する

サンセットビーチなど、海辺の自然や景色

- ア. 海辺の自然環境の保全を中心に考える
- イ. 施設整備はほどほどにして、自然観察ガイドなどを充実する
- ウ. 道路や駐車場などの整備をさらに進める
- エ. 多くの観光客が集まるスポーツ・レジャー施設を整備する

シトラスパーク、平山美術館、ベルカントホールなどの施設

- ア. 規模を縮小しても、無理のない経営を行う
- イ. 観光面での効果を失わないため、現状を維持する
- ウ. 他の観光施設との競争力を強めるため、施設の拡充を図る
- エ. 新たな観光施設をつくる

みやげ物店が並ぶ町なみ

- ア. 観光客の好みやイメージにあった町なみを創造する
- イ. 景観保全の取り組みをつくって、町なみを守る
- ウ. 現状程度の町なみで十分である
- エ. 町なみを整備するより、道路整備を行う

問14 しまなみ海道が開通して、生口島が他の島と連携された。そのことを今後、地域づくりに活かすとしたら、どのような方向が望ましいですか。重要と思うものを、1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. 観光地としての宣伝に活かす
- イ. 観光施設をしまなみ沿いに分布させ、広域観光地をつくる
- ウ. 造船業など、基盤産業の連携をはかる
- エ. 共同出荷施設などをつくって、農業の連携をはかる
- オ. 福祉や生活に役立つ共同施設をつくる
- カ. 広域的な行政の協力体制をつくる

【4】このアンケートに回答された方についての質問です。

問15 現在、お住まいになられている地域（旧小学校区）は？

- ア. 名荷
- イ. 北
- ウ. 瀬戸田
- エ. 西
- オ. 南
- カ. 高根

問16 あなたの御年齢は？

- ア. 20歳未満
- イ. 20歳代
- ウ. 30歳代
- エ. 40歳代
- オ. 50歳代
- カ. 60歳代
- キ. 70歳代

問17 あなたの性別は？

- ア. 男性
- イ. 女性

問18 お仕事の業種は？パートやアルバイトも含めて、あてはまるものすべてに○をつけて下さい。

- ア. 農林水産業
- イ. 建設業
- ウ. 製造業
- エ. 観光業（商・飲食・サービス業など）
- オ. 商業（観光関連以外の商業）
- カ. サービス業（観光関連以外のサービス業）
- キ. 公務
- ク. その他の産業
- コ. 学生
- サ. 年金生活など
- シ. その他

問19 あなたの勤務先は？

- ア. 生口島内
- イ. 生口島外
- ウ. 今は仕事をしていない

問20 ご家族で、観光業で仕事していらっしゃる方がいますか？（パートやアルバイトも含みます）

- ア. います
- イ. いません

問21 あなたは瀬戸田町にお住まいになられてどれくらいになりますか？

- ア. 5年未満
- イ. 5～10年
- ウ. 10～20年
- エ. 20年以上

【3】しまなみ海道の開通についての質問です。

問11 1999年にしまなみ海道が開通しました。開通する前のことを思い出して下さい。どのような期待や不安がありましたか。1つ選んで○をつけて下さい。

- ア. 観光客が増えて、観光地としてこれから繁栄すると思った
- イ. 生活が便利になると思った
- ア. 観光客が増えても、それは一時的なことにはすぎないと思った
- ウ. 瀬戸田町が通過点になってしまおうと不安に思った
- エ. 多田羅大橋よりも生口橋のほうが重要なのであまり変わらないと思った

問12 しまなみ海道が開通して、よかった、効果があったと思えることは何ですか。重要と思うものを3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 住民は観光業に関心を持つようになった
- イ. 町や商工会などは観光開発に積極的にとりくむようになった
- ウ. 町に活気がでた
- エ. 土地が高く売れるようになった
- オ. 瀬戸田町の知名度が上がった
- カ. 観光客が増えた
- キ. 他の島とのつながりができた
- ク. 生活範囲が広がった
- ケ. 収入が増えた
- コ. U-ターンする人が増えた
- サ. プラスの効果はなかった
- シ. その他 具体的に：

問13 しまなみ海道が開通して、好ましくない影響があったと思えることは何ですか。重要と思うものを3つまで選んで○をつけて下さい。

- ア. 交通渋滞が増えた
- イ. 自動車による排気ガスや騒音が増えた
- ウ. 観光客に対応するための施設の整備が町の負担になる
- エ. 観光客が増えすぎた
- オ. 観光産業に関係のない住民には迷惑がかかる
- カ. 自動車を運転しない人の生活が不便になった
- キ. 島を離れる人が増えた
- ク. 地価が高騰した
- ケ. 通り過ぎるだけの人が増えた
- コ. 好ましくない影響はなかった
- サ. その他 具体的に：

問22 観光客と関ることがありますか？

- ア. 仕事の上、毎日のように関わっています
- イ. 仕事の上、ときどき関ることがあります
- ウ. 道を聞かれるなど、生活で関ることがしばしばあります
- エ. 道を聞かれるなど、生活で関ることがときどきあります
- オ. 関ることがありません

問23 他所からの親戚・客を案内するとき、生口島も含めてしまなみ海道沿いのどこにつれていきますか。つれていく場所・施設をご記入下さい。

問24 ご自分が余暇のときに、生口島も含めてしまなみ海道ぞいの島々にてかけることがありますか。そのとき、たずねていく場所・施設をご記入下さい。

定期的にたずねる場所・施設：

年に数回たずねる場所・施設：

年に1, 2回たずねる場所・施設：

数年に1度程度たずねる場所・施設：

一度訪ねたことがある場所・施設：

問25 瀬戸内海で泳ぐことがありますか。

- ア. 昔泳いだことがあります、今は泳ぎません
- イ. 夏に週1回以上泳ぎます
- ウ. 夏に数回泳ぎます
- エ. 夏に1, 2回泳ぎます
- オ. 泳いだことがありません

問26 あなたは年間何回くらい旅行に出かけられますか？

日帰り旅行：

- ア. 年5回以上
- イ. 年3、4
- ウ. 年1、2回
- エ. 数年に1度程度
- オ. めったに日帰り旅行はしない

宿泊旅行：

- ア. 年5回以上
- イ. 年3、4
- ウ. 年1、2回
- エ. 数年に1度程度
- オ. めったに宿泊旅行はしない

ご協力ありがとうございました。

著者紹介

浅野 敏久 (あさの としひさ)

広島大学総合科学部助教授。

東京大学大学院理学系研究科修士課程 (地理学) 修了 (1988年)。株式会社三菱総合研究所勤務を経て、1996年から現職。専門は人文地理学。地域開発と環境運動との関わりや、地域づくりへの市民参加に関心を持っている。これまで霞ヶ浦や中海・宍道湖など水域の開発と環境保全をテーマとした研究を行ってきた。

フンク・カロリン (Dr. Carolin Funck)

広島大学総合科学部講師。

ドイツ生まれ。フライブルク大学地学部人文地理学修士号 (1986)、博士号 (1998)。1987年来日。松山大学、神戸学院大学、立命館大学でドイツ語講師を務めながら日本の農山漁村における観光開発について博士論文をまとめた。1998年から現職。専門は人文地理学で、研究は観光地理学、特に観光開発と地域社会、環境の関係を中心に行っている。

【瀬戸内観光地域の形成と変容 - 宮島としまなみ海道を事例として -】

総合地誌研 研究叢書 36

平成13年 1月25日 印刷

平成13年 1月31日 発行

著 者 浅野 敏久

フンク・カロリン

発行者 広島大学総合地誌研究資料センター

〒739-8522 東広島市鏡山1丁目2番3号

TEL 0824-24-6659 FAX 0824-24-0320

印刷所 株式会社ニシキプリント

〒733-0833 広島市西区商工センター7丁目5番33号

TEL 082-277-6954

ISBN4-938580-18-7